

東アジア連続講演会

境界と路上を考える・特別企画

沖縄「復帰」五〇年という問い

東京外国語大学 国際日本研究センター主催
講演録

発行：東京外国語大学国際日本研究センター

2024年5月

沖縄という場所からアートを考える

佐喜眞 道夫
(2022年6月26日)

こんにちは、佐喜眞です。私が沖縄で美術館というものをなぜやっているのかということなんですが、いろいろ考えますと、私は沖縄戦のときに、家族が疎開した熊本で生まれ育ちました。そこで、戦争のこと、沖縄のこと、いろんなことを感じながら育ったと思います。私が小学校の頃、1946年生まれですから1955年ぐらいの話なんですけども、その頃、子どもたちが授業に退屈しますと「先生、戦争の話をしてください」と戦争の話をせがんだんですね。そうしますと、男性の先生はほとんど「戦地」帰りですから、自分の戦争体験を踏まえて話をしてくれました。これは子どもたちに話すせいなのか、面白おかしく話をしましたね。現場体験を踏まえてますから、私たちはとても面白かったですね。村の大人たちの話もそういうのが多かった。そういう話をたくさん聞きました。小学校2年の夏休みに沖縄に帰省したとき、食事が終わって、茶飲み話の中で聞く親戚のおばたちの沖縄戦の体験談というのは、淡々と事実を語っていく。面白おかしい話ではありませんでした。そして、最後には、私のおばたちはよくけんかになるんです。熊本からせっかく大事な甥とか姪が帰ってきてる。それなのに、同じ場所を逃げたのに違うこと言ってるっていう、きょうだいげんかになるんですね。何言ってんのと。姉さんこそウソ言ってるっていう、真剣な大げんかになる。最後はぶんぶん怒って、毎日帰っていくというような、困った風景がありました。

その時はなぜそうになってしまうのか理解が出来ませんでした。1993年に解決しました。ひめゆり平和祈念資料館の開館直前の話ですが、明日からたくさん入館者が来る前に、それぞれ何を話すかというのを話をしてみましょと、互いに自分の体験談をみんなの前で初めて話したらいいですね。そうしましたら、各々先生が語る体験談が全部違う。同じ場所を逃げたのに違う。明日からたくさん入館者が来るのに違うことを言うてしまう。どうしよう、ということになったんですが、ある先輩の先生が、「皆さん、私たちは確かに同じ場所を一緒に逃げましたと。しかし、その行動をまとめたのは、あの漆黒の闇の中で自分一人でまとめたんです。それぞれが真実を語ろうと思っているわけですから、みんな正しいところから出発しましょう」と言って、ひめゆりの証言が始まったというんですね。自分のおばたちを、無教養で最後にケンカしてしまうし困ったもんだ、と思っていましたが、私のおばたちにはそういう知恵者がいなかった。要するに、極限の体験というのは、融通が利かないんですね。修正が利かない。だから徹底して自分が記憶してることを、頑として守るんですね。自分の尊厳をかけて守るっていうように感じました。

それから、学生時代は東京でしたけども、沖縄の私のわずかな見聞を踏まえて話をしますと、学友との間でどんどん距離ができていきます。そして、最後は必ず誰かが言うんです。「佐喜真な、今度の戦争で全国焼け野原になったんだよ。沖縄だけ、ひどい目に遭ったんじゃないでしょう。沖縄だけがひどい目に遭ったような言い方はするな」と言うんですね。みんなそう思ってます。私はちょっと待ってくれと。日本本土が体験した空襲と、沖縄が体験した地上戦は全く違うんだということを説明しなければいけない立場に立つんですが、同じと思ってる学友たちに、どう違うのかということを具体的に説明するだけの知識が当時はなかったんですね。頭の中では空襲と地上戦の違いはハッキリ解っていますから私は、非常に悔しい思いをしていたんだと思います。

それから、東京の大人たちは、私が沖縄の体験を踏まえた話をしますと、「君、そういう言い方は通じないよ。もっとわかるような表現をしろ」と地上戦を知らないヤマトンチュ(大和人)からご指導を受けるんですね。そういう体験をたくさんしました。この沖縄と日本本土の中にある深い溝といいますか、認識の断絶ですね。言葉では通じないもどかしさを感じたんですね。圧倒的多数派の日本人に対してそれをどういうふうにして伝えていったらいいんだろうか、考えざるを得ませんでした。

私は小さい頃から芸術といいますか、アートが好きでしたから、そういうのを使えば何とかなるのかなという思いは、わずかながらありましたね。私の美術体験を、少し話しますと、私の父は熊本の田舎、上益城郡甲佐町というところで、医院を開業していたんですが、熊本にはまだその頃は美術館がありませんでした。だから、福岡県の久留米市のブリヂストン美術館、石橋記念美術館ってありますけども、そこまで行って見るんですが、父は非常に忙しい田舎の開業医でした。それを時間をわざわざ取って、久留米まで行くと。久留米の美術館には青木繁の絵がたくさん並んでいます。青木繁に関する知識を、父がありったけの話を車の中で、私にしてくれるわけです。尊敬する父の話ですから私は、一生懸命聞いてますよ。そして美術館に入って、青木繁の『海の幸』だとか、大正ロマンの絵の前に立ちますと、小学校4年生ぐらいだったと思いますけど、さっぱりわからない。何を描いた絵なのか、さっぱりわからん。しかし、一生懸命見て帰るという体験を何度かしましたね。そして、それが大学生ぐらいになって、奈良についての文章を読んだときに、青木繁の『天平時代』という絵が突然頭の奥からわき上がってくる。それには大変驚きました。十数年たって出てくるそういう記憶のリバウンドというか、芸術っていうのは非常に深いところに入っていくんだなという経験をしました。

それから、私は中学校2年のときに、私の母が亡くなったんですが、5人きょうだいの一番下が私です。母は私を特別にかわいがったような気がします。本当に大事な、私にとっては温かい母が死んでしまうと、寂しいもんですから、仏壇には母の写真がありました。寂しくなると、仏壇に行って、写真を見ながら、ただただ座ってるわけです。仏壇の隣に父が買ってきた広隆寺の弥勒菩薩があったんですね。この広隆寺のレプリカを見てみると、何か心の中の冷たい氷の塊といいますか、寂しい、それがじわーっと溶けていくという不思議な

体験をしたことがあります。これは何だろうかと思いながら、その体験を自分で自ら味わってたんですが、これは母に対する私の思いなのか、弥勒菩薩の慈愛の造形なのか、これは何だろう、何だろうといまだに思ってます。そういうことでこの弥勒菩薩の写真ですけども、中学校の修学旅行で私が買い求めた私のコレクション第1号です。

私は、丸木先生と出会う前に、いろんな絵のコレクションをしていました。最初は、日本の民衆文化を豊かにしたのは浮世絵ではないか、と考えまして集めていました。そして、浮世絵の背景を知るために歌舞伎も大相撲も見に行きました。落語も聞きに行きました。そして、その頃私の仕事が鍼灸師でしたから、江戸文化にどっぷりつかった時間を過ごしていたわけです。あるときふと、歌舞伎を見、落語を見、遊び呆けてる江戸の旦那衆と全く同じことをやってるんじゃないか？と思ひまして、私は大変恥ずかしくなり、これは違うなど。沖縄の私が集める絵は、もっと社会や人間の本質的に迫るテーマでなければと考えたときに、ぶち当たったのがこの上野誠さんの版画でした。

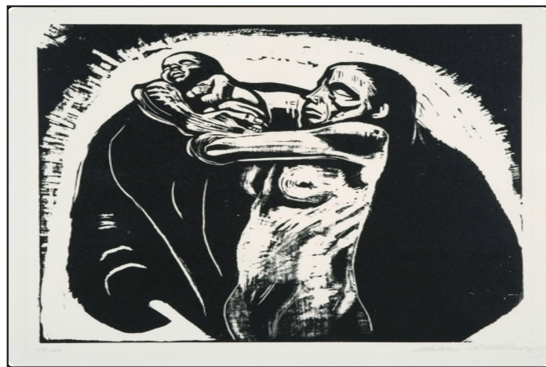


上野誠は、長崎の原爆をテーマに生涯彫り続けた版画家ですけども、この人非常にまじめな方で、長崎の原爆記念病院を訪ねて行って、長崎の原爆の様子を聞き取ります。そして、千葉のアトリエに帰って作品化する。自分の作品が生き地獄を見た人たちに耐え得るだろうかということで、長崎記念病院の患者さんのところへ持って見てもらう。そういう態度で創作をした人です。これは広島三部作といいまして《被爆した男》《被爆した女性》《鳩》ですね。この3点を1959年に世界の版画大会に出品して、金賞を取った作品です。そのとき、もう一人の金賞はピカソだったそうです。上野誠の鳩は特に情感に満ちています。大事な証言をしてくれた人たちがどんどん原爆症で死んでしまうんです。その痛恨の深い思いを込めて、上野誠さんは鳩の作品をつくりましたが、この鳩の作品は非常にやさしくて、情感に満ちたすばらしい作品が多いです。私は上野誠の作品は鳩のコレクションから始め、160点ぐらい集めました。

それから、今年は復帰50周年ということですが、上野誠さんは、鳩がリュウゼツランのある島——沖縄ですね——、そこに荒波を越えて飛んでいくという作品を1973年につくりました。「日本の平和思想」というものは、「地上戦を体験した沖縄」の平和思想とぶつかって、もういっぺん再生すべきだ、日本の平和精神は沖縄から学ぶべきなんだということを表現

しています。当時、岡本太郎さんや大江健三郎さんが同じことを言ってます。

上野誠の版画を通して、私はケーテ・コルヴィッツの作品とぶつかりました。これはケーテ・コルヴィッツの『犠牲』という作品ですが、魯迅の紹介で大変有名になった作品です。魯迅は学生たちと一緒に反戦運動のための木刻運動をやりますが、そのときの仲間が国民党の赤狩りに襲われて、その日のうちに銃殺されるんです。ドイツ語もできる非常に優秀な青年だった柔石と『北斗』という雑誌を発刊するところだったんですが、魯迅は非常に悲しんでそのことを書くことができなかった。代わりに鎮魂の思いを込めて、このケーテ・コルヴィッツのこの作品『犠牲』を載せたんですね。そうしますと、みんながその意味を理解したというふうに、魯迅は書いてます。その文章を、私は学生時代に読みまして、この国民党の白色テロを一枚の絵でその内容を一瞬にして伝えてしまうのは、どんな絵だろうかと、私はそれを見たいと思いました。そして、いろんな思いを、ああだろうかと、こうだろうかと、たくさん想像しました。



そして、それから十数年たって、この版画を銀座の秀友画廊というところで初めて見たとき、私はもう腰ぬかすぐらい驚きました。私が想像していたいろんなことは、全部「雑念」といいますか、「ゴミくずみたいなもの」で全部吹き飛びました。非常に簡潔な表現。要するにお母さんが子どもを国家に差し出してるわけですね。その差し出してる目を閉じたお母さんの態度、後ろの黒い背景はお母さんの絶望といえますか、デッサンの段階では、精神が崩壊していくのを図案化しています。お母さんは息子を国家権力に差し出してるんですが、実は右腕の肘が「反抗」の形でしょ。これは、お母さんは潜在的にはこの息子を兵隊として国家に提供するのを拒否したいんです。しかし、ファシズムの文化状況や強大な抑圧やマインドコントロールなどいろんな関係で息子を提供してしまっていることを描いてる。非常に悲惨な事柄です。しかし、後ろの、これは虹なんですね。虹というのは、ヨーロッパの図像学では神の祝福を意味します。このお母さんと赤ちゃんは本質的には神によって祝福されている存在ですよといっています。ケーテの表現というのは、非常に多重的で深いです。



私は芸術というものがとんでもないことを伝えてしまうということに驚愕したんですね。私の心がケーテの作品にわしづかみにされた作品の一つです。

これは『死んだ子を抱く母』という作品ですが、最初見たときは、怪獣か夜叉か何かが子どもを食べてるような、そういうものすごさを感じます。しばらく見てみると、言葉を失し

ない、しーんとなって深い悲しみとのあまりお母さんのあごが子どもの胸に突き刺さります。強烈な悲しみですね。自分の子どもが死んでしまったら、こんなふうに母親は悲しむのかと、極めて動物的に、そして人間的でこのように強烈な母子像を私は初めて見ました。こんな力強い作品を作るのがケーテ・コルヴィッツです。女性です。大変驚いた作品です。

『死んだ子を抱く母』の版画制作は1903年です。このブロンズの母子像は1937年です。ケーテは同じテーマを長い時間、実に長い間、考えて考えて作品を深めていくタイプの作家です。彫刻では死んだ息子を母親が胸に包み込んでいます。母子とも深い悲しみに沈んでいくようです。1937年というのはヒトラー政権下ですね。この1933年にヒトラーが政権を取りますが、こういう真実を表現する作家は、ヒトラー政権下では、「退廃芸術家」と烙印を押されて、制作も禁止、発表も禁止という弾圧を受けました。ケーテ・コルヴィッツはドイツで最初の女性で大学教授で芸術アカデミーの会員でもあります。それをすべて剥奪されて、そして、制作禁止の処分を受けます。ところが、ケーテ・コルヴィッツは制作をやめないんですね。そうしますと、ゲシュタポ、特殊警察が来て、君はなぜ制作禁止処分を受けてるのに作るんだと尋問します。ケーテは、若者がどんどん殺されていく時代に対して、私は芸術家として手を差し伸べる権利があると。私は制作をやめないと言い切るんですね。そうすると、ゲシュタポは、そうか、そういう考えだったら、君は次は強制収容所送りだと、死刑だと言って帰ります。ケーテはぞっとします。じゃあ、次、ゲシュタポが私を迎えに来たとき、そこで私は自決するという覚悟をして、こういう作品を作り続けました。ケーテはナチが滅ぶ2週間前に78歳で亡くなりました。しかし幸運にも作品は残りました。戦後、ベルリンのケーテ・コルヴィッツ美術館の女性の副館長さんですが、ドイツはこの像で戦没者を追悼しましょうということを提案して、すると、提案がとおって、ドイツではこの『ピエタ』という小さなブロンズの作品を2mに拡大してノイエ・ヴァッヘという無名兵士の記念館、その中央にこれを据えて、この像でもって、戦没者を追悼してるそうです。

その話を、私のところにやってくる若者たちに「ドイツはこの像でもって、戦没者を追悼してます。死んだ息子をお母さんが抱きしめて悲しみに沈んでいる像ですね。この像だったら、ナチに散々蹂躪されたポーランドも、フランスも、ドイツは先の戦争を真剣に反省してるっていうことがわかるでしょう。この形でもって戦没者を追悼してるから、現在ドイツはEUの中心になれるんだと思う」という話を私はするんですよ。それに対して、日本は明治から依然として天皇の軍隊を祀る靖国神社で追悼し戦後もなにも変えていない。この話を、この像の前で高校生に話をしますと、瞬間でその問題の本質がわかります。

それから、これは、私は、今出している作品ですけども、『種を粉に挽いてはならない』という1942年の作品です。「種を粉にひいてはならない」ということは、もうそのものずばり、青年たちを殺すなど言ってるわけですね。ナチの時代にこのスローガンを発表するのは、これは確実に死刑になります。ですから、ケーテはこの作品は発表することはできませんでした。しかし、作品を作るんですね。アトリエに12枚残されていました。この頃、1942年のケーテの日記を読みますと、もう死にたいと。ヒトラーの愚劣な政治にうんざりして

死にたいと、体力も落ちたのでしょう、弱々しい言葉が並んでいます。ところが、ケーテ・コルヴィッツが、子どもたちの命を守れという作品を作りますと、こういう恐るべき力強い作品になるんですね。これはやっぱり本当に命がけの仕事というのは、こういうもんかなと思って大変感動してます。この作品をいま私はウクライナへのメッセージとして、美術館に展示しております。

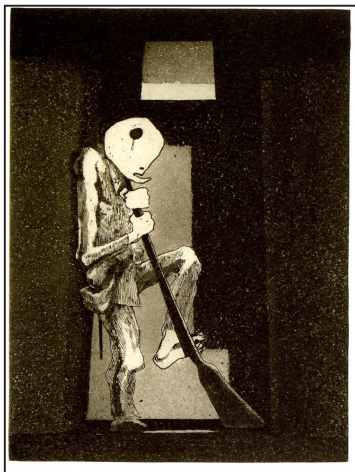
それから、これは、浜田知明さんの『初年兵哀歌』という作品ですが、浜田先生は東京美



術学校卒業と同時に兵隊に取られまして、軍隊生活をするわけですが、本当にもう死ぬことしか考えていなかった。死にたい、死にたいと、浜田知明先生も思っていたとおっしゃいます。これは『初年兵哀歌』(シリーズ)で、初年兵が眠ってる姿ですけども、よく見ますと、イモムシがピンで留められたような状態ですね。要するに、眠りこけて帝国軍人としての精神も訓練も全部忘れ去って、一つの生命体として、背中を丸めて睡眠をむさぼっているんですね。その姿はイモムシが転がって、しかもピンで留められてるように見えたわけですね。これは、浜田知明さんの心象風景ですが、これを見たとき、私は非常に衝撃を受けましたね。私が小学校時代に聞

いた男の先生たちの戦争体験の本質は、こういう姿だったのかというように思ったんです。大人たちは大体戦争の話は美化します、正当化します、うそを言います。そういうことからすると、こういう誠実な芸術作品を見ると、戦争時代の心の奥底の悲哀がヒシヒシと伝わってきて、ドキッとした作品です。これが『初年兵哀歌』の第1作です。

それから、これは『初年兵哀歌』の「歩哨」という作品ですけども、あるトーチカで、日本



兵の歩哨が夜中に一人で番をしてる、そのときに、自分の人生に絶望してこの若い兵士は自殺したんですが、どういうふうにして自殺したんだろうかと、浜田先生は想像して、足の親指で銃の引き金を引くというかたちにしてありますが、顔はもうすでに骸骨になってしまってますよ。骸骨の目から涙が出ています。浜田先生の本を読みますと、この涙を入れるか入れないか、涙を入れるとセンチメンタルになって作品の力が弱まってしまうんじゃないかということを、随分考えたを書いておられますが、私はこの涙、長く垂れ下がった涙が、ぐっと情感が出て非常にいい作品だなと思います。若い兵士たちの哀しい絶望の姿がよく出ています。これも『初年兵哀

歌』の「風景」という、強姦されて、大地に放置され局部に棒を突っ込まれてた妊婦の後方、遠方には日本の兵隊が行軍で去っていく姿があります。浜田先生は、行軍は大陸を来る日も来る日も歩かされる。そのへとへとのときに、彼はやっぱりデッサンするんですね。

そして、こういう風景を何回も見ると、わずかな紙にデッサンしそれを元にこういう作品を作られたわけですが、これは非常に軍隊の本質を表していると思います。この局部に突っ込んだ棒は、硫黄島のアメリカの兵士が立てた旗の角度とそっくりでしょう。制圧したっていう象徴ですよ。『そういうものとして強姦する』これは美術的にも相当の力量がなければ作品にならないだろうと思います。こういうものを描きますと、大体いやらしくなってしまうんですね。遠景の問題、この足の黒い部分、反対側の明るい部分とか、非常に計算された見事な作品になってます。浜田先生は、戦場には男も女もミケランジェロの彫刻の様に死んでいたというふうに書いておられます。要するに戦場にあっても浜田知明っていう人間は、芸術家としての目を失わなかったんですね。芸術家としてのもう一つの目を持ち続けることによって正気を保ったんじゃないでしょうか。

これは、『ボタン』っていう核戦争の問題を描いたものですが、少しく笑ってしまうような部分もありますよね。この方は風刺画が得意です。ユーモアを交えて描くんです。一番右側はアメリカの強欲な権力者でしょうね。真ん中はこれトルーマン大統領です。次は現場の兵士です。脳みその様子が面白いです。この権力の中核はすさまじい思考力で世界を考えています。ところが、トルーマン大統領になりますと、非常に小さくなり単純になりますね。現場の兵士になると、脳ありません。手がすぐボタンにかかっています。即実行です。こういう「命令系統」の段階をデフォルメして、ユーモアを混ぜた作品を見ますと、私たちはこの世の真実をゾッとしながら理解することができるわけですが、今でもこういう恐ろしいことが世界中で進行しています。

それから、浜田先生の作品をコレクションする前に、私はジョルジュ・ルオーの作品を160点か170点ぐらい集めていました。そういうコレクションを10年ぐらいしてきた段階で、1984年頃に丸木位里・丸木俊さんが沖縄戦と取り組んでるという新聞のニュースを読みまして、私はもう本当に爆発的な喜びといいますか、学生時代の学友たちを連れていって、「この絵を見てくれ。この絵の中に俺が言いたいこと全部描いてある」という絵がこの世に出現したと思ったんですね。私はその頃、絵の知識は何もありませんでしたから、丸木位里・丸木俊という画家を知りませんでした。『原爆の図』も見たことがありません。『沖縄戦の図』は今描いているわけで、見たこともない。ですから、私の頭の中には何もありませんが、ただただ、芸術に対する根拠のない尊敬の念というんでしょうか、あの丸木さんが沖縄戦を描いてる。これはもう間違いないと思ったんですね。そして私は、沖縄の人間としておふたりにお礼がしたい、とまで思いました。今振り返っても不思議です。

新聞記事で丸木先生の講演会があると知って、私は、水道橋のYWCA会館だったと思いますが、出かけていきました。そうしましたら、丸木俊先生が、この会場の中に、沖縄の人いらっしゃいますかと話をされました。何人かが手を挙げました。私も恐る恐る手を挙げました。そうしましたら、丸木俊さんは、「私は沖縄の方に、日本人として謝らなければなりません」と深々と頭を下げたんですね。明治政府が沖縄に対してやったこと、今度の戦争で県民を盾にして戦い続けたこと、そして戦後の沖縄に対して、日本がまた安保条約によ

る米軍基地を押しつけて悪いことばかりやってきたと。その事実を、私は日本人だけでも、全く知らなかったと。そのことをお詫びしなければなりません、とおっしゃる。私は、そのストレートな態度に大変驚きました。歴史的な誤りを自分の誤りだと言って謝る日本人に初めて会ったんです。で、興味持ちましたね、これはどういう人だろうかと一生懸命話を聞きました。そうしますと、丸木俊先生は、私は画家だけど、今は目腐ればばあでございまして。朝起きると、目やにがべったりついて目が開きません。だから、ぬるま湯で目を洗わないと、目が開かない。今、眼科に通ってるんだけど、全然よくならないと。このままだと私は目が見えなくなるでしょう。目が見えなくなったら、私、画家だけど、絵は描けなくなります。しかし、私は言いたいこと山ほどあるから、目が見えなくなったら、全国を講演会して回ろうと思うとおっしゃるんですね。

私は、その頃、鍼灸医やってまして、東洋医学的に丸木さんの話を聞きながら診断すると、しし首で首が短くて、筋肉質で、ずんぐりむっくりして、そして、目が見えなくなったら、全国講演会して回ると話している。体力も気力もある。こういうタイプの方は体力以上に頑張るんです。頑張ってしまうと、背中がどんどん張ってくる。背中がぱんぱんに張ってきて肩こりも高じる。それが続きますと、一晩の睡眠では疲れが取れない体になります。それが高じますと、動眼筋といいますか、目のまわりの方々まで肩こり状態になる。そうしますと、目に症状が出てくるんですね。俊先生の頑張る姿から考えると、そういうタイプではないだろうかと診断するわけです。そういう体であるならば、これは鍼灸で治ります。ですから、丸木先生と親しい人に、あの目は私の鍼で治るかもしれませんよ、という話をしたんですね。そうしましたら、半年ぐらいたったときに、「佐喜眞、おまえに鍼治療してもらいたいとおっしゃってる」という連絡がきました。私はもう本当にうれしかったですね。念ずれば通ずるといいますか、非常にうれしい思いで自分の鍼灸医学に対する知識も技量も全部吟味し直しまして、丸木先生のところへ訪ねていきました。そして診断しましたら、私の見立てどおり、しっかり眠れば治る体でしたね。ですから、先生、これは治りますよ。今、大事なことは、しっかり休むこと、眠ることです。緊張をほぐして眠れる治療を行いますから、しっかり寝てください」というふうにお願ひしたんですね。そして3回ぐらい治療しましたら、背中の緊張が取れて、ぐっすり眠れる体になりました。そうしますと、目やにもどんどん取れていくんですね。俊先生は、奇跡が起きた！ぐらい驚くんですね。沖縄の絵を描いたら、沖縄の青年が来て、自分の目を開けてくれたと。私から言いますと、病気ですらないわけです。寝れば治るんですから。非常に幸運な出会いでしたね。

ですから、丸木先生は私を大変信頼してくれて、いろんな話が弾んでいったわけですが、あるとき、位里先生、俊先生と3人だけで食事をしてるときに、実は『原爆の図』は広島に持っていきたい、『沖縄戦の図』は沖縄に持ってきてきたいんだと。広島県と沖縄県に投げかけているんだけど、広島も沖縄県も自治体はどこも手を挙げないというふうにおっしゃるんですね。そのとき位里先生は、わしは広島の間人じゃけん、広島はこういう県だとうわかつと。しかし、あれだけの体験をした沖縄が、俺の絵を受け取らんとするののかと言って、

非常に寂しそうでした。実に寂しそうな顔をされておりました。私にとっては、この絵は私の言いたいこと全部描いてあるような絵なんですから、先生、私やりましょうかと言っちゃったんですね。そしたら、位里先生、「オーッ、やってくれるかと、ちょっと来てくれ」と言って、収蔵庫に私を連れていってくれました。そして、沖縄で描いた絵をぼんぼんぼんと五つぐらい重ねて、これをもらってくれて言うんです。大変高い絵です。私はびっくりしましたよ。これもらったらおしまいだと。ちょっとぞっとしましたが、しかし、位里さん目から覚悟を感じましたので、わかりましたと。そのとき、私の背中を電気が走りましたね。ばーんとね。私はそこで決心したんだろうと思いますが、これは何が何でも作らんといかんということで、沖縄の建築家の真喜志好一さんに頼みました。東京に来てもらって私のコレクション、それから丸木美術館に出かけて、この『沖縄戦の図』を入れる美術館ですと。それをいろいろ考えてほしいとお願いしたら、真喜志さんは、即座に、この厳しい絵を入れるのだから、佐喜眞さん、緑があったほうがいいねと。それから、近いところに御願所（鎮守の森）か御嶽があったほうがいい。それから、こういう厳しい絵を見たあと、海を眺めて、気持ちを沈めて生活空間に戻るといふことが必要でしょうと。そして500～600坪でしょうね、と建築家の真喜志さんが即座に言ってくれました。私は、緑があって、御願所があって、亀甲墓があって、海が見える、それと600坪の条件で、不動産屋さんをお願いします。そうしますと、出てはくるんですが、沖縄の主要部分は、ほとんどが米軍基地に取られていますから、沖縄の地価は高いんです。交渉を2、3回しますと、もうほとんど手の届かないところまで値段が上がってしまう。そういう経験を5、6回して、これはもうとてもじゃないが民間地で、広い土地を買い求めるといふのは不可能だなと判断しました。

どうにも万事休すだと思ってるときに、米軍基地内の佐喜眞家の墓の前が、先祖ののこしてくれた土地であることに気づいたんですね。この部分がそうなんですけど、ここを返させるしかもうないというところに、私は追い詰められてたんですね。ですから、これは1972年に本土復帰して、20年目、92年の土地の契約更新のときに、私は契約を拒否しまして「この土地を返してください、そうしないと契約更新しません」という条件闘争みたいなかたちで、防衛施設局をお願いに行ったんですね。そうしましたら、防衛施設局の職員が、いまここに出てる提供財産返還手続系統図を見せて、こういう手続きが必要ですよという。国の側にはぶん取っておいて、「提供財産返還手続」なんていうものがちゃんと制度的にはあるんですね。これはよく見ますと、一番下に、申請者の私がいます。それでたくさんの会議の一番上は何と「日米合同委員会」です。2プラス2ですね。沖縄のフェンス、これ国境なんですよね。これ見たとき、私はもうちょっと頭がくらくらしましたよ。ほおー、こういう問題になるのかと。このエベレストみたいな山を登るしかないんだなということで、私は防衛施設局をお願いに行きました。

そうしましたら、防衛施設局の事務所の前に沖縄出身の施設局職員が立ってました。で、案内しますと言って、5階が事務所でしたけども、5階に上がるとその案内人の後ろについているのが私ですから、50人ぐらいの施設局の職員が私を一斉にぐわっとにらみつけまし

たよ。私はこれ初めての体験ですがね、非常に敵意を持った50人の視線を一斉に浴びると火花が散りますね、ばちばちと音がしたみたいな感じがしました。これには驚きましたよ。防衛施設局の職員はこういう目で私を見てるのかと。これはちょっとやそっとじゃないなということで、私は次の回からは、ちゃんと背広を着て、革靴を磨いて、菓子折りを持って行くことにしました。年に5〜6回、そういう返還交渉をしていたのですが、答えは毎回「佐喜眞さんの要請は米軍に伝えてありますと。しかし米軍返還を渋ってます」という答えを取っ換え引っ換え3年間、私はそれを聞き続けたんですね。実際問題としては、門前払いです。あきらめさせる画策してるというだけなんです。もう一つ体験談をお話しますと、沖縄の公務員で一番丁寧なのは防衛施設局です。言葉遣いも実に丁寧に彼らは対応してきます。言葉も柔らかいです。丁寧です。しかし、やることは一番あこぎなんです。凄と人間の闇を感じました。

私は国の窓口ではダメだということを3年を過ぎてやっと気づきまして、宜野湾市役所に行って桃原正賢という当時の市長に、私はこういうことを考えてます、これ公共性があると思うから、市も知恵も力も貸してほしいとお願いに行きました。そうしましたら、比嘉盛光さんという若い企画部長でしたけども、「盛光、おまえ若いから、佐喜眞くんの担当になんない」ということになって、比嘉盛光さんが私の担当になってくれました。この比嘉さんは、特殊な能力を持っている人で、普天間基地の司令官が替わりますと、自宅でホームパーティーをやる。欧米人ですから、ホームパーティーに招かれると大変喜んで、じゃあ、今度は司令官側でパーティーをやりましょうということになるんでしょうか。それを繰り返してやっていると、電話で話ができるパイプを作ってしまう、そういうことが出来る人でしたね。比嘉盛光さんが司令官に電話して、こういう青年がおるから、テーブルを作ってくれということで、いろいろ根回ししてくれたんですね。そして、テーブルができました。

そして不動産部の管理部のポール・宜野座所長のところに、2人で出かけていったんです。私は軍用地の一部を返してくれと言いました。すると、ポールさんは、何するんですかと言うもんですから、いや、美術館を造りたいと私は考えております。そしたら、ポールさんは、ああ、ミュージアムできたら宜野湾市よくなるねと、われわれは問題ないよと、米軍は問題ないよと言うんですね。私はびっくりしましたね。3年以上にわたって防衛施設局に行ってらち明かなかった問題が、たった1回の面会でポールさんの答えはOKだというんですか私はポール所長に、いやあ、もう3年以上にわたって、防衛施設局と交渉してきたんだけど、全然埒が明きませんでしたと。それなのに今日ポールさんと話をしたらたった1回でうまくいった、大変驚いたと話をしたら彼は、いや、あんなのに話をしても、この問題は解決しませんよと。米軍からすると防衛施設局っていうのは、「あんなもん」でしかないんですね。日米安保条約っていうのは、全く対等ではないんです。従属関係でしかないんですね。ですから、これは本当にいろんなことを私に教えてくれました。

たとえば今、沖縄では辺野古に土砂をどんどん埋めて、そして基地を造ってますが、当時の仲井眞知事が安倍首相と約束して印鑑を押して、その結果、あの工事が始められたんで

すが、県議会で仲井眞知事に野党が聞くわけですよ。知事はなぜOKの印鑑を押したんだと。仲井眞さんは、安倍さんが5年以内に普天間基地を閉鎖すると約束したから、私はそれを担保に印鑑を押したんだと答えると、野党は、そんな安倍さんの言葉なんて信頼できるのかと質問するわけですね。そうしますと、仲井眞知事は何を言ってんだと。安倍さんは日本の政治の最高権力者ですよ。最高権力者の言葉を信じないで、何を信用するんだというようなことを言うんですね。私はそういう問答を聞きながら、次に安倍さんがトランプと対談するとき、普天間基地の話を出すか出さないか、それだけを一生懸命見るわけですね。そうすると、普天間の「ふ」の字も言いません。そうしますと、この安倍さんの5年後の閉鎖の約束というのは、「あんなもの」でしかないのですから、全くの空文句でしかないということが解ってきますね。実に無責任な政治ということです。ペテン師ですね。私の小さな返還の実現でしたけれども、いろんなものが見えてきました。



これはドローンで私の美術館を撮ったんですが、地元の沖縄タイムス社が、「文化が基地を押し返した」という記事を書いてくれましたけども、(写真)この赤い点線が基地の中に凹んでいますね。これでよくわかんと思います。佐喜眞美術館は韓国の青年たちが沖縄に来たら、見なくちゃいけない場所になってます。ソウルで、沖縄で米軍基地を取り戻して美術

館をつくった人がいるよと話をしますと、そんなことはあり得ないと、個人が米軍基地の用地を取り戻すなんてそれは考えられないと。じゃあ、行ってみようと来てみますと、実際に基地を押しつけて美術館が建ってますから、心底驚くんです。韓国の青年たちは、SNSを発信して、多くの人が共有して、韓国から多くの青年たちが、この場所を見に来ます。ですから、私はハングルで案内パンフを作りました。

それから、この土地が返ってきて、どういう美術館を造るかというのが、私のテーマになり



ますけども、私は沖縄戦の図というものを沖縄に入れる美術館ですから、沖縄に徹底してこだわって造ってほしいということを、建築家の真喜志さんをお願いしました。そうしたら、彼は、じゃあ、「6月23日には沖縄慰霊の日の日没線に合わせましょう」と言ったんですよ。びっくりしましたね。そんなことできるの？と言いましたら、6月23日は夏至でしょうと。夏至だから太陽と地球が決まる日ですよ。西側の窓に少し小さな30センチ角ぐらいの窓を開けて、そこに太陽が入るように設定してあります。階段も6段と23段になっています。建物に祈りと沖縄戦を象徴させる意味を持たせました。6月23日の午後7時前後にはこういうふうに太陽が、ちょ

うどこの穴に入るんですね。それが、これは今年の慰霊の日の写真ですが、みんなで集まってるんですね。非常に不思議な雰囲気がある美術館の屋上で醸し出されます。この日だけは夕焼けではなくて、日没といいます、死者たちが黄泉の国に帰っていく、そういう思いの夕焼けになります。非常に厳粛な雰囲気になるんですね。

それから、『沖縄戦の図』ですが、先ほど申しましたけども、これは沖縄戦というものがどういう戦争だったのかということを、非常に厳しく捉えて丸木さんは描きました。沖縄戦というのは、硫黄島のあとの戦争です。硫黄島では、日本軍は陣地構築で敵を誘い込む持久戦と遊撃(ゲリラ)戦でした。ですから、攻め込むアメリカ側も非常に難儀したといいますが、それに鑑みまして、沖縄戦ではアメリカ軍は、日本軍の死体を最初から一人一人数えていっています。首里城の下の日本軍司令部を攻めた5月の末の段階では、アメリカ軍は6万3000名の日本兵の死体を確認しています。6万3000名というのは、日本軍全体の7割を超えています。3割の兵隊死んだら戦争を遂行できなくなるというのは世界の基準です。7割というのは、その2倍を超えています。完全な敗北です。ですから、アメリカの将軍たちは、司令部を攻め込んだときに、当然日本の司令官たちは手を上げて降伏してくるだろうと想定したでしょうね。ところが、入っていったら、もぬけの殻でした。日本の司令部は沖縄県民がびっしりと避難している南部に敗残兵同然の状況で県民の中に潜り込み、県民を盾に戦争を続けたわけです。ですから、沖縄戦というのは、想像を絶する悲惨な戦争となりました。「軍隊は住民を守らない」ということを証明してしまった戦争だとよくいわれていますが、特に天皇の軍隊というのは神の軍隊ですから残虐です。しかもこの牛島中将、長参謀長というのは南京虐殺をやった部隊ですね。南京であれだけの虐殺をしますと、やっぱり人格、人間性が壊れています。その部隊が沖縄で県民の壕を奪うとか、命を奪うとか、食料を奪うとか、これは平然とやっただろうと思います。南部戦線の最後の3週間で9万3000名の県民が虐殺されました。その地獄をどう描くかということなんですが、丸木さんは、そういう戦争を決定した政治家や戦争を遂行した軍人を1人も描いていません。ここで描いてるのは、女性と子どもとお年寄りです。すなわち戦争で一番に殺されていく命の立場から見なければ、戦争の本質は見えてこないという視点です。東京大空襲から半年間で日本の大部分の都市が焼き尽くされましたが、落とされた爆弾の総量は日本全体で16万800トンです。ところが、国土の0.6%しかない沖縄に、20万トンです。地形も変わり人間も吹き飛んだのです。沖縄で決着をつけるという思いで米軍は54万8000の兵を投入したんでしょうね。沖縄戦では、特に住民の死体はほとんどが体が飛び散っていたのですが、丸木さんは、手足もあり、美しい着物を着せて描いています。これはどうしてこういう表現をしたかといいますが、人間の尊厳性の問題ですね。人間の本来持つ尊厳性というのは、どんなことをやっても、ど



んなにやっても奪い去られるものではないんだという思想で美しく描いてあります。

それから、もう一つ非常に特徴的なのは、戦争に巻き込まれていった人たちの目が入っておりません。瞳です。人間の顔を描くとき、一番大事な目を入れておりません。この絵で目が入ってるのは、この真ん中の真っすぐ立ってる少年と妹と赤ちゃんですね。小さな子どもたちには目を入れています。お兄ちゃんは背筋を伸ばして実に真っすぐに真正面を向いていますけども、しっかり見て、考えて、記憶していつてほしいという思いがここに入っています。この妹が着てる着物の柄は、ツバメです。このツバメの衣装を着てるということは、地上戦を体験した沖縄の人たちはそれを発信していつてほしいと、戦争のことをよく知らない全国へ、全世界へ発信していつてほしいという画家の思いが、このツバメの衣装には込められてると思いますね。

それから、もう一つ、この絵では、大人の人が立って茫然として見ていますが、これは丸木位里さん、俊さんの会話を総合しますと、戦争というのは、相手を敵にして自分の国の正義と、文化、伝統を守るためと称して社会全体で一つの思想で染まってしまう。しかし、そのような群集心理の姿というのは、人間の本来の正しい姿だろうかと、この女性は呻吟し、呆然としている。要するに、当時で言うならば、非国民ですね。非国民のすすめ、群集心理の感覚から距離を持つ人間が必要なんだということを、ここに描いてます。それから、絵の一番右の下には、骸骨がありますけども、この中に右側に丸木位里先生、左に丸木俊先生の肖像を描いてます。すなわち、私たち2人の画家は、この沖縄戦の図を描くにあたって、死んでいった人たちのところに自らの身を置いて描きましたという思いを表明しています。

それから、最近ちょっとうれしいことがありました。『沖縄戦の図』を見て、小学校2年生の徳元穂菜さんという7歳の女の子が詩を作ってくれたんですね。「美術館に行きましたと。おじいちゃんも一緒、おばあちゃんも一緒、家族みんなで行きました。楽しいな」というかたちで始まる小学校2年生の詩です。しかし、よく見ると、いろんな人が死んでいたと。私と同じような女の子がじっと見ていたと。かわいそうだな、寂しいな、つらいなと、急に怖くなって、お母さんに近づいたと。お母さんは温かかった。これが平和なのかなというよう子どもらしい言葉をずっと書いていくんですが、怖い絵を見て平和がわかった、平和というものを私はポケットに入れて、ずっと落とさないで持っていきたいという詩です。とても真っすぐな目で、この絵を描いた丸木位里、丸木俊の思い、そしてこの絵のために証言した沖縄の人たちの思いの向こうの祈りといいますか、それを地元沖縄の小学校2年生の女の子が見事に、詩にしてくれました。この美術館を造ってよかったな、子どもにもちゃんと伝わっている実感を喜んでおります。

それから、今は、この復帰50周年って、復帰というのに対して、これは沖縄で、この1972年から50年間、検証してきてみますと、沖縄県民は憲法9条を持つ日本に帰れば、日本の米軍基地が減っていったように、沖縄の基地も変わるんじゃないかという幻想を持って、平和憲法の下に戻りたいと思って、島ぐるみで頑張ったわけですが、50年たってみますと、何のことはない、米軍基地は減るどころかかえって増えました。今、私の目の前にある普天間

基地は静岡とか岐阜県あたりから来てます。日本の本土の米軍基地が米軍軍政下の沖縄に移築されてしまったんです。さらには、最近で言いますと、辺野古の基地はもちろん、宮古、石垣も強行されてます。地上戦を体験した沖縄の人たちは、基地というのは標的になるというのを経験知として知っているわけです。しかし、今、安倍さんが「台湾有事は日本有事」だと有事を叫ぶと、予算が上がる。これを政治家がやる。戦争をどう避けていくかというのが彼ら政治家の仕事のはずです。非常に狂った感じがしております。沖縄はむしろ50年前よりは、さらに悪くなってる。

この50年で沖縄が変わったのは、観光客が殺到してます。年間1000万を超える観光客が来ます。1000万の観光客が来ると、どうなるかといいますと、観光ホテルは乱立します。道路は広くなりました。そして山を貫いて高速道路が出来て北部まで2時間で行くという、そこをレンタカーの高級車がががが走るという。そしてよく言われたのは、ANAとかJAL系のホテルに泊まって、トヨタのレンタカーで走り回る。で、沖縄県民の根本的な要請は全部踏みにじられたまま、いったい日本復帰とは何だったのか、これは日本本土にもう一遍軍事植民地として併合されたんじゃないだろうかというような議論が、沖縄の新聞紙面ににぎわしてるわけです。ですから、東京では戦争で取られた領土が、平和交渉によって返ってきたんだという議論をしていますが、沖縄から見ますと、これはもう全然話になりません。西山さんという元毎日新聞の記者がそのことを暴露しました。沖縄の基地がなければ、朝鮮戦争もベトナム戦争もアメリカは実行できなかったわけです。ですから、「沖縄の米軍基地の自由使用」というのは、アメリカ軍にとっては絶対的な条件でした。その基地の自由使用というのは佐藤栄作が密約を結んで認めてしまった。日本が無様な軍事植民地になってしまったというのが、西山さんの指摘ですけども、それを日々実感するのがいまの沖縄なんです。本土はほとんどそれをわかっておりませんね。沖縄と本土の認識の差がどんどん開いていってます。

これはちょっと危険なことでもありますけども、今、私たちの美術館では、『日本復帰後、



私たちの日常はどこに帰ったのか』という展覧会をしています。復帰後、若い画家たちがどういう絵を描いてるかということを見て、そして、今、沖縄の魂の在り方をみんなに感じ取って欲しい、という展覧会です。ちょっとスライドで紹介しましょうか。これは与那覇大智くんという人が描いた、向こうには美しいフジの花がたくさん描いてあります。しかし、手前には何とフェンスですね。これはフェンスを180cm、横が615cmという巨大な絵ですけども、画家はこのフェンスを執念を持って美しく描くわけですが、軍事基地と花が共存してるということを、彼は《Home-Codependency20.7-》として画題をつけていますけども、私はこの美しい風景がフェンスによって閉

ざされてるという意味で見ましたが。フェンスに取り囲まれる美術館へ来館される皆さん、

このフェンスの持つ意味を衝撃を受けて見てます。この《HOME-HENOKO = INVICTUS》という作品は、辺野古のことを描いた絵ですが、これ2019年の何月だったかな、辺野古の海に土砂が投入されるニュースを与那覇大智さんは茨城で見て、沖縄の美しい海が、これからどんどん蹂躪されていく、侵されていくという衝撃を受けて描いた絵です。この絵を描くときに、彼は常に『沖縄戦の図』が頭にあったというんですよ。沖縄戦を頭に浮かべながら辺野古の問題を描きましたと。すなわち、軍事基地の建設を強行するという先に再び沖縄戦のような戦争が舞い込んでくるということを芸術的な直感で感じ取って描いた絵です。

これは石垣克子さんというんですが、西原町から南風原町にある黄金森公園を見た風景です。黄金森は古い昔話がたくさんある森で、沖縄戦当時は激戦地でもありました。そこからの風景がどんどん変貌していく。その風景の中に現代の歴史を読み込んでるような感じがします。石垣さんが描く絵は海がとても美しいです。

それから、これは喜屋武千恵さんという人が描いた『白澤の図』という2019年の作品ですが、400年前の琉球の画家、自了じりょうという画家が「白澤」を描いています。400年前の琉球というのは、薩摩が入ってきて、琉球の社会は大混乱になるわけですが、そのとき、自了は『白澤之図』というのを描きました。この白澤というのは、古い中国の神が違わず聖獣です。脇腹に三つの目があります。向こうにもまた三つの目があります。顔面には三つの目があります。計九つの目を持って世間を歩いて、社会の真実を見極めて、世直しに挑む為政者に真実を教えて、そして社会が無事に治まっていく、というんです。私は、喜屋武さんに、400年前の自了が描いた『白澤之図』をなぜ今、21世紀で描くんですか、と質問してみました。そうしましたら、喜屋武千恵さんは、この白澤の話をしたあと、九つの目、すなわちたくさん目の目というのは、実は、私たち一人一人が真実を見極めて新しい社会を作っていこうというふうに解釈し直して、私はこの絵を今描きましたというふうに言うんですね。若い子が伝統の知恵にのっとして、未来を切り開いていくという想いを感じまして、私はこの絵を展示しました。

それから、これは同じ喜屋武千恵さんが描いた斎場御嶽せーふあーたき（琉球王国最高の聖地）の絵なんですが、斎場御嶽の実際を知ってる大変面白い絵です。これは琉球王朝の聖地ですけども、巨大な地殻変動でどういう偶然か、ここに巨大な三角形ができて、その向こうに太陽が入るんですけども、王朝時代ここは靈験新たな聖地として重要な場所でした。そして現在は、世界遺産になりました。しかし、ご覧になれますでしょうか、向こうに崖の下を通る参道があります。この道を歩いてきたのでは、この場の靈験あらたかさが全くわかりません。これはこの厳粛な三角形全体を見る距離が必要です。「場所の持つ本当の意味」をこの絵は明らかに表しています。

これは、儀保克幸さんぎほ かつゆきという方の彫刻です。彼は本土復帰の1972年、5歳の頃、大阪から沖縄に帰ってきたとおっしゃってましたが、沖縄に帰ってきたらもう驚いた。沖縄はアメリカ軍が撃ち込んだ20万トンの砲弾で地上のすべてのものが吹き飛びサンゴが剥き出しとなって真っ白くなり、ありとあらゆるところに岩がごつごつして、復帰まで道路整備も

ほとんどなされていなかった。大阪に比べると戦争の跡が残る乾いた風景を彼は見たわけです。ところが、その砂が舞うような乾いてごろごろ転がっている石の中に、何かの気配といますか、精霊といますか、そういうのを彼の心眼は感じたというのですね、彼は。石の中に入ってる本当の沖縄の姿を彫り出したいとって作りましたと。作っていく過程で、やっぱりどうしてもこわばりが取れませんか。この女の子もどこかにこわばっていると。自然な美しさを持ってるわけではない。そのこわばりというのは、沖縄の戦後の魂の一つのこわばりと思って、そのまま残してありますというふうに儀保さんはおっしゃってました。

これは、^{にぞえ}仁添まりなさんという方が描いたんですが、これは私は琉球絵画の絵師といますか、琉球王朝の絵師が21世紀に登場したという印象で私は非常に喜んでいます。沖縄の湿気の強い空気感がよく出てます。これは現代の風景を描いた絵ですね。大学院を卒業したばかりの非常に若い方です。

これは^{うら、きょうこ}宇良京子さんといって、染色を県立芸大で学んで、そのあと京都で15年ぐらい勉強をして、今、沖縄に帰ってきてこういう絵画的な染色の作品を制作してる。これは久高島の風景を染色した絵ですね。型染めだといいますが、型染とは思えない複雑で高度な技法の作品です。

これは阪田清子さんの作品です。椅子にたくさんの小さな鈴をぶら下げてるという、ちょっと何だろうと驚くんですが、鈴というのは、神社なんかへ行きますと、鈴を振り音を出してお参りしますけども、あの鈴の音というのは邪気を払うという意味と、魂を呼ぶという意味があるそうです。この二つの意味をこの鈴にもかけ合わせています。これは沖縄の南部というのは、沖縄戦の中で、集中的な爆撃を受けて、「一家全滅」という家がたくさんあるんですね。その屋敷に住む人は誰もいない。何もない屋敷跡に香炉や位牌だけがある。そしてそういう無人の風景があちこちにあるんです。非常に心痛むんですが、これ阪田さんはそれを見てお考えになったんだと思いますけど、家をたくさん、小さな家をたくさん作りまして、鈴をこの前の作品では並べたと。要するに、魂がもう一遍戻ってきて、集落が再生されるということを祈って作った作品です。

以上で私の話を終わります。ありがとうございました。

民衆の視点からの体験の継承と出版

川満 昭広×上原 こずえ
(2022 年 7 月 9 日)

上原) 上原と申します。冒頭で 10 分ほど話させていただきます。私は、1970 年代から 80 年代の沖縄の経済開発、具体的には石油タンクの建設に反対する住民運動、金武湾闘争という運動について聞き取りを行ってきました。今日の主題である民衆の視点について私自身が考えるきっかけになった 2000 年代の体験を今日は話してみたいと思います。

1996 年の SACO 合意に基づく沖縄島北部東海岸への米軍新基地建設の問題をまるで覆い隠すようなサミットの喧騒は、2001 年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロで一変しました。私は当時沖縄島中部に住んでいたのですが、米軍基地のゲートの警備、警戒は最大にまで引き上げられ、沖縄がいずれ攻撃の対象になるのではないかという不安が一気に高まっていたのを覚えています。しかし修学旅行のキャンセルが相次いだために、沖縄にいることの不安を覆い隠すような観光キャンペーンが県をあげて行われるようになりました。ただ、島全体の警戒は実はサミットや「9.11」に始まったものではなく、その直前のお祭り騒ぎのようなサミットでも警察の過剰警備の問題はありましたし、もっと言えば沖縄住民全体が警戒の対象、監視の対象とされる状況は、近現代の日本と沖縄の間に何度も生じてきたと思います。

私は 2002 年から留学の機会を得て、ハワイで学ぶことになったんですが、当時は世界各地でイラク反戦運動が行われていました。ただ、イラク戦争は始まり、アフガン侵攻も始まってしまいました。そういう世界情勢のなかで、米軍がもたらす破壊を告発している世界各地の人たちとハワイで出会いました。その後、沖縄に戻りましたが、大学を卒業する直前の 2004 年 8 月 13 日に沖縄国際大学への米軍ヘリ墜落事件があって、現場に行ってみると、機動隊は米軍を背に住民に盾を向け、メディア関係者は米軍によって撮影を妨害されている。私自身もその後数日間現場に通い撮影しようとしたんですが、武器を持った若い米軍兵士に追いかけて。そういう理不尽な状況に際して、身動きが取れず言葉も発せない自分自身に驚いてしまったのを覚えています。

そのあと友人に連れてってもらったのが、座り込みが始まっていた辺野古のテント村でした。辺野古の新基地建設に抗う運動は現在に至るまで 20 年以上、さまざまな直接行動の現場で闘われてきましたが、当時の私にとって運動現場は大学の先生や親、バイト先の上司以外の大人たちとの初めての出会いでした。働く以外の時間を座り込みという直接行動に費やしていることにとても衝撃を受けたのを覚えています。私が辺野古に週 1

回程度通っていたのは2004年夏から2005年の夏あたりまでです。2004年の秋や冬は防衛施設局が海底ボーリング調査を行うために海上に単管やぐらを設置していた時期で、珊瑚を破壊し、基地建設をさらに進めることになるボーリング調査を阻止するため、24時間体制の座り込みが海上のやぐらと陸上のテント村の両方で行われていました。

直接行動の現場では、目の前に防衛施設局職員がいて、現在では海上保安庁職員や、陸上では機動隊や警察に対峙させられる瞬間が何度もあります。すごく緊張する瞬間ですが、阻止行動の論理一つまり、なぜ私たちはここに座っているのか—を説明する、語りかけて伝える人たちの姿を何度も見てきました。直接行動の現場に集まってそうした語りを聞くことで、島に生きてきた人たちの歴史を学び、生きるための論理を練り上げてきたのだと思います。

辺野古への新基地建設計画は、世界規模の米軍再編の動きの中で強行されてきたことなんですが、基地をハワイに持っていか、グアムに持っていか、という声が聞かれはじめた時期に私は留学のためハワイに渡りました。3年間生活したハワイでは軍事基地の駐留と戦争に抗ってきた人たちと知り合い、基地の移転は返還では決してなく、新基地建設のための新たな土地の囲い込みであるということを学びました。基地を精鋭化させる再編を阻止するには島々がつながるしかない、ということで、私を含め沖縄と日本からの留学生がハワイの人たちから運動を持ちかけられて一緒に活動をしていくことになりました。

軍事演習で使ってきた島を汚染したにもかかわらず、その浄化のための予算を国がストップした場所として知ったのがハワイのカホオラヴェという島でした。カホオラヴェ島は日本の真珠湾攻撃後に米軍が領有し、朝鮮戦争のときの1953年から実弾爆撃演習が始まった島です。そこに上陸して演習をやめさせるという運動が1976年1月から始まっていました。本当にたくさんの実弾をこの島は受けていて、島が汚染されたのはもちろんなんですが、隣の島々まで爆音被害があるほどでした。島を演習から守ろうとする人たちが、海岸警備隊の警備を潜り抜けて島に上陸し、自分の身を懸けて行動を開始したのが、この76年だったということです。

1976年1月、地元紙で報道されてものすごい話題になった上陸行動の中心となったProtect Kaho'olawe'Ohana(PKO, カホオラヴェを守る会)の機関紙Aloha 'Āinaやビラ、手紙などの史料に州や連邦政府、軍との攻防が記録されています。カホオラヴェ島から戻ってこない仲間たちを探すために島に渡る途中、海で遭難したジョージ・ヘルムが所有していたものとみられる資料がハワイ大学の図書館にあるんですけれども、ホワイティングハウスや国防省、大手メディアに対して、自分たちの行動がなぜ正当なのかを説明しています。国益とか国防のために島を犠牲にすることは本当にやむを得ないことなのかを問う内容です。冷戦下において、アメリカが世界各地に覇権を広げていく中で、正当化されてきた爆撃演習に待ったをかける運動だったんですが、上陸すれば逮捕されてしまうし、爆撃演習中の島に行き自分の体を盾に演習を止めようとするには、どれほどの恐怖が伴っただろうと思うのですが、ただ当時の写真を見ると、島にたどり着いた人たちは本当に晴れや

かな表情をしています。この島を勝手に奪ったのは誰なのか。そして、この島の自然を破壊しているのは誰なのか。運動側がそういう問いかけをしていくんですが、権力側はもちろんそれに答えません。抗議する人たちの身柄を拘束し、演習を強行し続けるというのが当局の答えだと思いますが、島を守ろうとする自分たちの論理を自分たちの言葉と行動で積み上げていく、そういう「問答」が史料からは読み取れました。

何より衝撃的だったのが、カホオラウェを守る会の機関紙に伊江島を発見した瞬間でした。Okinawa とか Iejima といった文字が 1978 年の Aloha 'Āina にあり、書き手は原爆投下された長崎のサバイバーの石谷行（いしたに・すすむ）さんでした。ハワイの 1970 年代の運動を調べていて、たどり着いたのが沖縄だった。そうした「出会い」を経験していた 2000 年代、沖縄には新基地建設の圧力がものすごく押し寄せていたので、海を隔てたハワイで、そのだいぶ前から、1970 年代とか 80 年代から沖縄と運動経験が共有されていたことにすごく励まされる思いがしました。沖縄の反基地運動を世界史に接続して考える必然性を運動の記録から教わったように思います。

機関誌 Aloha 'Āina で紹介された伊江島も、やはり問答が繰り返された場所です。阿波根昌鴻さんの『米軍と農民』では、武力で抑圧してくる米軍に対して、農民たちが問答によって権力の不当性を可視化させていたと思いますし、畑を耕す人たちを殺す米軍やそれを黙認する行政が人々を乞食にしたのだと糾弾し、生きる権利を訴えてきました。2000 年代以降の辺野古や高江の座り込みでも、現場で対峙する相手、つまり機動隊とか、防衛施設局の職員とか警察に対峙して話す、語りかける、問答の瞬間というのが映像や文章に記録されています。大西照雄さんの高江の座り込みでの問答。宮城秋乃さんが、目の前の機動隊に対して、生物多様性を保持すべきやんばるで木 1 本を切り倒すことで、いったい何匹の生物が、いくつの生物の命が壊されてしまうのかを考えたことがあるかを問う瞬間もある。目の前の権力はもちろん答えないので、自ら説明して答えていくことになる。これは問答というよりは自問自答とも言えますが、こうした対立の瞬間の問答が重要なのだと思います。

史料群や映像記録も大事なんですが、その理解を促す運動の経験や関係性ももっと重要なのだらうとも思います。この対峙するときの問答や言葉について私自身は考えてきましたが、現場の運動と出版活動をつなげ、言葉を残す出版に関わってこられた川満さんに、80 年代からの取り組みについて話していただけたらと思います。

川満） 川満といいます。僕は研究者でもなくて、出版をやってきた人間ですので、しゃべりはうまくないので、あっち行ったりこっち行ったりすると思います。ご容赦ください。最初に皆さんに見せたい絵本があります。書名が『たかはもうこない』で、出版年は 1985 年です。著者は、沖縄で有名な児童文学者と画家による著作ということもあり、絶対売れると思っていましたが、売れませんでした。はじめに、本書の「あとがき」を上原さんのほうに少し読んでもらいたいなと思っています。よろしくお願いします。

上原) 抜粋して読みます。「あとがき」。「今から40年前、この小さな島々で多くの人々の命を奪う、いまわしい戦争がありました。親と子ども、そして多くの島人の強い絆を引き裂いて、破壊していったのです。人の命ばかりではありません。何百年もの年月で育ってきたガジュマルや松の木。そして、そこに生きる鳥や動物たちの命も奪ったのです。すべてを赤い土化とし、すべて黒い灰化とした戦いだったのです。そんな焼野原の中から、ひとりひとりの強い生命力と多くの結びつきとが沖縄を生き返らせてきました。家を造り、緑の植物を植え、人と人との心にあたたかい感情をよみがえらせてきたのです。でも、本当にそうでしょうか。戦後40年間に育て、ふれ合ってきた草や木のかおり、そして、多くの動物たち、それらは今、瀕死の危機に直面しております。いま一度、自然とは、人間とは、そして平和とは、私たちは考えていかなければなりません」。

川満) ありがとうございます。今の沖縄のことを子どもたちが、沖縄戦と戦後の開発の問題について学んでいくような絵本でしたが、当時は売れませんでした。

さて、わたしは宮古島生まれで、沖縄で地上戦があったことを、高校時代まで聞いたことがありませんでした。基地問題に関してもほとんど知らないまま、高校時代過ごしていたんです。けれども、那覇に出てきて、一番びっくりしたのは、6車線の道路があって、金網沿いに米軍基地があるということでした。僕らの住んでる宮古とは全く違うところだ、という印象があります。そのため今日、僕が話していくのは、これまでに自分が学んできたことを中心にして皆さんに話していくことになります。

実はよく市民運動もそうなんですけど、運動を総括しないといけないという言葉があります。僕はどっちかというと、これについて否定的な考え方を持っています。理由は、市民運動は一人一人の生き方がかわってくるからです。では、どうやって総括するのかと。このことの大事なところは何かということ、その起こったこと、起きていたことを記録して、きちんとつないでいく、そこに初めて大事な次のステップが生まれるだろうと思っています。今日、金武湾闘争を研究されている上原さんといろいろ話ができたということで、講座に参加をしました。

長いこといろいろな市民運動に参加しながら、思っていたことがあります。よく集会とか何かの学習会とかに参加すると、ほとんどの人たちは参加して、特に何か言うわけでもなくて、終わったらそのまま帰るというものをたくさん見てきました。男性も女性もそうなんですけど。それを見ながら思っていたのは、その人たち、若い頃は何をしていたんだろうと。実際、若い頃からさまざまなことをやりながら、運動の中では中心になる人たちが、いろいろな発言をされるんですけど、一人一人が、一人一人の立場で、または思いで、その講座に参加したり、集会に参加したりというところで、いろんな運動が繰り広げられていると僕は思っています。

これは実は自分のことを考えるために、整理していたものです。高校卒業して、大学でつい最近までのものをまとめたものです。僕はもともと出版という世界には関心はなかつ

たんです。しかし、きっかけがあって、突然出版社に入ってしまったんです。もちろん願書を出していますので、何かのかたちで関心はあったと思うんですけど。それは沖縄時事出版という沖縄で教材を作っている出版社で、復帰運動のときには、復帰運動史なんかを作っていた出版社です。そこで1985年、こういう本（『歩く・みる・考える沖縄』）の出版の担当になったのです。これは戦跡と基地を案内するようなガイドブックでファイル式の本になりました。当時は珍しがられて、とてもよく売れたんですね。その後、この本を普及しないといけないということになって、本をもとに講座が開講され、その事務局をすることになったのです。講座終了後には、参加者や執筆者で勉強会をすることになり、その会の名称が「平和ガイドの会」になったのです。そのうちに、家永教科書裁判の出張法廷が88年にあって、そのあたりで、自分の流れとしては、そういう戦跡とか基地問題を沖縄で学ぶための人たちのバックアップするような仕事ではないんですけど、会の事務局をになうことになっていきました。

それとこの本を作っていたときに、僕がとてもよかったのは、本を作る際に、原稿の裏とりということで、実際現場はどうなっているのかと調べに行くんですけども、行ったところが伊江島と、もう一つは金武の街と、もう一つが、コザのロックのお店ですね。そこに行ったとき、僕からすれば、本当に知らないいろんな世界があって、そこから沖縄って何だろうということを深く考えるようになったというのが、当時のものです。そうするうちに、高教組のほうから、沖縄の文学、近代現代編というのを作りたいということで、担当することになりました。自分としては文学関係の編集にかかわることになりました。そこでは、本当に自分のわからない世界がたくさん出てきて、また話している内容が非常に面白いということもあって、沖縄の近現代というのがどんな文学の世界だったのかというのを学ばせてもらったというのが、当時の感想です。

そうしているうちに1991年、『アリランのうた—オキナワからの証言』という映画の上映実行委員会にかかわります。その映画に関わったことが、住民証言の記録と表現（出版を含めて）について考える大きなきっかけとなり、今の自分自身の沖縄戦の記録運動とガイド活動のもとになったのではないかと考えています。

沖縄で90年代というのは、いわゆる70年代から80年代にかけての金武湾闘争からの大きな公害反対運動を含めての動きから、もう一つは、やんばるの自然問題を大きく取り上げて考えるようになった時期でもあります。これはどうしてかということ、1975年に海洋博があって、いわゆるたくさんの土木建築会社ができたんですけど、海洋博が終わったら、もうぼろぼろ倒産していくわけですね。彼らの一つの生活を支えるということで、何が起こったかということ、多くの林道の建築計画というのが作られて、その道路建設が始まっていきます。そうすると、やんばるの山を、南北に切り取っていくような道路建設がありますので、多くの森林が伐採されていくと。赤土が流れ込んでいくというような、いわゆる自然破壊が進んでいく時期です。

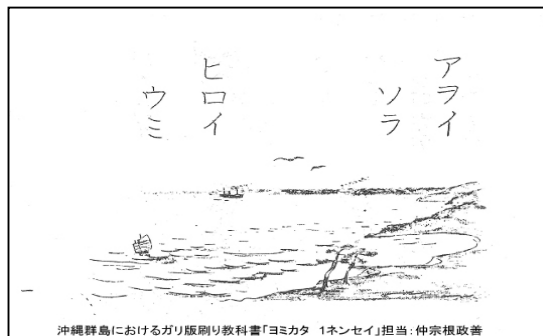
そのときにあったのが、例えば、ここにダムを作るのをやめさせるために山を買った

りとか、それを知らせるための本を作ろうということで、『消えゆく沖縄の山・川・海』という本を作ったりします。この本の前書きを沖縄大学の宇井純先生が書いてます。宇井純先生は、沖縄大学に着任する前に、沖縄国際大学の玉ノ井芳朗教授に「このままだったら沖縄が溶けてしまう」といわれ、前から行かんといけないなということもあって自分は沖縄に来たんだ、とかいています。その原稿をいただく際に、宇井先生から環境問題に関わる姿勢や沖縄の現状を学びました。

私は2003年8月に出版社を退職して、「なんよう文庫」を立ち上げるんですけど、同年の9月23日に辺野古の環境アセス問題を考えて行動する「沖縄ジュゴン環境アセスメント監視団」というものができ、その事務局をやるということになりました。そして2004年4月19日にボーリング調査を沖縄防衛局が強行するということになり、座り込みが辺野古の漁港で始まっていきます。その座り込みは、歴史的な経験でつちかわれてきたものでした。辺野古の座り込みの現場では、防衛施設局が工事をやらせてほしいと那覇から来たときに、テントの前で座って、お互いに話しましょうということになるのです。大西照雄さんなんかがよくやってたんですけど、手を肩より上げてはいけんと、これは阿波根昌鴻さんなんかの教えだということで、話し合いをしましょうというようなものが毎日のように続けました。僕らもそばで見ていながら、辺野古で、市民運動をリードしてる人たちの対話力のすごさというのにびっくりしました。彼らは絶対に防衛施設局の職員の否定はしません。その人たちとしっかりと話をするというようなものを見るようになって、辺野古の運動というのがいろんなかたちで動いているんだなと思っていました。

そのときによく話を聞いたのは、辺野古に来てる人たちが、金武湾闘争や恩納村の都市型戦闘訓練施設の阻止闘争など米軍基地問題にかかわっていた方、沖縄戦の証言をされている方、環境公害問題や沖縄の山川海の自然環境を守る活動をしている人たちだった。座り込み参加は、まるで「辺野古学校」だった。そのことと並行して、「なんよう文庫」での出版活動や沖縄平和ネットワークでの活動をしていました。沖縄戦関係の記録運動はずっと続けてました。その頃からずっと言われていたのは、人から物へ変わっていく。戦争遺跡の保存と活用ですね。今から10年前、証言者の大半は戦争当時15歳以下になります。では、どうやって継承していこうかということで、戦争遺跡を保存して、そこから学び取ることを考えましょうと。そのため戦争遺跡の調査とその証言記録運動が盛んに行われていました。

この図1は沖縄群島にあるガリ版刷り教科書、つまり沖縄の戦後最初にできた教科書の1年生用の第1ページ目にあるものです。「あおいそら ひろいうみ」これは象徴的な言葉で、戦争が終わって、見えてきたのは、あるのは、青い空と広い海がそのま



〔図1〕ガリ版刷り

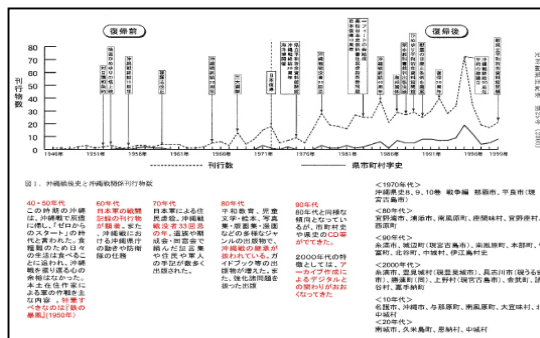
ま残っているわけですね。その景色というのを想像していたときに、戦争によって多くの命が失われたんですけど、自然もいろんなかたちで失われた。しかし、空と海はそのまま残っているという戦後のスタートがあります。

これから少し具体的にいきいたいと思うんですけど、実は、どうやって沖縄戦が記録されてきたのかというと、これは吉浜忍先生が作った資料（図2）です。戦後から現代に至るまで、どういう動きになっていたかといったら、戦後間もないころ、沖縄戦に関する本の出版は、大半が本土在住の作家によるものでしたが、1950年に沖縄タイムスが編集した『鉄の暴風』は画期的なものでした。現在でも優れた記録文学とも言われている本で、戦争を民衆の側から沖縄戦を記録するというものでした。60年代になると、日本軍の戦闘記録を中心にした本が出版されていきます。『日米最後の戦闘』というアメリカの海兵隊の英文記録を日本語訳したものです。当時は軍関係の史料というののがかなり出てきます。

70年代に入ってくると新たな展開になってきます。1972年の施政権返還では、米軍基地が返還されないまま、自衛隊の沖縄配備が行われます。そのとき沖縄県教職員会は『日本軍がやってきた』という本を発刊します。大きく問題になっていたのが、久米島の住民虐殺事件、慶良間諸島での「集団自決」問題です。

そういう中でも、沖縄戦記録で大きな役割をもつ1971年に出た『沖縄県史』ですね。この『沖縄県史』は今でも、沖縄戦記録及び沖縄戦の問題に関わる際の原点になるような本です。これは証言された人たちの言葉をできるだけ生かしたかたちで記録してまとめていくという方針で編纂されたものです。そんな住民の戦場体験記録が編纂されていた1975年、沖縄海洋博に合わせて沖縄県平和祈念資料館の開館をしました。その展示をみた研究者等から「何だ、この史料展示は」と、一斉に抗議の声があがったのです。当時の沖縄県知事はその抗議を聞きいれ、一旦閉鎖して、1977年にまた開館しました。そのとき、住民証言をメインテーマにした資料館に生まれ変わったのです。

これは1980年代に入ると、『沖縄県史』の編纂手法に証言分析を可能にする実証的な住民体験記録として、悉皆調査という手法を取り入れた浦添市史第5巻資料編4（戦争体験記録）ができます。各字ごとの戦災状況や日本軍陣地との関係性が分かるようになっていました。悉皆調査の項目には日本軍「慰安所」があり、どこに慰安所があったという記録が出てきます。さらにこの本の調査のすばらしかったところは、いわゆる屋号ですね。屋号で調査をしてるんです。沖縄の場合は、誰々さんと言ってもわからないわけですね。屋号で呼ぶと、地域の人たちはすぐ、どこどこの家だなというのがすぐわかります。そういうふうにして証言をきちんと引き出していくというような流れが出てきます。



〔図2〕戦後史と戦闘関係刊行物数

これが沖縄戦記録の先駆的な手法となり、その後各市町村での戦争体験記録の基本となっていたのです。80年代もう一つの特徴としては、沖縄戦記録の平和学習への活用が展開していきました。その流れとして僕がかかわったのが、『歩く・みる・考える沖縄』沖縄時事出版、1986年という本なんです。その先駆けになったのが『観光コースでない沖縄』高文研、1984年です。本土から来られた人たちが自分たちの足で歩いて、沖縄の歴史と現実を学ぶことができるという趣旨で出版されたものです。

実はその流れの中で特徴的なのは1982年から83年にあった教科書検定問題です。その教科書検定問題が起こると、当時は「何をやってるの、沖縄戦の実相と違うんだろ」と。国が何と言ったかと、『沖縄県史』は一級史料じゃないと。彼らが言ってる一級史料というのは、基本的に厚労省にある援護法で申請された史料なんですね。住民虐殺はなかった。集団自決を書け。とてもじゃないけど、それは違うだろうということで、このままだったら沖縄戦がうやむやにされてしまうということで、何とか全国に広めていきたいということが考えられていきます。この流れはあとで説明しますので、90年代2000年代というふうにして、市町村史がどんどん出されていきます。70年代80年代90年代、90年代2000年代と、今、2020年代に入ってほぼ沖縄の市町村の沖縄戦にかかわる記録がそろったと言ってもいいのではないかなという状況になっています。

次に、この図3はつい最近琉球新報が掲載した記事です。この記事を見たときに何が書いてあるのかといたら、今まであまり市町村史は見ないで、自分たちはずっと証言者を探していたと。証言者を探せば何とかなるだろうと。けども、今、証言者はほとんど見つからないんですよ。そのときに今度、琉球新報がやったのは市町村史から当たっていくんです。その記録の膨大さというのは、圧倒したもので、その中から琉球新報さんは、今年の6・23に合わせた取材を作ったということになります。だから、これはある面では、地域の平和学習、地域の戦争を知るととても重要な記録として見るわけですよ。

次に、この図4はちょっとわかりづらいですが、ざっと赤字のところを注目してください。これはさっきの吉浜忍さんが、1990年代までに、沖縄戦に関する出版物をまとめられました資料です。また同じ分類で、城間義昭さんが2000年代はどうなったかとまとめている。城間さんの分析では、吉浜さんなんかやっていた時代には、55年間の間の記録で1014冊だったものが、こ



〔図3〕琉球新報 2022.7.1

沖縄史料関係出版35冊の城間良昭氏は「2000年以降の沖縄戦関係出版物について」を分析を掲載。

分類	冊数	単行本	雑誌	図録	その他
①沖縄戦関係（平和教育）	37	27	2	18	0
②沖縄戦関係（歴史・学術）	22	18	4	2	0
③沖縄戦関係（文学・芸術）	36	23	4	7	0
④沖縄戦関係（地域・社会）	19	7	1	11	0
⑤沖縄戦関係（その他）	55	36	0	19	0
⑥沖縄戦関係（総計）	171	111	11	35	0
⑦沖縄戦関係（単行本）	67	28	10	29	0
⑧沖縄戦関係（雑誌）	18	3	3	12	0
⑨沖縄戦関係（図録）	132	84	22	26	0
⑩沖縄戦関係（その他）	37	13	4	20	0
⑪沖縄戦関係（単行本）	472	238	15	219	0
⑫沖縄戦関係（雑誌）	78	0	0	78	0
⑬沖縄戦関係（図録）	36	0	0	36	0
⑭沖縄戦関係（その他）	129	0	0	129	0
⑮沖縄戦関係（総計）	1014	363	17	374	0

上記の資料から、沖縄戦関係出版は単行本から増加傾向にある。特に図録・単行本が中心で、雑誌は減少傾向にある。これは、単行本・図録が、2000年以降の出版の主流となっている。これは、単行本・図録が、2000年以降の出版の主流となっている。これは、単行本・図録が、2000年以降の出版の主流となっている。

〔図4〕沖縄出版物

の戦後の沖縄戦終結 60 年の段階の頃というのは、全体の数で、600 冊、12 年間で 600 冊。ですから当時の 90 年までの数に比べると約半分を、12 年間で刊行したということになります。ものすごい数ですね。これを実は僕のほうで、分析というほどじゃないんですけど、どういう整理をしたかといったら、県外出版社がかかわったものと県内出版社がかかわった出版物を調べてみました。そうすると、下のほうの説明に書いてあるんですけど、その 293 冊のものの沖縄戦関係出版物は、県外出版社からが多く、個人とか団体とかと考えられる出版物を除けば、県内出版社は約 2 割しかないですね。継承分野になってくると、県外が 9 割、児童文学で 8 割というふうにして、沖縄戦にかかわってみる限りでは圧倒的に本土の出版社が本を出しているということがわかってきます。

これは実は僕は出版の中にいて、ずっと感じていたことなんですけど、じゃあ、本土の出版社がどこまで沖縄戦のことを、いわゆる沖縄に返していけるようなかたちでやるのか。またはどうやって全国に広げるようなかたちになっているのかというのは、正直言って、どうなんだろうという疑問を持っていました。その疑問を持っていたもう一つの背景には、わたしたち沖縄平和ネットワークは 80 年代から、戦争遺跡の全国シンポジウムに参加して沖縄からの報告・発表をしてきました。そのときよく言われたのが、沖縄すごいですね。戦争遺跡も頑張ってますね。で、実際それで終わりなんです。つまり、沖縄は特別視されているんです。というのは、ガマのことを本土ではわからないんですね。地上戦であったことも頭でわかっているけど、現場としてはわからないわけです。そうすると、本土からすると、ある特別な場所ということになってしまうというので、すごい疑問を持っていました。

さて、「軍隊は住民を守らない」という言葉があります。これはずっと沖縄の中で継承されてきた大事な言葉です。もう一つ、「教え子を再び戦場に送るな」という言葉があります。これは日教組がスローガンとして出されたものです。20 年ぐらい前は、平和学習で「軍隊は住民を守らない」という言葉は、みんなが理解できることばでした。しかしここ最近、若い人になればなるほど、「軍隊が住民を守らないってよくわからない」といわれます。何だろう、これは。なかなか説明してもわかってくれないというものがあって、これは本当に普遍的な教訓なのかどうか。これのことをずっと僕自身も考えていました。もう一つ、教え子を再び戦場に送るなど、これは当然だと思っていたんです。それがある先生から、実はこの教え子を再び戦場に送るなというのは、本土の人の場合は、加害責任の問題として考えても、地上戦を体験としては切実感をもって考えていない、ここに差があるんじゃないかなという話をされました。

軍隊は住民を守らない 教え子をふたたび戦場に送るな

軍隊は国民を守らない
沖縄タイムス社の創業者の豊平良雄氏は、新沖縄文学40号(1979年発行)で「沖縄の民衆は、戦前、戦中、戦後を通じて、有事立法の集中支配下におかれた。地理的な宿命から国防最前線に位置付けられ、有事立法が集中的に施行されたのである。有事立法は、軍政と異ななくない。革命、解放、生活のすべてが軍事に支配される。戦中は、その極端に達した。軍法が実施され、有事立法が発動されて、沖縄への有事支配が集中され、万が一の戦争が起きたら、沖縄及び沖縄人の地域は必死と、緊急される。軍国主義の裏面を、戦争体験で見抜いた沖縄の民衆の反戦平和の思想は、戦後に行きわたっていると評価する」と述べ、当時、言葉化されていなかった「軍隊は国民(住民)を守らない」を言い表している。

「軍隊の擁護」＝本土側、「住民の擁護」＝沖縄側という
二難がなされているのではないかと
「有事立法」の概念を「有事の法」として「住民の権利」の
侵害を一部で、戦「日本学術振興会特別研究員」の

〔図5〕 軍隊は住民を守らない

図5の「軍隊は住民を守らない」という言葉どこから出てきたのかという事なんです。

ここに、1979年の新沖縄文学に、豊平良顕さんが書いている文章があります。この中で豊平良顕さんのは、軍隊は住民を守らないという趣旨で書いています。また、沖縄県教組と高教組が合同して行う1980年の教育研究集会の平和教育分科会において、コメンテーターの安仁屋政昭沖縄国際大学教授がコメントの中で「軍隊は国民を守らないというようなことではないだろうか」というような発言を当時の新聞が「軍隊は国民を守らない」見出しで報道したのが一般化したと思います。

そのような経過の中で、小学校六年生の社会科の授業に沖縄戦を学ぶことを目的として、一つの家族の戦争体験を追体験することができる教材開発を単元執筆者から提案をうけてつくりました。それが、その後『沖縄戦ある母の記録』表題で高文研から出版されました。これは戦争体験者の安里要江さんの証言に基づいて、そのものを1冊にまとめたものです。子ども、赤ちゃんを連れて中部から南部まで避難をしたご家族の記録をまとめた本になります。



〔図6〕住民を巻き込んだ地上戦

さて、この左側の絵(図6)を見てください。子どもをおんぶしているお母さんがいて、その前に小さい子どもがいます。その後ろのほうから、杖をついたお年寄りがいます。手前には、亡くなった人たちがいます。これは、新里堅進さんが戦場の姿を描いた絵なんです。新里堅進さんは、沖縄の漫画家で「沖縄決戦」という有名な作品を描かれており、私が出版に関わった「歩く・みる・考える沖縄」のイラストやガマの地図などを描かれた方です。この画像は、その本に挿入された絵です。お母さんと子どもたちとお年寄り、これが実は沖縄で言えば住民の戦争体験ということになるわけです。もう一つは、新里堅進さんの作品ではないですが、ガマの中で赤ちゃんが泣いてしまうたびに周りから指をさされて罵倒されてしまう状況を描いたものです。これは決して軍隊が言ってるわけではなくて、一緒にいる周りの人たちからも言われたんです。泣く泣くお母さんは外に子どもを連れて行って、放置してガマに戻ってくるか、赤ちゃんを抱いたままガマから出て戻ってこなかったという証言もあります。

さて、沖縄戦では4名に1人が亡くなったとか、3名に1人が亡くなったとかいう数字があります。これは分母になっている数字が、1940年の国勢調査か1945年戦争前の概数なのかによって4人に1人、3人に1人になります。基本的には沖縄戦の時点では3人に1人というのが僕は正しいと思っているんですけども、この4人に1人、3名に1人という場合に、逆に考えていたらどうなんだろうと思っています。4人に3人、3人に2人が生き残った戦争になる。じゃあ、その生き残った人たちはどうしたのかといたら、徹底して逃げたんです。とにかく逃げて逃げて逃げる以外方法はなかったんですよね。ガ

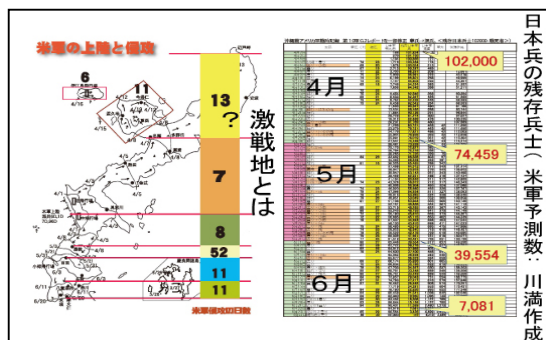
マに逃げて、畑と畑の溝の間に隠れていたり、ちょっとした壁があったら、そこに隠れていたりというふうにして、いわゆる逃げていったんです。

「平和の礎」に行くと、名前のない子どもたちの刻銘があります。いろんな理由があるんですけど、一つには一家全滅があります。もうひとつには、例えば子どもが当時生まれた場合に、役所に登記できないわけですね。そうすると名前がないんです。



〔図7〕2022.6.23 魂魄の塔

図7は今年の6・23（慰霊の日）の魂魄の塔に行ったとき、供えられている写真です。今から20年ぐらい前に撮った写真では、小さいヤクルトのカップがたくさんありました。当然のように水があります。遺族の人たちにとっては子どものままですので、子どもの好きなものはこれだろうなという思いで、やってるんだろうなと思っています。



〔図8〕激戦地

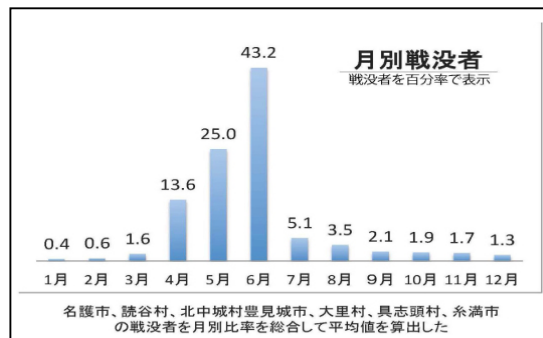
次に、これは数字的になります。これは高校生なんかによく使っている資料（図8）で、どこが激戦地ですかという問いです。よく沖縄戦では激戦地は南部だと言われますが、実際の激戦地というのは、この52日という数字があるように、嘉数高台から首里までの間なんですね。それ以後は22日なんです。米軍は毎日戦争記録を作っている

ます。その記録に日本軍の戦死者数をカウントしています。私は日本軍の兵員数を10万2000人と想定して、米軍記録の戦死者数を差し引いていくと、残存の日本軍兵員数になります。この資料を見ていくと、最終的には米軍が見ていた7881人は、実際の日本軍戦死者数に近い数字になります。それほど米軍は、緻密な戦闘記録や分析をしていたと思います。

この資料で注目してほしいのは、5月と書いているところです。ちょっと茶色っぽい色がついてますが、これは雨だった日です。5月は毎日のように雨が降ってたということですね。特に下旬は。6月になると、今度はほとんど雨が降らないんです。ですから、南部に避難してた人たちの多くは水を求めているんですよね。だから、みんな、井戸の周りに集まったりとか、わき水のところに集まったりとか。で、実はそこはもう米軍の集中的な攻撃に遭いますので、大変な状態になります。ひめゆりの体験者の話を聞いても6月20日前に解散命令でばらばらになりますので、雨も降らないなかで、水もないという状態で、喜屋武岬あたりをさまよったということなんです。

図9のグラフ。これは名護市、読谷村、北中城村、豊見城市、大里村、具志頭村、糸

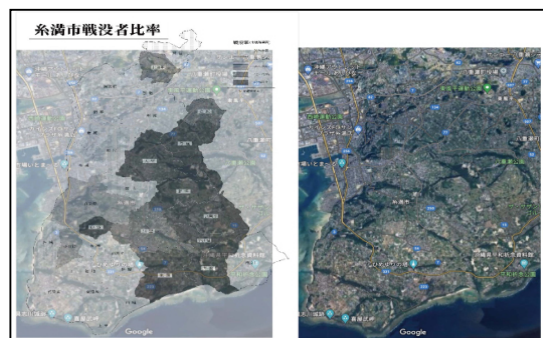
満市の戦争犠牲者を平和の礎の資料から調べたものです。月ごとの犠牲者を見ると、地域によって違いがありますが、やはり6月が一番高いんです。これらの数字を合わせて月毎に平均をとると、6月が43.2%で、多いということが分かります。その次、戦没者を年齢別に調べて見ると、0歳児から5歳児が多いですね。ですから、沖縄戦の中では0歳児や5歳児で亡くなる人が非常に



〔図9〕月別戦没者

多いと。もちろんお年寄りが亡くなってるケースも多いということです。これが沖縄戦の中での特徴的なもので、もう一つ特徴的なところを見てみます。これは、糸満の摩文仁のすぐ隣にある米須集落の資料で、戦没率は58.3%です。約6割が亡くなっています。その中で何月に亡くなったのと調べたら6月が圧倒的に多いです。じゃあ、どこで亡くなったのかと、左上のこれですね。やはり米須で亡くなっているんです。真ん中の点々と打ってあるのは、一つの家族に何名いたんですか。そのうち何名が亡くなったんですかという、これなどは全部亡くなった人たちです。よく言葉で言う、一家全滅というのは非常に強烈な言葉ですので、そういうものが使われたりしますけど、例えば一家に1人亡くなったら、一家全滅になるわけですね。16名いる家族の中で15名亡くなって、これ一家全滅にはならないんです。米須のこの資料を家ごとに全部調べてみると、やっぱり各家からほぼ誰か亡くなっている。しかも複数名亡くなっているというのが、この米須の状況になります。次です。この右側のほう、よくいろんな人たちの話を聞くと、喜屋武岬は大変だったよねと。喜屋武半島は大変だったよねという話があります。実はその喜屋武岬のほうは左下のほうになりますけど、このあたりはどっちかというと白くなってるんですよ。右側のほうが色が濃くなっている。これは何を意味しているかということ、これは日本軍の配置地図です。これから見る限りでは米須あたりというのは、いわゆる摩文仁と喜屋武岬のほうから米軍がやってきて、追い詰められた場所が米須になっているんです。次の写真で見てみたらわかる。

図10は航空写真をさっきの史料を並べてみたものです。濃くなっているところがさっきの地図の濃くなってる部分ですね。だから、喜屋武岬あたりが、そんなに戦没率が高くはないんです。なぜここの戦没率が高くなったかということ、摩文仁に司令部があって、第一線になるのが、八重瀬岳、与座岳、国吉、新垣というような、このラインです。このラインになるもので、その



〔図10〕糸満市戦没者

裏側にある集落の戦没率は非常に高いということです。ですから、ここから何がわかってくるのかといたら、日本軍が摩文仁に行って、戦闘員が多いところになればなるほど地域の人たちの戦没率は非常に高いということになります。

少し別の言い方をすると、喜屋武の集落の人たちは6月10日までは艦砲射撃とか空襲はあっても、地上戦の鉄砲が撃ってくるような状態にはなってないんです。つまり、食料は足りないけど、それなりにあった。実際の戦場になりはじめたのは6月の10日前後くらいからなんですよね。20日から悪くても7月になりますけど、ある程度食料がある中での戦場体験になりますので、追い詰められてはいても、亡くなる人は少ないという数字があります。

僕はなぜこんな資料をごたごたやっているかという、沖縄戦の証言をきちんと聞きながら、その数字資料を整理し分析することによって、地域の戦争がわかってくる。もう一つ、軍とのかかわりがわかってくる。この濃ゆくなっているところがなぜ濃ゆくなっているかっていったら、さっき最前線があったというところと、もう一つ、当時第32軍の元気な部隊が配置された場所なんです。中部地域で戦闘が激しかったところは、第62師団というところが中心になっていたんですけど、このあたりは南部あたりにいた第24師団という部隊がいて、戦闘が激しかった地域なんですよね。そのためその地域の人たちの犠牲が増えているということなんです。



〔図11〕写真集「名護のひとびとの100年」

もう一つこれは北部の戦争と書いていますけど、僕ら、北部の戦争、山の中に隠れて逃げていったというふうに見えます。だけど、この写真（図11）は当時の北部の様子です。当時の北部の様子は、ほとんど山の中腹までは段々畑なんです。この段々畑の中に隠れていたのかっていったら、そうではないんです。その上に逃げないといけない。それを越えていかなければいけない。じゃあ、お年寄りはどうなるの？ということになりますので、北部の戦争というのは、イメージをもう少し山に隠れたあの緑の山にいたんだ。水もあつたんだというような考え方はどうかと思っています。

図12は北部の証言で、とにかくよく出てくるんですね。ヘゴを食べたよ。バッタを食べたよ、タナガーを川から取って食べたよ。カタツムリを取って食べたよ。カエルなんか出てきたら最高の食べ物だったというふうにして、食料に追われているんです。理由はということかと思ったら、北部は第32軍のゲリラ戦と言われています。ゲリ

もう一つこれは北部の戦争と書いていますけど、僕ら、北部の戦争、山の中に隠れて逃げていったというふうに見えます。だけど、この写真（図11）は当時の北部の様子です。当時の北部の様子は、ほとんど山の中腹までは段々畑なんです。この段々畑の中に隠れていたのかっていったら、そうではないんです。その上に逃げないとい

栄養失調による餓死と病死 —読谷村の事例—

表2は、1945年2月から12月の間に、北部地域で亡くなった村民675人の月別・戦没原因別表である。戦没原因としては、**栄養失調による餓死やマラリアなどの病死が含まれて475人で最も多い**。戦没時期としては米軍上陸後の4月以降に急増し、組織的戦闘が終結した6月23日以降の7月に最も多くの戦没者が出ており、乳幼児や高齢者の衰弱死というケースが多い。避難民の下山は各自バラバラであるが、米軍の収容所でも満足な食糧が得られず、力尽きて亡くなった人もいる。

表2 北部地域での戦没者数・原因別

戦没原因	1945年												合計
	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
爆撃他	1	41	43	15	18	7	4	1	2	3	135		
栄養失調・病死	3	7	55	90	91	97	51	19	21	16	25	475	
徴収の原因			2	6	1	2						11	
行方不明			3		2	1			1			7	
不明		4	2	1	11	2	3	1	4	1	29		
計	3	8	105	141	110	129	60	26	24	22	29	657	

72%

〔図12〕餓死と病死

ラ戦というのは自分の陣地を置かない部隊ですので、どんどん移動していくわけです。そのために米軍はどのような作戦をやるかといったら、いわゆる海岸は全部米軍の部隊で固めておいて、そこから山の攻撃をしていくというふうにして、もし下りてきたら撃ち殺すというようなものですので、山に隠れていた住民の多くは、山から下りることもできない。僕ら、緑が多いから、食べ物たくさんあるかといったら、沖縄ではそんなに山が、田んぼがあるわけではないんです。というのは、炭水化物がまずないのです。もう一つ、タンパク質、今見てるような食料がどんどんなくなっている状況になります。

次、これは名護市の資料です。名護の人々は、周辺の山々に避難しています。では、その人たちがいつ頃亡くなったかといったら、4、5、6は6月多いんですけど、4、5、6で、6月は南部のほうに行ったからではなくて、4月には避難をしていくんですけど、食料がだんだんなくなってくると、食べ物がなくなってしまう。食べ物がなくなってくると、今度はマラリアに感染してしまう。餓死者が出てくるということで、6月が増えていきます。後半は収容されたあとに亡くなった人の資料です。収容所だから、何でも食べられるというところではないわけです。特に9月12月というのは日本の戦争の中で敗戦が8月15日ですから、米軍の主力部隊、主力は本土のほうに行っちゃうんですね。沖縄の人たちはある面では使い物にならないと、沖縄の地域は、ということで沖縄に食料の供給をあんまりしなくなるのが10月以降です。ですから、食べるものが非常にない中で収容生活をしていくと。この頃から、もうあなたたちは自分たちの村に帰りなさいとかというふうにして、食料を確保するんじゃなくて、食料を自分たちで稼ぎなさいというような流れになっていきます。

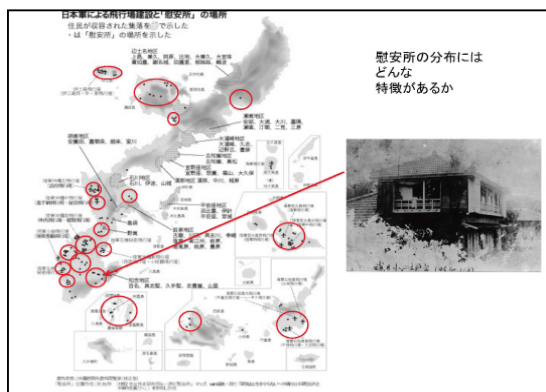
これは読谷村の史料なんですけど、読谷村で山に隠れていた人たちがいつ頃に亡くなったかといったら、5月と6月、7月に、90名91名97名というふうにして読谷村の人たちの大半が5、6、7で亡くなっているんです。つまり、山に避難してた人たちが栄養失調や病気で亡くなる人が非常に多くなっていったということですね。これがいわゆる南部戦線ではこういうもの。北部のほうでは戦場というのが、戦場の時期的なもの、地域的な違い。そして、やんばるとかそういう戦争の特徴によって、人たちの戦争の被害というのは変わってくる。そこがきちんと分析をするということと、もう一つそこから出てくる証言をきちんと聞き取る。それを総まとめにしたのが実は沖縄県史の9巻10巻だということだし、さらに細かくできてるのが市町村史で作られている、字史、市町村史をきちんと読み込むことによって、その様子が見えてくるということになります。このあたりで、証言と関係を見てもらえばと思っています。

次、これはさっき史料上、ゼロから出発と書いてあったんですけど、これは左上が、南部糸満の轟の壕から出てきた子どもが水を飲んでいる姿ですね。右上は、コザの嘉間良収容所の写真です。左下は、これは沖縄の南部の馬天港から北部のほうの収容所に運ばれていく船の中で撮った写真です。右下の、お父さんが子どもに口移しで水をやっている。水がどうかわかりません。これは地域がまだわかりませんが、子どもたちの姿が、こういう

姿ということになります。

沖縄戦の記録の中で大事な部分は日本軍の慰安婦、慰安所です。このことは、きちんと調べていかないといけないと思うんです。ここに『沖縄戦場の記憶と「慰安所」』洪玗伸著、2016年発行という本があります。これは沖縄全体の慰安所をとといいますか、その空間の中での慰安所は何だろうということで調べた研究をまとめたものです。沖縄戦の住民証言を聞く際に、住民のすぐ近くに慰安所がありますので、そこを含めて、きちんと聞き取っていく。住民はどういうふうにして、その慰安婦の人たちを見ていたのか。よく慰安婦は必ず朝鮮人というふうにして見る人がいます。これは辻の遊郭の人たちもいますので、そういう軍によって、強制的に慰安所に働かされていたということでもあります。

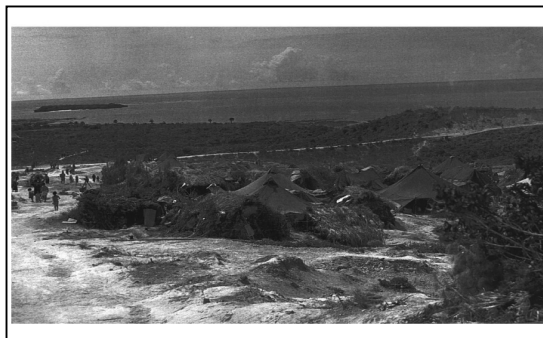
図13は日本軍「慰安所」と収容所が設置された資料です。米軍は占領と同時に中南部に基地を建設し、住民を北部地域に収容しました。収容所では、食料不足、食料難で非常に厳しい状態ですので、多くの人たちが海に入って、これは大っぴらにやってしまうと、



〔図13〕 慰安所の分布

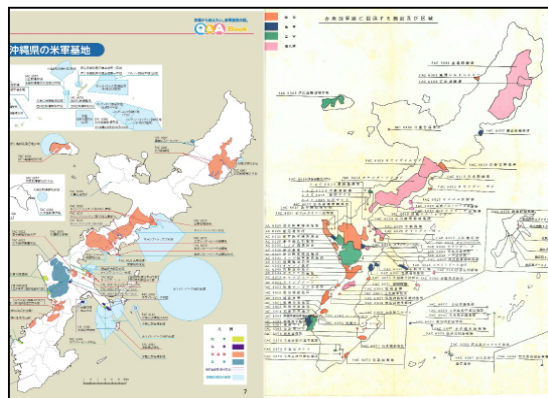
米軍にやられてしまいますので、海からの魚を取って食べたという。戦後は監視があっても、海で魚を取って食べるというふうなとても大事な自分たちの命を救ったところですね。中南部の戦争で収容された人たちの多くが収容された場所ですので、彼らにとっての北部というのは自分たちの命を救った場所というふうに見ることも必要です。

図14は今の米軍基地キャンプシュワブのある場所で、大浦崎収容所がありました。ここに収容されていたのが、本部半島の今帰仁とか本部とか伊江島の人たちなんです。本当に何も無いようなところですので、多くの人たちの命を救っていたのは海からの食べ物なのです。戦後、米軍は白地図に線を書くように、強制的に基地建設を進めていきます。それに対して、沖縄各地で基地闘争が展開されました。その基地闘争については、時間の都合があり割愛します。



〔図14〕 元大浦崎収容所

さて、図15の資料は、1970年の米軍基地配置図と最近のものです。この違いは、どこにあるでしょうか、色を見たらわかります。ピンクのものは海兵隊なんですけど、緑と茶色と言いますかね。茶色はこれは基本的には陸軍です。海兵隊は上のほうにしかないけど、緑は空軍ですので、これ1970年のマップですから、当時の沖縄の中部の姿というのは、アメリカ陸軍と空軍が中心になって、北部は海兵隊がいたというふうにして見るの



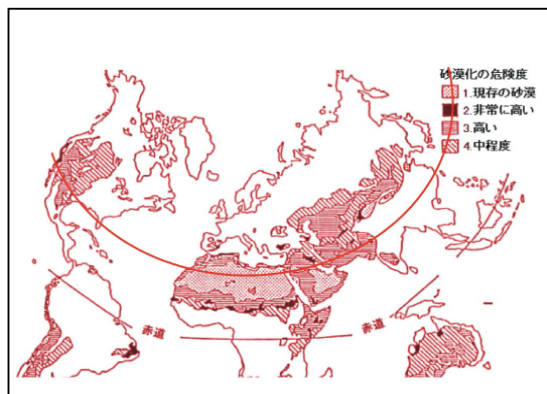
〔図 15〕 米軍基地

が妥当です。現在これを逆にすると、現在の様子を見ると、陸軍はほとんどいません。ほとんど海兵隊です。そして嘉手納基地の空軍です。つまり、アメリカの都合のいいように沖縄の基地が変えられていくというのが沖縄なのです。今も、それは変わっていません。当時、いわゆるベトナム戦争の頃ですから、1970 年、これは陸軍が正規軍ですから、沖縄を基地として使って、陸軍が多くなっていく。現在は海兵隊が中心になってくるんですけど、じゃあ、どこに行っているのといったら、基本的にはイラクに行つて、アフガニスタン戦争のときに行つてというような状況の中です。次、これは中部一帯の米軍基地なんですけど、多くの場合は陸上ばかり見るんですけど、実は海上に訓練区域というものが非常に広く作られています。ですから、漁船なんかは、この地域の中に入ることできませんので、ここを潜り抜けていくようなかたちで漁をしないとイケないということになります。変な話では例えば大東に行く船なんかは周りが訓練所になっていて、その間を通っていくようなもんだよという話もあるんですけど、実は基地があるのは陸上もこの辺も、空も沖縄は存在するということになります。これが沖縄の基地の実態になります。

次にいきましょうか。これは今、大きく変化してきています。自衛隊が入ってきたということです。南西諸島のほうに自衛隊がどんどん配備されてきて奄美、沖縄本島、そして宮古、八重山、石垣、与那国というふうにして、ミサイル部隊を中心に配置されていく。その論理は基本的には中国の封じ込め作戦だと言っているんですけど。

次に、あとで基地の関係の話はしますが、ここは地球上の自然環境のことに少しふれておきたいと思うんです。この線を引いてあるところが沖縄、南西諸島のある場所ですね。図 16 の地図を見る限りでは、実際南西諸島の緯度の大半は砂漠地帯です。ですから、地球規模で見た場合に、南西諸島の動植物というのは基本的には希少なものなんです。もし沖縄からなくなったら、砂漠地帯ですね。非常に厳しい。そういう面で、数字的に言えば、全国の 0.1% の沖縄に、カエルは 26% の種類が棲息しています。やんばるに 10 種類、全部で 39 種類で単位面積当たりでは 51 倍、対面積当たりの植物は 45 倍と、非常に豊かな森があります。

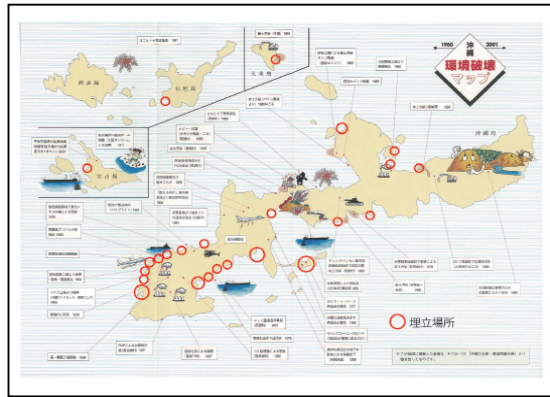
次、いきましょう。その豊かな森がこの



〔図 16〕 砂漠化の危険度

たび世界遺産になったんですけど、しかし、それは世界自然遺産になった裏側には、いわゆる北部の基地は返還したから、世界自然遺産になりましたという。これは日本政府が世界自然遺産を決めるところに報告したものです。北部から米軍が撤退しました。今、返還地に入って調べてみると、さまざまな米軍の廃棄物が出てくるという状況です。本当にこれが世界自然遺産なのかと疑いたくなる。次、もう一つこれ、やんばるの山の中に入っていくと、こういう姿が見えます。よく米軍が米軍がと言うんですけど、これは地域の伐採です、これ、何でこんな伐採があるのかといったら、木を切って、木を植えると、補助金が出るんです。そうすると、山を再生するために、木を切って、木を植えるんですよと言っているんですけど、沖縄の山というのは基本的には、非常に起伏が激しいところですので、そこに大きな機械を入れることはできない。そうすると、皆伐状態にしてしまうというふうにして、山を壊していくという状況が今、続いています。

図 17 は沖縄の中での埋立地です。これ、実際沖縄は日本一、埋め立て率の多いところですよ。那覇から糸満にかけては至るところ埋立地ですね。非常に埋め立てが多い。僕が何でこんな資料を皆さんに見せてるかといったら、辺野古で闘っていくときに、最初にこういう議論はたくさんあったんですよ。自分たちはこれまで散々壊してきた。これ以上自分たちがやってきたことを繰り返してはいけんという人たちが何名もテントの中で話をしていたのを覚えています。その埋め立ての実は論理の一つになっているのは、陸上は米軍基地がいっぱいあるから開発ができないと。であれば、浅瀬のある海岸を埋め立てたほうがいいんだ。変な理屈なんですよ。それは、じゃあ、その埋め立て



〔図 17〕「消えゆく沖縄の山・川・海」より

は誰がやるかといったら、沖縄がやるわけじゃないわけです、沖縄の人が。基本的には大手の埋め立て業者でないとできませんので、当然ゼネコンが入ってくることになります。いわゆる基地があるがゆえに、土地が必要なんだ。だから、埋め立てが必要なんだというふうにして海を壊していくという、これまで何度か繰り返しながら、これじゃいけないんだというふうにして、みんな考えながら、辺野古に座ってる人たちはいらっしゃることになります。

これは実際の辺野古の座り込みに関わっていた方が書いた絵本です。頁を読み進めると、「90 年間、この海とともに生きてきた。この海のおかげで子どもたちや孫を育てられた。命の海を埋め立て、人殺しの基地を作るといふなら、私を殺してから作りなさい」と描かれています。地域の人たちにとっては、辺野古の海は、命の海なんです。

その次、いきます。今、辺野古にかかわってる団体はヘリ基地反対協や平和市民連絡会、オール沖縄などが県内基地を新たに造らさないと闘っています。また、多くの県内外、そ

して国外の環境団体もかかわっています。世界海生哺乳類学会や国際自然保護連合(IUCN)などはジュゴン、サンゴ礁、ノグチゲラを保護するようにと日本政府に何度も勧告しています。また、もう一つホープスポットというふうにして、去年、日本で初めて辺野古・大浦湾が指定されてきたんです。第10回世界サンゴ礁シンポジウムでは、参加して学者が実際に辺野古の海を見て、沖縄宣言を急遽決議したんです。さらに、日本生態学会第60回総会(2013年)において、「沖縄県名護市辺野古・大浦湾の米軍基地飛行場建設に伴う埋め立て中止を求める要望書」を決議したんです。

つまり、僕は何を言いたいのかといったら、埋め立て問題で設計変更があって、沖縄県知事の不承認の判断が大きく報道されていますが、もともと辺野古の大きな問題は、あれだけの自然をそのまま残しておくというのは世界に対する日本、沖縄の責任だということなんです。もう一つそこに基地を作らすのは何事だというふうなことで、いわゆる基地に対する考え方。もう一つは自然に対する考え方が組み合わさって動いているのが、辺野古の今の闘いだということ。これはどこから学んだかというのが、その前にある金武湾闘争になってくるわけですね。

次、図 18 は復帰後で、住民運動の闘いあったところですね。現在も闘っているところなんですけど。各地で市民が基地のトラブルの関係で闘っています。辺野古には、そういういろんなところでいろんな闘いをしていた人たちがいます。僕もずっとテントのほうにいたことがありますけど、そのときに自分は本部町豊原の P3C 基地阻止闘争に関わってきたよ、とか。恩納村の都市型戦闘訓練阻止闘争に関わったよ、とか。また、



〔図 18〕 復帰後の闘い

自分は金武の都市型戦闘訓練阻止行動をやったよ。自分は伊佐浜の土地闘争のときに来たよ、とか。金湾闘争で関わっていたよ、とか。やんばるの山を守る運動に今も関わっている、など様々な人々が関わって、いろんな人たちが自分たちの思っていることを含めて、これではいかんだろうというふうにして動いているのが、今の座り込み現場の姿なんです。

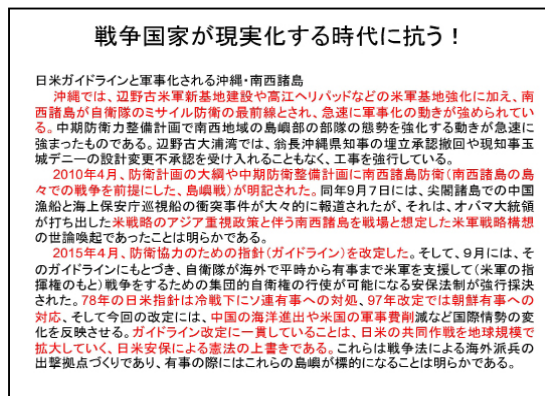
次、いきましょうか。実はここら辺からがもう一つ言いたいことがあるんですけど、図 19 は 1982 年の東京タイムズ、今はもう廃刊していますが、このときに住民虐殺の問題が大きく報道されています。その背景にあるのは、いわゆる日米のガイドラインがあります。1978 年に最初にできて、当時ソ連脅威論というのが非常に盛んに言われ続けている。ソ連脅威論の中で、自衛隊の強化というものを打ち出さないといけない。その中で一番の問題になるのは、日本軍が沖縄で何をやったのか、軍隊が何をやるのかということ、薄める必要があるということもあって、いわゆる沖縄戦の中での歴史認識の変化をさせないといけないということなんです。



〔図 19〕東京タイムズ

適用することによって、皆さんは保護しますよというふうにして、日本軍と言っちゃいけないんだけど、自衛隊が強化させていく際に生まれていたやり方なんです。

図 20 が 2015 年のガイドラインの改定になると大きく変化していくんですね。これ



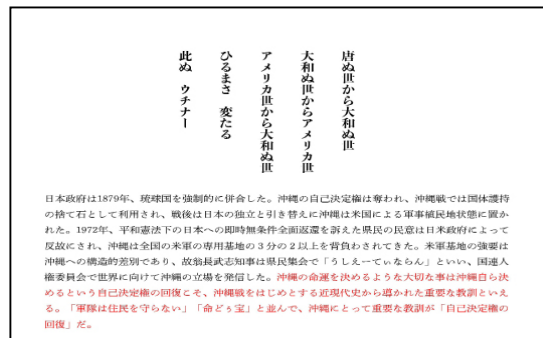
〔図 20〕戦争国家が現実化する時代に抗う

2011 年というあたりで、アメリカ戦略が大きく変わります。自衛隊を動かすことになるわけですね。そのためには集団的自衛権というものを作っていく。その後に、現行法 10 本を改定して、どんどん改定を法律的に変えていく。

つまり、もともとアメリカ軍がベトナム戦争以降に金がなかった時期からガイドラインをやって日本を動かしていく。日本のほうも自衛隊の規模を大きくしていく、その二つの思いがあって戦争法というのが作られていったんですけど、現在は戦争法としてではなくて、日米が共同でアジア戦略を作っていくというふうにして変わっていくということですね。これはなぜこういう資料を作ったかといったら、前に戸邊さんのほうが、歴史区分ということで、95 年が一つの区分だ。確かにそれはそうなんですけど、歴史認識を大きく変えてしていこうとしたときの沖縄戦にかかわるものからすると、2004 年、1982 年から 83 年のものと、2000 年代初期のものというのは、日本が軍事化をしていくための大きな転機になっていったところだろうなと見たほうがいいのではないかなと思っています。僕、歴史学者ではないからわかりませんが、そういうふうにして動いていけるだろうな

と思っています。

そういう、どんどん変わっていった、「唐ぬ世から大和ぬ世、ヤマトぬ世からアメリカ世、アメリカ世から大和ぬ世、ひるまさ変たる、此ぬウチナー」。沖縄が歴史的にいろいろ変わっていく中でどうなるんだ。だから、今、沖縄で重要、よく言われているのは自己決定権というところで、沖縄のことは沖縄で決める。これはこれまでの流れでできてきた大きなところで、亡くなった翁長知事が国連人権委員会のほうで、この自己決定権を私たちは行使するんだと。明確には言わなかったんですけど、その内容的なものを言ったものです。



〔図 21〕唐ぬ世から大和ぬ世

次、いきます。今までのいろんな話をして、今、私が思っているのは一つは、じゃあ、どうやってこの本土の人たちでもいいんですけど、子どもたちもそうですけど、沖縄戦、そして自分たちの命を守っていく自然、命を捨て去られていく戦争。これをどう描いていくかは、ばらばらなものでやる場合には、なかなか難しい。その中で、そこを全部混ぜたかたちでできるものは何かと考えたときに、僕は文学という方法は非常にいい方法だろうなと思っています。今、沖縄戦の記録というのは、膨大な市区町村の字史の記録があります。さらにそこには当時テープを録ったテープもあります。戦後の長い歴史の中でのさまざまな上原さんなんかがまとめたような住民運動記録のものがあります。いわゆる戦いの記録なんですけど、このもの自体が、考えていくときに、よく沖縄は、沖縄に立つ日本列島がよく見えるというふうにして、この沖縄の現実から日本列島を見る。私、日本は何なのというふうにしてやっていくときに、一つの大きな鏡になるといったときに、そこで創作をしていくことが大事なことだろうということ考えてやる。

文化運動ということでは私はないんですけど、今、大城貞俊さんという人といろいろ話をしているのは、あと10年ぐらいのスパンで頑張ってみようよという。そのときのポイントは何かといったら書き手を増やしていかないとどうしようもないですので、そういう書き手を増やしなが、僕は出版で支えていきたいと思いますというふうにして、僕が最初に話したように、軍隊は住民を守らないということを、どうやって普遍化していくか。本土の人たちにもどうやって伝えていくのか。実は韓国と沖縄の場合は非常に歴史的にバックになっているのは米軍というバックがありますので、非常に同様な体験をし、ただ、地域が違うからあれなんです、そこが歴史的に結びつくことによって、東アジアの一つの平和を作っていく大きな流れができてくるんだろなと考えております。そういう面から、それを文学という作品を創作するということからやっていくのがいいのではないかなと思っています。

これは前に出した『6月の空』という宮森ジェット機事故でそれを絵本にしたんですけど

ど、実はこれはさっき上原さんがおっしゃっていた沖縄国際大学にヘリが墜落したときの学生たちです。その人たちが宮森小学校のことを考えながら何とか考えようということで、作った絵本なんです。いわゆる素人ではあるんですけど、自分たちのものをずっと作って出した本です。この新聞記事にもあるように、今なお宮森小学校での後遺症を抱えたまま生活をされている人たちがいらっしゃる。この本の主人公になったのは実は宮森ジェット機事件のときに、大やけどで亡くなった人がいるんですけど、沖縄の中ではそのまま実はお墓に入れることができないものですから、その家族は本墓のそばにお墓を作っていたんです。やっと50年過ぎてその子をお墓に入れて、やっとお墓に入れることができたということで、お祝いしたという話を含めて絵本にはしてるんですけど、一人一人苦しみを抱えながらいろんなものをしているということ。

さっきも話したように、これまで僕は辺野古問題、環境問題、沖縄戦の記録と継承、沖縄文学少しかかわってきている中で、今後、私たちがいろんなことを考えていくという場合に、人権、環境、自己決定権、反戦平和という、それを組み合わせた何らかの研究ができていったりとか、ぼくは出版の世界ですので、出版をやっていくということになるんですけど、皆さん方でそれをお互いが組み合わせたものができたらいいなと思ってます。すみません、長々となりました。申し訳ない。

上原) 川満さん、1980年代からの沖縄の動きと、そして出版と、そして現場の運動、沖縄戦体験記録をめぐるお話をありがとうございました。この講演会シリーズで初回に登壇された戸邊秀明さんは1980年代の「変質」について話されていたと思うんですが、先ほど川満さんから、1980年代と2000年代の初頭に日本の軍事化の転機があったというお話がありました。

1980年代、教科書問題とか、沖縄に導入されていく主任制の動きとか、日の丸君が代の沖縄だけではない全国に対する押しつけとか、海邦国体で沖縄が再び過重警備の対象になっていく、そうした状況のなかで、金城実さんがチビチリガマの前に「世代を結ぶ平和の像」を作られて、その映像が「ゆんたんざ沖縄」（西山正啓監督、1987年）というドキュメンタリー映画にあります。興味深かったのが地域の人たちが一緒にこの像を作っていたことです。子どもからお年寄りまで一緒に、ぺたぺたとやりながら、ここで何が起こったのかを話したりして、その過程で追悼も行っていく。戦争体験を地域全体で記録していくことの重要性を、この映像は伝えていると思います。6月26日の佐喜眞道夫さんの講演で、丸木夫妻が「沖縄戦の図」を描いたとき、地域全体で体験を記憶していることがとても印象的だった、というようなお話があったと思うんですが、それと重なるような。国が沖縄戦の意識を書き替えようとしていることに対して、沖縄のほうでは住民の側からの戦争の記録を共同で記録するという運動が同時に行われていたということも思い出しながら聞いていました。

川満さんは80年代から、戦争の記憶を書き替えようとする同時代の動きの中で出版の

活動を始められて、私は2000年代から、沖縄国際大学のヘリ墜落事件をきっかけに、運動現場に初めて出会い、金武湾闘争に出会っていくんですけども、沖縄戦の話は運動の中で聞き、金武湾闘争の史料の中で読むことができました。金武湾闘争で共有された「一人ひとりが代表」という言葉は、いろんな人がいろんな意味を込めて使った言葉なんですけど、例えば「金武湾を守る会」の世話人であった安里清信さんという方は1970年代の住民運動で沖縄戦の教訓を語り、権力者がいたって戦争は起こったじゃないかと、地域の有力者や権力者に自分たちの運命を委ねることを拒否し、開発を拒否しました。現存する運動の中で呼び起こされてこそ、沖縄戦の問題に対する理解も深まっていくのではないかと、聞いていて思った次第です。とりあえず私のコメントはこれで終わります。

友常) ありがとうございます。じゃあ、私、大学の業務があって、少し席をはずさなきゃいけなかったんで、すべてを聞けたわけじゃないんですが、今日のお話で、多分これはほとんどフットノートみたいな質問ですが、大城先生と今、本を、本というか出版計画を進めてたりということの中で、そうした沖縄の体験を普遍化するというそういう出版の活動の中で、沖縄に関してさまざまなときに、大和との関係でいろんな意味で、レイシズム、人種主義がある。人種的な差別というのがある。お話聞いてて思ったんですけど、警察も含めて辺野古の工事に関しても、ものすごく差別的な言質が警察の暴力が伴って、直接出てくる。これはアメリカのブラックライブズマターでありますけど、ストラクチャルレイシズムっていうのとすごく似てる。

一般的に例えばいろんな差別の形態があって、被差別部落とかアイヌに対する差別があるんですけど、そういうかたちで警察的な暴力が直接出てくるレイシズムではないんですよ。沖縄に対して要警戒対象というのがあって、これ、アメリカのエスニックマイノリティとか黒人に対するストラクチャルレイシズムにすごく近い。もちろんこれ在日朝鮮人もそうですけど、基本的にはコミニストたちという、かつて戦前戦後解放的運動の時期のレッテルがあるからなんですけど、こういう構造主義的人種主義に対して、それをどういうふうに出版をとおして考えていくとかかそういう働きかけとか計画というのはありますか。

川満) 具体的にそこまでは話し合いが進んでいるわけではないんですけど、沖縄に対する沖縄という、いわゆる琉球列島というかな。それに対する考え方というものがちょっと違うんだらうんと思うんですけど、その強烈に違うのは権力者ですよ。警察権力とか、海上保安庁もそうですけど、結局上からの命令というのは、かなり強力な命令系統になっていくと思います。そこら辺のものと、一般の人の多くの人たちが見えていく沖縄というのと琉球というのと、というものの見方というかに圧倒的に沖縄を基地のカラーに作り上げた沖縄のかたちを持ってるんですよ。そこで生きていくというものの交流というのがあんまりないわけです。そこら辺の問題を解いていかないと、みんなの中に伝わっていか

ないんじゃないかなと。

それは沖縄戦関係、基地問題を中心にしてやっていきますので、必ずしも本土の人のうんぬんということではなくて、例えば僕が最初、軍隊は住民を守らないというのは、普遍化しないといけないというのは、じゃあ、ベトナム運動の人たちはこの問題をどう考えるのか。朝鮮戦争の中での人たちはどう考えているのか。インドネシアの中での人たちはどう考えているのか。サイパンの場合はどうなのかというふうにして、そこら辺を普遍化していかないと。さらに中国は、そのまま地上戦ですので、それに対応できるようなものにしないと、単に本土の人とはという考え方に僕は立ってはいないんです。

友常) そうですね。本土との関係というよりは、そこに発生する差別とかレイシズムとか権力との関係をどういうふうにする。それこそ米軍の戦略だったり、国際的な、それこそ帝国主義的な戦略の中で、どういうふうにするのかというところからどう普遍化できるかということですよ。上原さんがされてるのも、そういう仕事ではあるんですよ、アジア、太平洋。実際、金武湾闘争のそういう契機があったからですね。そういう確かに出版物が沖縄から発信されるというのは、すごいですね。

川満) だから、本土と沖縄とは違うというふうではなくて、どう考えていくのかというのを共有できるようなかたちにしないと、お互いにいいとは思わないんですけどね。だから、どっちかにするのではなくて、きちんと将来を整理していかないと、そう考えてはいるんですけど。

友常) ロジスティックスというか物流の話もちらっとされて、物理的な制約ですね。出版するというのがどういうふうに通じられるかという、物理的な制約ですよ。沖縄の中で本を作るということと、それが果たしてどれだけの人々の手にそれを渡すことができるかという話も結構リアリティのあった話だと思って聞いてたんですけど。それももう一つそれをどういうふう克服するのかっていうのもちょっとお聞きしたいところではあります。

川満) 具体的にさっきの史料を詳しくやればわかってはくると思ってるんですけど、圧倒的に研究書が多いんです。研究書の大半は、沖縄ではないんです。誰に向かって、これを研究を発信していくのかというところなんです。もう一つ、ある時期の十何年間で沖縄の兵隊だった人の本は沖縄の出版社1冊も出してないんです。という部分があって、その何のためにこの本が作られているのかというのが、どうも難しいんじゃないかなと思って。今の出版流通の流れというのは約ひと月半なんです、書店で生き残るのは。その間に売らなければならない。そうすると、本の編集と本の執筆をされてる人にとってはひと

月半というのは非常にばかげた期間ではないですか。長い時間、長い年月かけてきているものが、単にひと月半かふた月ぐらいの間で消費されてしまう。そういう現実の中でどうやっていくかという部分だとは思いますが。必ずしもひと月半ではないんですけど、図書館に入っていったりとか、いろいろあるから。しかし、それは出版の流通は原価計算からすると厳しいことになるのは間違いないと思います。だからといって、沖縄で本を出して、部数で何かするのかというのは成り立たないことです。ちょっと脱線になりましたけど。

研究書は研究書で必要だと思います。研究書というものは、広く一般に使われていくものですから、大事な本なんです。それは何を研究して、何を広めていきたいか、みんなと研究の内容を広めていこうと考えているのか。沖縄戦の特徴的なのを調べたからではなくて、その研究書の中でも広めていく、共有化していくようなものに研究書としては作るというのが必要になってくる。細かく分析していくのも必要だし、ちゃんと広がっていくような研究というのは、なお必要だと思います。

対話になるかわからないんですけど、僕は今、文学というふうにしてきたのは、僕はもともと文学が専門ではないけど、そういうふうにしてきた理由は、こういう本を作りたいくないということなんです。

これはいい本ですけど、いわゆるノウハウ書。沖縄戦でもそうなんですけど、つまり、沖縄に行って何かを見よう、聞こう、調べようと、それはやめたほうがいいと僕は思ってるんです。行くのは大事ですよ。行くための本を作ろうという気合いは全くなくて、海をとっても大事にして、すごく海岸を守る、海を守るために原発で頑張っている、それをさせないと頑張っている。この海は絶対守ると言っている。自分の地域のところと、この自分が考えている例えば沖縄のところがつながっていくことによって、初めて、沖縄でないところが本当の沖縄を学ぶことが多分できるだろうなと思っている。そこには人がいるからですね。人とそこにある自然とか、そこにある生活空間とか、そういうものがあるから、これらが共有できることであるから、沖縄で学ぼうというよりは、それは大事なことではあるんだけど、自分の地域の中で学べることと、よその地域で学べることと、それが組み合わさっていくという、そういう面では、沖縄から日本を見ると言っているのは、そこ、沖縄を見てください、頑張ってくださいではなくて、そこに二つの交流ができることによって、初めて何かが生まれるという考え方なんです。

コザ暴動が問いかけた「復帰」

今 郁義×ウェスリー・上運天
(2022年7月23日)

今) 私は北海道に高校までずっといまして、ちょうど炭鉱がピークのときから斜陽産業になっていく時期を、炭鉱のまちで高校まで過しました。そのときに雪景色なんかを、写真で撮ったりしていました。小学校は夕張、歌支内、中学校も歌支内です。高校は留萌という、本当に日本海の荒波のところで、むかしニシンが大量に取れて「ニシン御殿」もあったようなところです。卒業後東京へ行って多摩芸術学園という、今は多摩美のグラフィックデザイン科になっている多摩芸に3年間、バイトで写真の仕事をやりながら通っていました。

そのときに写真の影響を受けたのが、ゼミの担当の東松照明さんと中平卓馬さんでありました。日本写真家協会が1967年に写真100年展をやるんですけども、そのとき写真家協会のアルバイトで、全国から集まってきた写真の複写をやっているんです。とにかく何万の写真を複写していくんですけども、それはもういろんな写真を見てたんで随分刺激を受けて、写真の仕事はなかなか面白いなと思ったりもしていました。

68年頃東松照明さんが、若い写真家や学生なんかを集めて「写真人連合」というのを組織するんですね。これは1967年とか68年というのは、若者が異議申し立てを行って、日本がこんなんでいいのか、高度経済成長でもあるんだけど、一方でその矛盾に学生たちが気づいて、学生運動が起きていくわけです。写真やってるメンバーもその影響はすごい受けてて、単に写真撮ってるだけでいいのかっていうような話から色々あったり、演劇人は演劇人で、自分が一番偉いのだというようなことを言い合って殴り合いをやるようなこともあった。だから、演劇人の連合ができたり、映画は大島渚を筆頭にかなり重要な映画を撮ろうとか、音楽家もやっぱりロックとかジャズとかいろいろ出てくる時代です。みんな一人一人がそれぞれ自己主張を随分やってた時代ですよ、1960年代の半ばから後半というのは。

ちょうどその頃、沖縄の復帰協が「本土復帰要請団」という逆オルグ団を東京へ送って、東京から各地に散らばった沖縄の人たちが沖縄の現状を訴えていた。

その頃、僕は69年の1月18日～19日に学生運動の象徴だった東大安田講堂が陥落するときに現場で写真を撮って、その写真をスチル映像で構成して各大学で上映したりとか、その時の写真の1枚は、その年に亜紀書房から出た『砦の上にわれらの世界を』という本の表紙で使ってもらったりとか、そんなようなことをやっていました。それで、当時は映画関係の人とも知り合っていて、沖縄でゼネストがあるから沖縄に行こうっていうような話を、その映画グループなんかと一緒にやりました。

当時沖縄に渡るには渡航申請書、いわゆるビザが必要で、2月のゼネストの前には結局渡航許可が下りませんでした。あのとき、フリーでやってる人たちの渡航許可は、全く下りなかったですね。新聞社とかは、下りるんだけど。そのときに、東松照明さんが、ゼネストの2日前かな、『アサヒカメラ』の特派員という肩書で渡航許可が下りて、沖縄に2～3週間いて、『沖縄に基地があるのではなく基地の中に沖縄がある』という写真集を出して、随分本土のほうに色んな影響を与えていました。

その頃、岩波映画にいた東陽一さんが独立して、最初の映画を撮ったのが『沖縄列島』です。68年から半年ぐらい沖縄に滞在してドキュメンタリー映画『沖縄列島』を作ります。東京で1969年に上映されちょっとプロパガンダ的かなってような印象もあって。少なくとも見た感じでは、日本向けに作られた映画なんだろうなと思って、私はかなり批判的に観てたんですね。そういうふうに見てた連中が集まって、批判しててもしょうがないから俺たちで映画撮ろうじゃないかって、3月になったらようやく渡航許可が下りたこともあって、とにかくどんな映画を撮るかはロケハンで行ってみてから考えようっていう、かなり大雑把な話をしていました。

それで1969年4月24日に、僕を含めた3名が映画を撮るためのロケハンに入ったんですね。渡航証明をもらうためには身元引受人がいなきゃならないのに、僕らのメンバーは誰も沖縄に知ってる人がいなかった。だけど、当時、社会党の東京都本部に絡んでる映画を一本撮っていたもんですから、東京都本部からの紹介で、コザの市議員なんかを経験してた中根章さんを身元引受人にしました。沖縄に上陸してすぐに氏に挨拶に行き、立法院でお会いしています。それで、最初の滞在許可が30日なので、コザ十字路の黒人街を通り抜けたところにある一軒家を借りて拠点にしてロケハンを続けていきました。

『沖縄列島』はある意味、例えば阿波根昌鴻さんとか、瀬長亀次郎さんとか、琉大の自治会長とか、当時の沖縄復帰運動の顔になる人たちを中心にしながら、沖縄の民衆を描いていくっていう構成でした。僕らはその逆で、いわゆる名のある人たちは別に出す必要はないから、沖縄の最下層というか、そういう人たちに焦点を合わせる映画を作ろうじゃないかが原点でした。

ひとつは、沖縄に日本の法律が適用されてないんで当時は売春防止法がなく、売買春が公然と認められていた時代。そのなかで仕事をしている女性たち、特にアメリカ社会なんで米兵相手とか、あるいは日本人相手にしてる女性たちに焦点を合わせた映画はどうだろうというようなことでロケハンを進めていました。その時、コザを拠点に活動している演劇集団「創造」と出会いました。「創造」は沖縄では文化的発信力を持ってたグループなんです。その人たちの紹介でコザの吉原のお店を紹介してもらったり、それからAサインバーの関係者を中根章さんに紹介してもらったりしました。ちょうど4月に、自由に嘉手納基地を出入りできる時期があって、そのとき初めて嘉手納基地の中に入ったりして、そこで写真を撮っていて没収されたりみたいなこともありました。Aサインバーなんかには、もう本当に飛び込みですね、どこまで撮影できるか。ロケハンで僕はスチール担当してたんで、

映画撮るときにはこういう映像が必要だろうっていうんで、スチール撮りながらやっていました。そんなこんなロケハンでした。

ロケハンの1人は、のちに映画を完成させる布川徹郎、それからもう1人が田中穰です。この2人ともいまは故人です。2人とも早稲田の学生メンバーです。先に2人が帰ったあと僕がひとり残っていました。というのも、6月に全軍労が10割年休闘争を、事実上のストライキをやるということで、最後のロケハンとしてそれを見てから帰るっていうことにしていました。その10割年休ストライキで、米兵がゲートにいた全軍労のメンバーに銃剣を突きつけるという事件が起きたんです。そんな時代を見ながら東京に帰りました。

7月から本格的に、撮影部隊から録音部隊を含めて13名かな、コザを根城にして自由に取材を重ねていった。撮影も録音もほぼ終わってメンバーが帰るんですけど、僕はしばらく残りました。映画が完成する頃に東京へ戻るということで滞在許可の延長をしたりしてたんですけど、実はこの映画はほとんど完成しないまま組織が解散しちゃうんですよね。NDU、日本ドキュメンタリストユニオンという組織が。

組織のことについていうと、たとえば東さんなんかは「東プロ」、三里塚を撮ってた小川紳介なんかは「小川プロ」という名前で作プロダクションを作る。だけど僕らは、日本ドキュメンタリストユニオンというユニオンだから、無名性で映画を作るんだということをやっていました。だから監督が誰、カメラマンが誰、脚本が誰というようなかたちではやらないで、映画が完成したら「NDU」表記だけでやろうと。その前に撮った『鬼ッ子』もそうなんです。ところが、僕が参加していない会議のなかで沖縄で何を描くかっていうことのすったもんだが随分あって、僕が半分家賃を出して新宿のマンションを借りた事務所は、僕がその年の12月に帰ったら無くなっちゃっていて、僕の荷物もどこ行ったかわかんなくなっていました。それでよく聞いたら、「いやあ、もう内紛でみんなもう解散しちゃったよ」という話で。

でも、ただ一つだけ約束事があって、この映画を作るにあたって、一人一人がそれぞれお金を集めてきてるわけです。例えば僕だったら、『アサヒグラフ』で何ページのページを作ること。もう一人のメンバーは、三一書房から新書判を出すこと。(先に全部ギャランティーをくれたわけですよ。)それを引き受けたのがもともと台本を書いていた村瀬春樹で、『誰か沖縄を知らないか』を三一書房から出すんですよ。この間ネットで調べたら、新刊当時で550円か450円だったのが、いま3万5000円ぐらいになってた。なかなか面白い本で、映画は完成しなかったけど、彼はインタビューと録音も全部やってたんで、その内容を全部起こしながら書いていました。1969年当時のブラックパンサーの話とか、吉原の女性の話とか。コザの吉原で働いていたある女性が借金を全部返し終わって、店に来ていた沖縄の男性と一緒に東京で暮らしていたんですが、村瀬がその女性から「私これから自殺します」というような電話をうけたり。そんな顛末もちらっと書いていたりして、この本はいまでも面白いですよ。

それでも、布川と井上修メンバーに、それから当時早稲田の学生カメラマンが助ける状態で出来あがったのが『モトシンカカランヌー』なんです。これはこれでなかなか面白い。

その上映会を71年に那覇やコザでやってるんです。たしか。そのとき上映会に一緒について来てたのが竹中労さん。竹中労さんもちょうど沖縄に入って何かうまい歌手はいないだろうかというようにもやりながらフリーでやってみたいです。

ただ、僕はこの沖縄での上映を観てないんですね。というのは、僕は1969年、みんなが帰ったあとに残っていたとき、中部地区反戦青年委員会っていうのをコザの若者たちと立ち上げるのを手助けしました。当時、いわゆる既存の組織からはみ出るようなものっていうのは、日本の場合、全部抑えられたんですけど、沖縄は比較的自由だったんですね。仕事とか興味とか、いろんなものを含めて、横につながって運動をやるのが大事なんじゃないかっていうようなこともあったりしました。それで当時、日本の地区反戦青年委員会っていうのは非常に力を持っていた時代で、沖縄でも既成の組織からはみ出るっていうか、それを当時で言えば乗り越えの論理みたいな、そういう組織を作ろうという動きがあって僕も一緒にコザで地区反戦を作るんです。当時、既に沖縄は67年ぐらいから日本の新左翼が随分入っていったりして、琉大マル研が中心で革マルは非常に力をつけていて、それ以外の新左翼も次々と沖縄に69年後半ぐらいから沖縄に入ってきていました。中部地区反戦青年委員会はそういうところ（新左翼諸派）から自由でいようという、ある種の約束事があって、来る党派については別に拒まないけども、基本的にノンセクトラジカルでいこうという、そういう組織を作っていました。

前述のように一度東京に戻ったときにはもうみんないなかったり、ばらばらになってたもんだから、さてどうしようかなんていってるときに、ちょうどその地区反戦を作ったメンバーの1人から沖縄に戻ってこないかっていうような長文の手紙が来たりしてたもんですから、70年の7月に戻ってくるんです。

映画を作る過程の中でいろんな人たちが沖縄に来てたし、もちろんブラックパンサーとか、たくさんの人たちと知り合ったりしてたもんですから、沖縄という場所というか空間に非常に興味はありました。当時の中部地区反戦が借りてた事務所の家賃を僕が半分出して、そこに住みながら見たりしていた。ある意味で沖縄闘争の一翼を担うみたいなのとか。

その頃、沖縄ですっと話してたのは、その年の70年の10月にある国政参加選挙をどうするか、国政参加選挙にどうやって参加するかっていうようなことだったんです。復帰前に国政参加するということはおかしいんじゃないかっていうような話もあったし、それで70年に沖縄タイムスで新川明さんたちが連載で、いわゆる反復帰論の展開をやってたんで、当時の沖縄の若い青年労働者なり、インテリには非常に強い影響がありました。それで、丸ごと復帰していったときに、結局、沖縄はそのとき異議申し立てできる素地なり、運動でおかしいと思ってる人たちの結集軸みたいなものが、どうしても必要なんじゃないかみたいなところがあって、国政参加拒否闘争っていうのを起ち上げるんです。

それで、国政参加拒否闘争の中軸を当時の中部地区反戦青年委員会が担うというかたちになりました。国政参加拒否するにあたってどういうふうにするかっていうんで、国政参加拒否討論会をやろうという僕らの考えがあって、その提案を沖縄タイムスに行って、新

川明さんと川満信一さんと2人に相談したら、それはいいよねということになった。新川さんたちも反復帰論を展開してる以上、やっぱり国政参加は拒否すべきだよというようなことになって、国政参加拒否討論会を那覇でやりました。沖縄がこのままで復帰に向かっていいんだろうかっていう、ある種の別の翼があるんだっていうことをやっぱり示す必要があるということが、国政参加拒否闘争の意義だったと思う。

1970年10月は、日本では沖縄の返還運動っていうのがピークを迎える10.21国際反戦デーというのがあって、新宿騒乱で「騒擾罪」が適用されるんです。本当にある意味で沖縄復帰運動が全国的にピークになって、沖縄から大量のオルグ団が東京に派遣されたりというようなこともあったりした時代です。それで国政参加選挙は行われて、革新系の国会議員も誕生するわけですね。上原康助さん含めて、瀬長亀次郎さん安里積千代さん、嘉屋武真栄さんなど。それで、12月にいわゆる国会に初めて沖縄の政治家が公式に行くというようなことがありました。

ところが、そうやってるときも、沖縄で米兵の事件、事故があったりしてて、12月に糸満で女性がひかれて運転手の米兵は無罪判決になります。中部に住んでた僕らはその糸満の抗議集会に行ったり、若いから北から南からいろんなところに行っていました。それで毒ガス撤去、沖縄に実際毒ガスがあって漏れてるんだよというようなことも、いろんなメディアから出てくると、おかしいじゃないか復帰に向かってこんなのはというようなことがありました。そんなことを、新聞の活字もあったり若い青年同士が語ったりしているときに、実はコザ暴動が起きちゃうんです。

ちょうど、12月20日に毒ガスの撤去要求集会があって終了後、僕は友人と4名でコザの街に11時過ぎぐらいからステッカーを貼りに行っていました。全軍労が年明け1月からのストライキを準備していたし、大量解雇も出てるんで解雇撤回、全軍労ストライキ貫徹とかっていうような、僕らのメンバーが作ったシルクスクリーンのステッカーを貼りに、コザの街をずっと貼って歩いていました。そうしたら、ちょうどゴボンという音がして、人が轢かれて車が止まってたんですね。そこに人が集まってきて、何だろうと思って見に行ったら人がひとり寝転がってました。

そこにあった結構大きい車は米兵の運転手が乗ったままでした。琉球警察の人が来ていて、事故処理するから帰ってくださいって皆さん言回ってるときに、ひかれた人は救急車が何かで運ばれていったんだけど、この米兵は絶対また無罪判決になるのかと話が出て、何名か僕も一緒に車のボンネットを上下させたわけですよ。米兵が乗ってた車って結構大きくて、ボンネットを上下に動かそうと押したりすると、サスペンションがかなり動くんですよ。揺れだしたもんだから、乗ってた米兵は車から飛び降りようとしてました。後ろに実は沖縄の女性が2人乗ってたんです。助手席にいたのもおそらく米兵。それで女の子にも降りなさいって言って降ろしちゃって、空っぽになった車を「えいやー」というかけ声でひっくり返しちゃうんです。

ひっくり返したら、誰かが「おいガソリン買ってこい」というようなことを言うわけです。

すぐ近くが当時カルテックスですから、ガソリンを買いに行ったひとりがいて、その人が戻ってきたときに実は最初の車がもう既に燃えてた。当時、沖縄は基地の外にも車屋さんたくさんあるし、あと、米軍基地の中のガソリンスタンドやいろんな車の修理工場で働いてる基地労働者もたくさんいましたから、車に詳しいのがたくさんいる。恐らくそういう人たちだろうと思うんですけど、多分ガソリンを入れるところをひねって最初の車に火をつけていた。

車が燃えだしたらあとは本当にある種の流れみたいなもので、黄ナンバーのみを引っ張り出す。ちょうど今のサンエーのところが、当時、京都観光ホテルで、ベトナム戦争への派遣で沖縄に来てる将校クラスが泊まっていたので、その駐車場には非常に大きい車がたくさんあったりしました。沖縄の車も何台か停まっていたと思うんだけど、基本的にそこから車を引っ張り出すってことを、この群衆はやるわけです。僕も引っ張り出したりしたんですけど、それでそのときに、誰かが「黄ナンバー」というたった一つの言葉を発していました。黄ナンバー、あるいはイエローナンバー。この一言がそのあとの行動に伝播していくように、路駐してある黄ナンバーとか、駐車場にとまってる黄ナンバーを押して引っ張り出して行って、最初に燃えてる車にぶつけて燃やす。

中の町から胡屋に向かってなだらかな坂で、車は右側通行ですから。コザ暴動の話するとき、車は右、人は左でしたよということを、まず頭の中にインプットしてくださいって私は言います。そうしないとなかなか地理的感覚がわかんないもんですから。それで、なだらかな坂で下って、胡屋十字路に向かっていく。そこに車を引っ張り出して、燃やしていく。1台が燃えていくと、あとは連鎖反应的にいろいろ燃えていく。そこにいた群衆は北とイキに、きれいに分かれていくんですよ。僕は南のほうに、いわゆるアメリカのライカムのほうの将校クラスのほうのいる方向へ向かって行って、僕と一緒にいたもう一人の友人は胡屋十字路から第2ゲートに向かって、それで黄ナンバーのみを引っ張り出して、ひっくり返すなり、燃やすなりっていう作業をやった。この燃えた総数が九十何台かです。

このコザ暴動がさらに翌日も続くんじゃないかっていうふうに期待して、翌日同じ場所に来てた連中がたくさんいたっていう話をあとで聞きましたけど。それは全くなかった。だんだん太陽が上がり始めて明るくなってきて、そうするとだんだん、僕もそうですけども、車道にいた群衆が全部すーっと歩道のほうに動いていっちゃうんですよ。残った車道には、燃えた黄ナンバーとかひっくり返った黄ナンバーのみがあるだけで、人々は明け方とともに帰る。それで、何かがあったっていうんで朝になってこの現場を見に来た人たちと、おそらく入れ違いです。僕もその頃、明るくなった頃にうちに帰ってから、何かがあったみたいよっていうんで現場へ向かう人たちとすれ違った記憶があります。だから、現場にいた人たちは、明け方とともに帰って、何かあったみたいだってラジオで言ってたっていうんで見に来た人たちが、明け方とともにコザの現場に来て見るっていうようなことです。

このコザ暴動が、どういうふうにいったい表現されたのかっていうと、いろいろ新聞では暴動とか事件とかってあります。本格的にやっぱりコザ暴動の検証をしようというのは、

コザ暴動から30年たった2000年に、ちょうど95年の少女暴行事件があって、それで、沖縄の基地の問題がやっぱりおかしいじゃないかっていうことがあって、コザ暴動から25年たった少女暴行事件で、ある意味でコザ暴動とまた対照的にというか、7万から8万ということで異議申し立てをしてる。そして、21世紀になろうというときに、コザ暴動の意味合いというのは何なんだろうかというようなことを問いかけようというんで、毎年12月20日ぐらいになると、時々新聞がそのコザ暴動のことを取り上げたりしていました。ただ、公然と関係者がコザ暴動の現場を物語るっていうのは、30年目ですよね、2000年です。2000年12月20日に、コザ暴動を語る集いというのを、コザの中頭教育会館で初めて大衆的にやるんです。

これは結構人が集まって、この年、本土の毎日新聞なんかも、コザ暴動の30年目っていうんでいろいろ関係者に聞いてたりしていました。このときに初めて、コザ暴動の当時、コザ市長だった大山朝常さんの家に駆け込んで、「市長大変になってる」って言って伝えに行った市職員の神田栄光さんがこの集会に出て初めてしゃべるんです。彼はコザ暴動のあと逮捕されるんですよね。何で逮捕されたかっていうと、いわゆる扇動をしてたということで。燃えてる基地の周りで、沖縄こんなじゃだめだっていうようなことを言って群衆を扇動したということで、神田さんは捕まって嘉手納署に勾留されます。実は、彼は大山市長にコザが燃えてて大変になってる、市長すぐ来てくれということを連絡しに行った人なんですけどね。現場にいたことも事実で、ただあおった人は捕まってないんですよ。それで、どれだけでもさんな調査やってたんだろうってことがわかったりしてて、そんな話を含めて、30年目によく語り始めました。それから5年単位ぐらいで、コザ暴動の意味を考えようという人たちがいて、40年目のときには写真展とシンポジウムを、僕も司会したりしてやりました。

去年のコザ暴動を語る集いのときに僕も初めてわかったことがあります。実は伝説めいた話で、コザ暴動で黒人兵には手を出してなかった、出さなかったという話がかかなり伝説めいたかたちであつたんです。僕はそういう現場を見てもいないし、黒人兵がいたかどうかともよくわかんなかったですから、それでいろいろ話を聞きました。もともと僕がこの話を聞いたのは彫刻家の金城実さんが、コザ暴動のちょうどこの30年目のときかな、「今さん、コザ暴動は黒人兵に手出してなかったよな」と話していました。そのことを彼は本に書いてたんですけど、黒人に沖縄の人は手を出してないみたいなことを事実関係と無関係に言われると困るなと思ったりもしていました。

それで、コザ暴動の50年目のとき、シンポジウムやってるときに、実は私こういう経験しましたって人がいたんです。「自分の前を黄ナンバーが来たから、みんなで黄ナンバーを止めた」。止めたら、実はその運転してたのが黒人だった、一緒に乗ってたのも黒人だったと。そうしたら、「ある人が『おい、黒人だから通せ、通せ、車止めるな』』と言って通しましたよって話を初めて聞いたんです。「これは今まで言ってなかったんですけど」って、その人は言っていました。そしたら、実は、ほかの人も黒人の車を帰しましたという。じゃあ、同じ黒人の車なのかというと、全然違うんですよ、時間帯違うから。ああそうか、じゃあ基本的に沖縄

の人はコザ暴動の場で、黒人の車はそのまま通して基地の中に帰したんだ、ということがわかってきたんです。伝説めいた話だったけど事実だった。

それが複数の人間の証言によって明らかになったものですから、それはいったいどうしてなんだろうか、どうしてそういう行動を沖縄の人たちは取ったのだろうか。あの現場にいた人たちってというのは、実はAサインバーの人もいたし、もちろん基地労働者もいたし、組織労働者もいたし、それこそバーテンやボーイにホステスもいた。

僕の記憶でひとつとっても印象に残ってることがあって、胡屋十字路を通ったとき、ある人から「あそこでおばあちゃんがカチャーシー踊ってたよ」という話を聞かされたんです。それがとっても上手なカチャーシーだったって言うんですよ。それから大分経ってから沖縄芝居の間好子さんと会う機会があって、コザ暴動の頃どこに住んでましたかと聞いたら、「私は胡屋十字路の近くに住んでた」という話になって。あそこでめちゃくちゃ上手なカチャーシーを踊ったの間さんじゃないかなって僕は思っているんです。コザ暴動の現場のど真ん中でカチャーシーを踊ると、これくらい絵になることないなと思いながら、それをやっぱり見た人がいるわけだから、それがたとえ間さんでないにしても、そういう場で解放されたようにあの空間があったんだということを、沖縄の人たちは経験したと思うんですね。コザ暴動がなぜ起きたかっていうのは、本土復帰へ向かっているのにおかしいよということが意識の中にあったと思います。何で米兵がこんな自由勝手にやってるのか。しかも、一方で全軍労が解雇撤回でストライキをやろうとすると、米軍はコンディショングリーンを発令して米兵を出さないようにする。要は、権力の側は住民を分断していくわけです。全軍労のストライキに対しては、コンディショングリーンを張ることで米兵を基地から出さないようにして、沖縄の人間同士を賛成／反対へと意識的に分断させようとする。実はそのコザ暴動のときも、ゲート通りを一群がゲートに向かって行ったとき、今の一番街のなかのほうの路地でピケを張ったお店の人たちがいたんですよ。この人たちはもうこの路地には絶対入れない、やるんならこの通りを真っすぐ行けっていうような意識でピケを張っていました。ただ、実際問題、ああいう路地に行こうとしてたのは、かなり酔っ払ってた連中らしいんで、少なくとも意識的に黄ナンバーを引っ張り出してた一群については、そうではなかったと思います。

そういう意味では、分断されているなかで復帰に向かって、沖縄はいったいどうなるんだよっていう思いがあったはずですよ。コザ暴動の現場のラジオの音声として残ってる音は、「沖縄いったいどうするんだよ」とっていうような悲痛な叫びみたいなものがあります。その悲痛な叫びがやっぱりコザ暴動であって、だからこそ、一夜で終わって続きについてはちゃんと運動体として引き受けてくれよっていうのが、コザ暴動に参加してた人たちの意識の底流にはあると思います。それがやっぱりコザ暴動の面白さみたいな、文学作品にもなり得るだろうし、ドキュメンタリーにもなり得るところだと思います。けども、いまだなかなかコザ暴動を描ききった文学作品もなかなかなくて、一応、今年復帰50年で、コザ暴動をピークにした映画を作ろうとして、結局挫折してるんですよ。

やっぱり表面だけをさわっててもしょうがない。僕はあのときに強烈に思ったのは、コザ暴動の現場にいて、ずっと黄ナンバーを押して、燃やしたり、ひっくり返したりして痛烈に思ったのは、何か非国民宣言みたいな、何かこう日本人である必要はないなっていうような感じは受けたんですよ。それで、沖縄は別に日本である必要性はもう全然ないんじゃないかなっていうような思いがあって、それが復帰に向かっていった将来どうなるだろうかという思いでいました。

このコザ暴動から2年後の1972年に沖縄は本土復帰します。1972年っていうのは、とっても不思議な年で、沖縄が日本に施政権返還されるけども、日中国交回復があって、さらに連合赤軍事件があって、いわゆる日本の戦後の左翼運動がストップしていくっていうか、ずーっと停滞していく。それでずっと学生運動なんかも支持して、ある意味では、ノンポリであろうが、ノンセクトラジカルであろうが、必要に応じて運動に参加していた人たちが、ずーっと引いていったのが連合赤軍事件以降の一つ典型だったんだろうと思います。そういうなかで75年にはベトナム戦争が終結しますけども、72年の沖縄の復帰の年っていうのは、コザで歩いてても、当時の強い米兵の歩く姿っていうのはほとんど後ろ姿に迫力がなくて、ベトナムの戦いに行くような兵隊のイメージは全くなかったです。確実にアメリカはベトナムで負けるなって印象を持っていた。そういう中で、沖縄が日本に復帰していった、じゃあ、このままで本当にいいんだろうかって思いを抱いた人々によって、いくつかの作品も生まれてきたりする。

1976年に演劇集団「創造」の知念正真さんが『人類館』というオリジナルの戯曲を書いて、これは本当に日本人になろうとしてる、あるいは日本人であり続けるようなウチナンチューをある種のアイロニーを持って描いていて、「沖縄よ、おまえらどうするんだよ、俺たちはどうしたらいいんだよ」というようなことを『人類館』の作品に書くわけですね。それで、それはある種の衝撃をもって迎えられるわけですけども、今もずっと沖縄どこへいくんだよっていうことが問われてる時代だと思っています。

それが復帰50年の今年に安倍晋三が亡くなって国葬をやるうなんていうのは、本当に何を考えてんだろうっていうことを僕は痛切に思います。多分、国葬に賛成する人の中には沖縄の問題なんて全く頭の中にないと思うんです。沖縄のことが頭にあるならば、国葬なんてのは絶対できるはずないんですよ。あるいは、自殺した赤木さんのことが頭にあるんなら、彼の国葬に行くなんていうことできるはずないと思う。彼が亡くなったときに、10万人近くもあそこに行って花束をやるとか、記帳をするっていう、この日本人はいったい何なんだろうかと。だから9月27日の安倍の国葬の日に、日本人は非国民宣言をする日というぐらいのことをやったほうがいいだろうとぼくは思う。

沖縄はもう散々、最終的にいま辺野古の問題が新基地の問題になるというようにやっていったのは小泉からのことで、それで安倍が強行突破していったわけだし、それがやっぱりコザ暴動から52年、復帰から50年のときに、こういう仕打ちというか政治を見せられて、黙ってる必要はないんじゃないかなというような思いをしながら、今日、こっちに向かっ

て来ました。今日のところは、これぐらいでちょっと止めたいと思います。

友常) 見事にコザ暴動を、復帰50年という現在の文脈に照らしてお話しいただいたと思います。それでは、次にウェスリーさんをお願いいたします。

上運天) こんにちは。上運天・ウェスリー・イワオと申します。ハワイ生まれ、育ちの沖縄系三世で、家では日本語も、もちろんウチナーグチも使われてなかった。何か沖縄のことは、二世である両親にとって何かとても恥ずかしいことだった、ウチナーンチュだということは。だから、家では沖縄料理も食べなかったし、ウチナーグチも全然使わなかった。“What are you?”って聞かれたら“We are Japanese.”とかつていう答えでしたけど、時々、私の親がウチナーンチュという言葉を使っていました。あの人たちはウチナーンチュだよって、だから、小さいときから、私たちは違うなと思ってたんですね。ジャパニーズでもあるけど、やっぱりどこかが違うと。そして、私が小さいとき、母方のおばにハジチという入れ墨があったのを見ました。でも、そのハジチはちっちゃかったんです。

なぜかという、ハジチが禁止されて、ティーンエイジャーのときに不良だったから、友達と一緒に自分たちでやったらいいんです。不良おばあだったんですけど、自分の沖縄アイデンティティに興味があったんですね。やっぱり親は、私たちはジャパニーズだけどちょっと違うよ、ウチナーンチュだよと言っていまいした。けれど、私は小さいときは恥ずかしかったからあんまり表に言わなかったです、ウチナーンチュだっていうことを。

でも1980年代から、ハワイでは多分アメリカ本国のシビルライツとか、人権運動とブラックパワー運動とかの影響で、そしてまたアジアアメリカンもそうした運動の影響で、ハワイのウチナーンチュの間にも自分のアイデンティティを探ろうという運動ができたんです。ハワイにいるウチナーンチュが三世になると、二世、三世、さらに四世になると、沖縄文化というものはほとんど分からないです、残ってなかった。それでどういうアイデンティティを作れるかっていう問題になるでしょ。だから、私の場合は、私の世代からアイデンティティを作るための物語が必要、あるいは伝説が必要だった。私たちの物語あるいは伝説は、よく聞くかもしれないですけど、大きく言えばモデルマイノリティの伝説。もっと詳しく言うと、その物語の一世たちは男が中心。男がハワイ、あるいはアメリカに来て、一生懸命働いた。これ伝説ですよ、事実じゃないですけど、どういうふうに伝説となったかはあとで話します。その伝説では、一世たちが文句言わずに一生懸命働いて、そして子どもとお嫁さんと呼んだりして、ハワイで子どもを作ってそれが二世。二世たちは、勤勉、また一生懸命働いて成功する。三世も同じ、そういうふうに成功する。大体みんなおとなしいから成功する。そういう物語がとても強い。

私も、じゃあウチナーンチュはとってもおとなしい、勤勉で一生懸命働いて、一生懸命勉強して、という伝説からうけた影響がとっても強い。そして、世界ウチナーンチュ大会もその伝説が主流だと思うんですけど、その伝説あるいは物語、あんまり批判的に言いたくな

いですけど、世界ウチナーンチュ大会の物語はそうだと思うんです。それが一番強い物語。私は大学時代、何を勉強しようかなと思っていました。私の父は歯医者だったので、私も歯医者になろうと思って、そういう勉強していました。でも途中で、もう私は歯医者になりたくない、そして自分のルーツを探りたいなと思って、それで、ハワイ大学のエスニックスタディーズという専攻分野に行ったんです。

エスニックスタディーズは、1960年代、70年代の学生運動でできた学問です。さっき言ったように、ブラックパワーとか、ブラックシビルライツとか、チカーノのパワーとか、ネイティブアメリカンの運動、またエイジアンアメリカンの運動が一緒になって、いま私が教えてる大学、サンフランシスコ州立大学でそういう運動があって、エスニックスタディーズという学部っていうんですか、カレッジオブエスニックスタディーズという学部が最初に来たんです。その影響でハワイにもエスニックスタディーズという専攻ができた。私は自分のルーツを勉強したいからそのエスニックスタディーズに入ったけど、そのプロテストの影響があるところでは考え方が違う、フレームワークが違う。

最初は私の沖縄のアイデンティティの作り方は、やっぱりモデルマイノリティ、さっき言った物語の影響が強かった。でも、少しずつ勉強して、ウチナーンチュはそんなにおとなしくなかったんだと思った(笑)。例えば、ハワイの労働組合で活躍していた人たちは、沖縄の人が多かった。もちろん本土から来た一世たちのなかにも活躍していた人がものすごく多かった。でも、戦後になると、その歴史は全部消えてしまった。その反対、あるいは抵抗した運動を起こした日系人、あるいはウチナーンチュのレジスタンスを、エスニックスタディーズはやっぱり見ようとする。その影響で私は沖縄を違う方向で見るようになったんです。

いろいろありましたが、長いあいだ神奈川県に住んでからアメリカに戻って、UCバークレーのエスニックスタディーズに入ったんです。入った当時は沖縄のアイデンティティをめぐって勉強したいと思っていた、ちょうどその頃、1995年に12歳のレイプ事件があった。そのとき、沖縄から高里鈴代さんたちがウィメンズキャラバンで来て、それと同じ時期に私は、バークレーの隣にあるオークランドで、エスニックスタディーズの先生の紹介をうけてブラックパンサーズの元メンバーたちに会ったりしていました。

そして、あるブラックパンサーズと友達になって、本などにあるコザ暴動の色々な写真を見せに持っていったら、彼もびっくりしていました。「えっ、何で?」と思いました。私は気づかなかったけど、ヒューイ・ニュートンのポスター、有名なブラックパンサーズのポスターが写真のなかにあるんですね。そのブラックパンサーズの友達が、「Hey, that's Huey!」といってびっくりしていました。それで、私がそこからコザ暴動の話を、大学の先生のゼミで、論文に書いたんです。このブラックパンサーズ、このコザ暴動について書いた。で、その論文書くためにいろいろ研究しながら聞いてはいたんです、黒人に手出すなっていう話。それ本当かなと思っていましたから、今日、今さんから話を聞いて、もうキーブルダッチャー……何て言う、キーブルダッチャーって。

今) 鳥肌。

上運天) 鳥肌が立ちました。伝説だったのかもしれないですけど、実際にそういうことがあったのかなと思った。今日聞いて、すごく感動しました。

それで、論文を書きながら、違う沖縄のイメージができたんですね。ハワイ、海外のウチナンチュにとって、特に日本語わからない人たち、読めない人たちにとっては、アイデンティティを作るための材料があんまりなかった。その当時は特になかった。今はもっと、英語で書かれた論文とか結構ありますけど、その当時は材料あんまりないです、沖縄アイデンティティ作のための。舞踊とか三線あったんですけど、沖縄の歴史とか、特に戦後の歴史を勉強するための材料はもうほとんどなかったんです。

唯一の映画、沖縄についてのハリウッド映画。The Moment of Truth / The Karate Kid (『ベスト・キッド』)はそのあとですけど、それも一つ。その前にマーロン・ブランドの映画、『The Teahouse of the August Moon』を私の親が見て、「あ、これ、沖縄の話だ、見なさいよ、これ沖縄の勉強になるよ」と言ったんです。それを見たらマーロン・ブランド、白人の俳優がイエローフェイスをして、変な東洋人のアクセントで話して、そして、その映画ではウチナンチュがみんなおとなしい。そして、アメリカ人を歓迎する。そういう材料しかなかったんです、あのとき。

でも、こういう研究をしながら、ウチナンチュが抵抗したっていうことを学んだことが、私にとってとても重要でした。世界のウチナンチュ大会が今年もあります。その強い伝説、物語、つまり一世たちが来て、一生懸命働いて、勉強して、二世が生まれて、そういう目的論的な伝説、それはとてもすばらしい話ですけど、そればかりに基づくと沖縄アイデンティティ、特に海外にいるウチナンチュのアイデンティティが偏るんじゃないかな。そして、現在、コロナでアメリカではアジア系に対しての暴力が随分増えてきましたね。それで、分断ですよ、英語でdivide and conquer。だから、アジア人、黒人、ラティーノ、ネイティブアメリカン、みんな別々の同じ人間じゃないって分断する。こういう物語が強くなると、アジア人のマイノリティの伝説が、物語が強くなると、なかなかアジア人は黒人と一緒にならない。連帯感ができないし、逆にアジア系、ウチナンチュも含めて、私たちは勉強するから、よく働くから、あんたたちもしなさいよという気持ちになってしまう。これはアメリカの話ですけど、今さんのお話のようなとても重要な歴史をあまり語ってないですよ。このとても重要な歴史がなかなか語られないし、どういうふうにもっと語れるようにするかという課題があります。これぐらいです、私の話は。

友常) ありがとうございます。随分鳥肌がたくさん立つパネルになって、楽しいんですけども、お二人の話を引き取って、話を少し開きながらいきたいと思うんです。

私の意見も入りますけど、モデルマイノリティっていう意識の形成には、もう一つ、例えばプランテーションの経験、移民の経験があり、そして日系人強制収容所の経験がある。そ

れが恐ろしいことに、今さんが言われた安倍の国葬を歓迎する日本人も同じなんですね。モデルネーションなんですね、日本人というのは。同じように占領期を経験してできあがっていった点で、そこにやっぱり共通した習性、それをあえて自分たちで受け入れていく心性もあるし、それが作られた部分もあるなというふうに思います。

ちょっとコザ暴動に戻ってお二人にお聞きしたいんですが、71年に5月と10月にゼネストが続きますよね。やっぱり全軍労のストライキが予定されていた、1月の段階に。今さんの話で引っかかったというか、すごくこれは留意しないといけない点だなと思ったのは、コザ暴動に参加している人たちが、見えないというか無意識的な組織との連帯、連携関係を持っていたということと解釈していいのかっていうことですね。

大きな組織の運動、あるいは組織的な運動、社会的な運動とのどこか無意識の連帯があったというふうに考えるとしたら、つまりこれをストライキと暴動との関係っていう論点として提起することができるのかどうかをお聞きしたい。それはウェスリーさんが言うこともそうで、サンフランシスコステートユニバーシティっていうのは全米最強のストライキ記録を持っている。67年から68年にかけてほとんど丸々1年近くストライキやって、それで学部を作るんですけど、あれもやっぱり組織的な受け入れというのを、条件をやっぱり念頭に置きながら行われているストライキという運動ですね。労働というよりはストライキという運動なんですけども、それが学部という制度を設計していく。しかも、あれはヒスパノとアジアアメリカンとブラックパワー、まあ三つの力で共同して進めるというのがあった。そういう意味で、ストライキと暴動との関係についてお聞きしたい。

それからストライキとエイジアンスタディーズの関連においてウェスリーさんの経験から言えば、それがアメリカにおいて大学のエスニックスタディーズというのを作っていく運動になっていく関係性、それを今どう考えるか。つまり、どちらかが欠けてもいけないということなのか、それは両者が一つの運動の歯車みたいなもので、少し極端に言えばですね、実質的に直接行動の運動っていうものがあって、そしてそれが制度設計につながっていくということを、今、どう考えるか。そのようにちょっと質問として振ってみてお聞きしたいなというふうに思います。今さん、いかがでしょうか。

今) コザ暴動の翌日あたりには、これは誰かが扇動して組織的に計画されたんだという警察の動きがあるんですね。この報告書の中にも、そういう琉球警察のものがあったりするんですけど、あれぐらいのことがあると、とにかく誰かが組織的にやらないと、あそこまで、しかも整然とは絶対できないよというふうに誰しも考えたと思うんですね。それで、参加したなかの一人としてみたら、誰も統制、指導者はいなんだけど、ある種の確認事項というか、長い時間にゆっくりゆっくり本当に静かに動いていくから、その中である種の合意事項みたいなものが、参加者同士のなかできあがる。

例えば、僕だったら途中の、中の町派出所の、少しガラス窓が割られてたんですね。それを見ながら、僕はそのまますっと南に向かって行くと、諸見の派出所があって、この派出

所に石を拾って、投げようとしたんですよ。そしたら、パッと手首をつかまれて、「今日は警察関係ない」と言われて、僕は石を落とすんですよ。なぜ僕は警察に石を投げようとしたかという、その前夜の毒ガス撤去闘争のデモで機動隊に蹴飛ばされてたんです。数時間前には機動隊に蹴飛ばされてたもんですから、その腹いせで便乗してという具合でした。手首をつかんでいたのは組織労働者風の人なんですけど、そのときに「あ、そうか」って。それはある種の双方が統制し合うという流れであって、それは自覚されない暴動であればあり得ない話なんですよ、実は。ということは、コザ暴動の参加者、あるいは沖縄総体と言っていいと思いますけど、沖縄復帰を巡る復帰運動とか、あるいは基地を巡る闘いとか、一度ゼネストを計画したぐらいですから、そういう中で自らを意識的に鍛えていたと思うんですよ。それは権力の何であるとか、あるいは沖縄はこれからどこにいく、俺たちはいったいどうなるんだろうかってことを、自問自答するような、それがあつた種の日常だったと思うんですよ。それがコザ暴動に流れていた。

そのあとに、行われる全軍労のストライキを一般の市民とか組織労働者がずっと応援してって、それでコザのゲート通りは、全軍労のストライキの集団によって占拠される状態が1週間ぐらい続くんですよ。コザ暴動があつた同じ現場で、ストライキを支援するような集会が行われたりしていた。もちろんその一方で、Aサイン業者の人たちは、地団駄踏みながら見ていたことも事実です。そのなかで組織労働者たちがどうしたかという、コザ暴動に「騒擾罪」が適用されようとしたときに絶対反対っていう集会を開いたんです。全軍労であつたりそのストライキを支援してた組織労働者が「騒擾罪」の適用は絶対まかりならぬと言って集会をやった。

コザ暴動を否定的じゃなくて、肯定的に捉えてるがゆえに、「騒擾罪」の適用大反対という大会をやったんですよ。それに「騒擾罪」を適用するっていうことは、Aサイン業者の人たちも言えなかったし、そういう意味では、コザ暴動があつたあとに続く全軍労のストライキに大きな影響を与えたと思う。逆に言ったら、今から見たら大したことなくて、ヘルメットをかぶったり、長い旗ざおを持ってデモをしたりというような一つの流れになっていくんですけど。

いま、僕はさっきからコザ暴動って言いながら、実はここしばらく日本語で言う暴動っていうことが正しいんかどうか、最近だんだんわかんなくなってきました。翻訳したときに英語では riot、それを結局日本語に直すと暴動っていうふうに一般的になる。ただ、riot っていうかたちで英語表記されることが正しいのかどうかっていうことが、僕は最近非常に悩んでいます。何年か後ぐらいにはコザ暴動という言い方やめようかなと思ったりもして。だから、それは騒動、まあ厳密に言ったら、僕は当時、中部地区反戦で書いたビラには、コザ暴動のことを対米軍実力行動っていうふうに書いたんですよ。それも何かおかしいしなと思いつつ、ただ、その意味でいったら、コザ事件のほうが、あるいは騒動のほうがもっと広い意味で表現できる素地があるのかなと思ったりして、今、ちょっと悩んでいます。

友常) 暴動という言葉が適切かどうかを話し始めると内面的な話になって、立場性とかみんな出てしまってなかなか答えられなくなるんですけど、山谷とか釜ヶ崎の暴動とよく似てるなというようには思っていますね。61年の釜ヶ崎の暴動、第1次暴動もやっぱり日雇いの労働者が車でひかれて、それを警官がほとんど見捨てて、むしろかけただけなんで、死体の上に、というのがきっかけで暴動になるということがありました。山谷でも同じようなことがあったからなんですけど、やっぱり暴動の持つニュアンスっていうのは、どこかで忘れてはいけないところがあるんだっていうことですよ。今さんの話ですごいのは、結局、沖縄はどこにいくのかっていう問いが、どういう沖縄を作るかっていう問いだった。多分そのビジョンを共有していた、無意識のうちに。それがいろんな意味での統制とか、自分たちの行動の規範を作ったということになる。それが全軍労の「騒擾罪」適用への反対運動、そのあとのゼネストにつながったということになるのかなということです。ウェスリーさん、どうでしょう。

上運天) 私、コザ暴動の論文を書いたとき、とても苦労しましたね。riotという言葉は.....uprisingのほうがいいんじゃないかなと。riotって英語で言うと動物的な行動。何も考えないで、要するに黒人と有色人種が頭使わないで行動するっていう、そういうニュアンスがあります。だから、riotは使いたくないですよ。例えば、92年のロスの出来事はLos Angeles Riotsっていうでしょ。そのイメージは、黒人とメキシコ系の人たちがやる、ああいう野蛮な有色人たちがやるものだというイメージがあります。だから uprisingを使った、私は。友常さんの質問はちがうところですよ。

友常) つまり、どういう社会環境を作るかっていうビジョンが、実はそういうストライキの中から生まれてくるというよりは、初めからあったんじゃないかという。

上運天) 私は参加してないですけど、先輩たちの話を聞くとセオリーはなかったんですよ。だから、セオリーはあとで、まず行動しなきゃいけない。でも、やっぱりブラックパンサーズの影響があったんですよ。ブラックパンサーズは、まずオークランドでは、例えば医療とか足りないんですよ。朝、子どもたちが起きて、学校行く前に朝ご飯食べない、まず食べ物がない。住むところない。医療がよくないとか、そういう問題が優先的。だから、今の問題から始めて、いま行動しないとダメ。そして、サンフランシスコ州立大学は、あの当時はサンフランシスコにまだ黒人多かったし、東洋系、エイジアンアメリカンズが多かった、メキシコ系が多かった。

でも、あんまり入れないです有色人種の学生たちは。有色人種だけでなく、ワーキングクラス、労働者、ワーキングクラスの学生たちが入れない。だから、まずそういう問題に取り組まないといけない。だから、そこから始まった。要するに、多分、よく使われた言葉だと self determination、自己決定。私たちは自分の力で自分の将来を、未来を作るって

う権利を持ってやってたんですけど、一つはやっぱり自己決定、self determination。あとは、有色人種、people of colour。大学入ってどういう勉強するかというと、白人なるための勉強。特にサンフランシスコ州立大学は、エリートなるための大学じゃなくて、その真ん中の中流の層に入るための勉強だってよく学生たちは見ていたんですね。そのヒエラルキー、縦社会をわかっていた。だから、そのストラクチャー、構造をやっぱり壊すための運動だったと思っています。

でも、やっぱりどうなるかわからなかった。もう本当に決心して、解放されるかもしれない、もう仕事できなくなるかもしれないけど、みんなどうなるかわからなかったですね。みんなそうだったんでしょうね。そのコザ蜂起のとき、どうなるか。ちょっともしかしたら逮捕されてもう仕事できなくなるとか、同じような気持ちだったと思いますけど。

友常) でも、パンサーもそうでしたけど、コミュニティベースの運動だから、やっぱりこういうコミュニティを作るかってビジョンは、どこかで反映したのかなっていう気もちょっと起きると思いますね、やっぱり。

上運天) そうですね。コミュニティということでブラックパワーはそこから始まったし、コミュニティは自分たちで決める、ある程度はやっぱりマルクス主義の影響を受けてたと思うんですけど、搾取の運動、当然みんな読んでたんですけど、People power と、やっぱり民主主義をそのまま求めてたと思うんです。それも理想的なものではありましたが。

友常) 大学は一応アカデミアという民主主義と自由と人権の理想があるから、それに従った制度設計が落としどころだと僕は考えてはいますね。でも、日本の学生運動はそこまでいかなかったので反動を引き出したんだと思いますね。制度設計につながるというのは、少しの例外を除いてはあんまりない。ありがとうございます。

さて、ここで、ちょっとフロアに開いて質問や意見を受けて、またお二人の対話ができればなと思いますが、ここで何か意見、質問等ありましたら、2人に対して、それぞれいかがでしょうか。Zoom のほうから、まあチャットに書いていただいても構いませんし、そこでご発言いただいても構いません。いかがでしょうか。呉世宗さん、お願いいたします。

呉) 琉球大学の呉と申します。つかぬことをお聞きしたいんですけども、ちょうど今さんのお話で、コザ暴動という名前に少し迷いがあるという話がありました。韓国で言うと、例えば済州島、1948年の四・三事件、あれをどう名づけるかという問題があって、暴動っていう言い方は、権力側の視点なのだから抗争と呼ぼうという動きとかあって、そのあたりにちょっとつながるケースかなというふうに思っています。それから、それに関連してなんですけども、私が持っている資料でいくと、『破防法研究』っていう雑誌の第10号に、「燃えるコザ」っていう***があって、そのなかで、暴動でいいんだっていう議論が出てきま

す。それは主体性を持って動いたものから、その主体性を肯定するうえにおいては、やはり暴動なんだという言い方が出てきているんですね。そのあたりで、当時はそういう議論もあったのかなっていうふうに思ったんですけども、その主体性と暴動に関して、今さん、どういうふうにお考えでしょうか。

今) 僕もずっと暴動でいいと思ってました。ただ、年数を重ねてくるにしたがって、言葉は時代とともに少し意味合いも変わってくると思いながら、当時、1970年というのは、ある意味では、暴動万々歳みたいな時代の雰囲気もあって、新左翼が当時はことごとく暴動路線ですからね、あの煽り方としては、新宿大暴動とか、渋谷大暴動とか、暴動が革命を生むんだというようなことで言い続けられた。それは一方で、連合赤軍等も生んでいったりするんですけども。

僕なんかもコザ暴動に関しては、コザ事件、騒動っていうふうに翌日ぐらいから、メディアの論調が変わったときに、騒動じゃねえよって。それは参加したほうとしては、騒動、騒ぎなんかじゃない、これは暴動だよって、主体性を語るために、あえて暴動ということをやったんですよね。じゃあ今もずっと暴動ということの表現でいいのかということで、一時期、僕もコザ暴動は一夜の民衆蜂起という言い方をしてて、それが正しいよなと思いながらも、何かいつの間にか暴動なのか、騒動なのか、事件なのかって、三つぐらいの言葉に収斂されちゃって、これも本意じゃないなと思っています。ただ、騒動ではない、事件にするには、ちゃんともっと歴史、年数が必要だなと思ったりもするしと思いながら、悩ましいところです。

基本的には、僕は暴動だと思いますよ。ただ、英語で翻訳されるときに、riotって翻訳されてると、いろんな人から聞かされて、しかも、こないだのホワイトハウスに突っ込んだトランプの付和雷同のばかどもみたいな、あんなのと一緒にされるのもしゃくだしなと思いながら、何かもっと主体的に表現できるものがあればいいのかなと思って、でも、やっぱり暴動という表現する人が多いよね。

だから、それは自ら主体的な、ただ、全員が全員主体的かといえば、それは付和雷同もたくさんいるだろうけど、このコザの空間を数時間にわたって占拠したという事実は、コザの民衆の表現であって、それがいわゆる、俗にいう「暴動」にはなっていないのは、翌日にはもう静かに日常に戻っていったってことであって、暴動かどうかということは、日常と非日常との関係の中で考え出したほうがいい表現なんだろうなと思いながら、悩んでいるところ。

ですから、誰かがいい表現法を見つけると、あっ、これだというようなことが、この数年以内にくるかなと思いながら、暴動ということを使おうと思っではいます。

友常) 上原さん、お願いします。

上原) 今日、黒人に手を出したか、出していないかということで、いろんな事実が5年、10年、

30年、40年伝わる中で、わかってきたっていう話があったんですけど、今っていうか 2010年代から、黒人のBlack Lives Matter 運動とかで、警察暴力がアメリカでは問題になってます。じゃあ、沖縄はBlack Lives Matter 運動とか、Black Lives を訴える運動と、どうつながり得るのかということ、当時のこともご存じの今さんや、バイエリアと沖縄を行き来しているウェスリーさんから何かあれば聞きたいなと思って、よろしくお願いします。

友常) もうひとつ大阪公立大の山崎さんで、まあ別々の問題なのであれなんですけど、今さんに質問します。主体性の問題ともかかわるのですが、69年に復帰が既定路線となつてから、タクシー業者などの対米兵暴行事件が増えていきます。コザ暴動の際は、センター通りや、トリヤでは破壊行為はみられていません。しかし、翌年のいわゆる第2コザ暴動では、センター通りの業者が暴れる黒人兵に対して詰め寄るということもありました。復帰が決まってからのこういう行為をとおして人々の政治的主体性に何か変化があったと考えてよいのでしょうか。

今) 実は69年に沖縄へ来て『モトシンカカランヌー』のロケハンをやっているときに、意識的に黒人兵との接点を持とうとしたんですよ。当時のコザを少し高台から俯瞰でカメラ回してみようとしたとき、黒人兵のグループが3名か4名かちょうどいたんですよ。

それで、すぐブラックパンサーっていう言葉を僕らのメンバーが発したんですよ。この黒人兵たちはハッと反応したんですよ、表情で。そしたらすぐ「ブラザー」という言葉が返ってきた。よくよく話したら、アメリカの大学にいて空軍で徴兵されて嘉手納に来たというんです。私たちは映画を撮りに来てて、娼婦等人をカメラ回したりしてるんだということと言ったり。それは面白いねっていうようなことを言うので、じゃあ自分たち一軒家借りてるから一緒においでよって言って場所を教えたんです。

2〜3日後にすぐ5〜6名連れで来るんですね。そこでいろんな話をしてたら、沖縄はブラックと一緒にだよ、自分たちと同じだよって。こんなところに米軍基地がこんなにあってもいやあないのになって、やっぱり沖縄の人たちはとってもかわいそうだよってなことを言ったりしてたんですよ。その場には沖縄の人もいたりしてたんで、基地で働いてる全軍労の組合員に黒人兵っていうのは嘉手納基地でどういう存在なのって聞いたら、とにかく嘉手納基地の中でもトイレは白人と黒人別々だよって話とかいうのを聞かされた。黒人ってこういうなかにいるんだなと思いながらいて、僕はそういう初めて会った黒人とのいろんな思いがあります。

この黒人兵たちがどういう話をしたかは、あの映画以外に、村瀬春樹さんが書いた『誰か沖縄を知らないか』って三一新書の中に比較的詳しく書いてあります。

コザのゲート通りの第2ゲートのすぐ近くにシャドーってジャズ喫茶があったんですよ。ゲート通りっていうのは、基本的に白人街で黒人がお店に入れないんだけど、このジャズ喫茶は、黒人も白人も共存していたジャズ喫茶で、経営者は沖縄の人です。そこでは、僕

なんかはジャズっていうのは黒人の抵抗の音楽であるっていう認識があったりして、ロックは白人のあれなんだと思いがあったんですけど、シャドーでは白人も黒人も共通でジャズを聞いたりしてて、いろんな論議をしてるんですよね。

このジャズ喫茶が、のちにPCS なんかの人たちが集まる場所にもなっていったりします。そこで集まってきてる黒人たちは、自分たちはいつどうなるかわかんないけどもと言いながら、とにかくベトナム戦争は負けるよということをはっきり言ってたんですよ。いつ自分たちも行くかわかんないけどもっていう、その黒人の思いなんかも聞いたりしました。それは僕が黒人のことを考えるときにずっと頭の中にあります。実は僕も一緒にうつってる写真があって、そのうちの黒人のグループのひとりを除いては全員嘉手納のエアベースにいますよ。ほかには全軍労の組合員とか。ほとんど嘉手納のエアベースの黒人兵ですよ。それで他にはアメリカから来た民間の脱走米兵の支援をやったり、国吉さんという沖縄タイムスの記者がいたり、色んな話をしてたんですよ。ブラックパンサーのポスターも写っていたりするんですが、彼らが基地の中から持ってくるんですよ。それを貼ったりしていました。そういう思いでやっぱり付き合っていました。

2〜3年前かな、アメリカで黒人が殺されたりして、それに対して沖縄でも抗議運動やろうということで、元山さんらが呼びかけ人になって、胡屋の交差点でその集会をやったとき、黒人とかダブルの人たちが参加していた。あれを主催したのも、ここがコザ暴動の現場だからってようなことがありました。僕もそこに行って、そうか、コザ暴動ってのは、こういうかたちで歴史的につながってって、そこで黒人のことが話し合われたりというようなことを見ました。

友常) 対米暴行事件が増えてきたということに関してはどうでしょう。

今) 山崎先生の話は、多分71年か72年かな。俗に第二のコザ暴動といって、僕はこの表現あんまり好きじゃないんだけど、山崎先生もあえて使ってるのだと思います。それは全然質が違うっていうか。71〜72年ぐらいになると、Aサイン業者なりがだんだん強くなっていくんですよ。それは一方で、全軍労の闘いが少し収束に向かっていくにしたがって、いわゆるAサイン業者がものすごい強くなったり、彼らの結束力も強くなっていく時代。そのときは、黒人であるか白人であるか関係なしに、対立関係が生まれてきたんだと思ってるんです。

山崎) ありがとうございます。ちょっと、マニアックな質問で申し訳なかったんですけど、私、第二のコザ暴動って言ってないです。これ第二コザ事件と言ってます。多分、これ人種対立のあおりを業者側が受けてしまうということで、要するに白人街の業者に黒人兵が入って行って暴れると。そうすると、業者側がまたそれに対して詰め寄る、石投げたりっていうことがあったので、結構暴力的なエンカウンターみたいなものが至るところで起こってたりした時代なので、それはもう復帰の不安定ということもあったんだと思うんですけど、

特にタクシー業者がやられっ放しだった、無賃乗車とか、暴行受けてそのまま逃げていかれるとか。それでとうとう業者たちが協力して取り囲んでということが、69年ぐらいから結構起こりだしてきたりしていた。コザ暴動のときというか、あのときも、おとし番組に出られたタクシーの運転手の方が起訴されたりということで、一番やっぱり暴力の被害を受けていたタクシー運転手たちが、とうとう立ち上がるということがあったので、この立ち上がるっていうことの背景に、日本復帰っていうことがあっての行動だったのかなっていうのを、ちょっとどうなんだろうっていうのを考えたりしているわけです。

ただ、対立の構図がこのように非常に複雑なので、いったい誰が誰に対して、暴力的行為を振るうかというのが本当に錯綜している時期ですので、先ほども暴動という言葉を使うかっていうことがあったんですけど、実際には、政治的な一つの表現手段として、そういうことが交錯してたという事実はあると思うので、沖縄の人がやられっ放しということではなくて、そこに何か政治的主体としての変化があつたの時期にあったのかなっていう、そこにはやっぱりいろいろブラックパンサーとかアメリカの公民権運動も含めて、民主主義とかっていうそういう影響も大きかったのかなとかって思ったりするので、そこがやっぱり沖縄の人たちにとって、非常に大きな分岐点だったんだろうなと思っています。またこれは来週、今さんとゆっくりお話ししたいというふうに思ったりします。どうもありがとうございました、本当に今日のお話は。これからもよろしく。ありがとうございました。

友常) それでは、ウェスリーさんお願いします。

上運天) 私の答えがずれてるかもしれないですけど、私はブラックパンサーズと友達になって、そのひとは選挙に出たんです。オークランドの市議会選挙出て、結局負けたんですけど。でも、その選挙運動のとき、二人でオークランド回って選挙運動をやったんですけど、選挙本部に戻るとき、黒人のおばさんたちが私に「食べた？」って聞くんです。いや食べてないですけどって言うと、そのおばさんたちが「何で食べてない、食べなさい」て、すごいウチナーンチュと全く同じだと思いました。その、何か言葉で言えないんですけど、そのとき感動したって気分が同じなんです。

そして、もう一つの話も思い出しますが、ウチナーンチュ、特に海外にいるウチナーンチュ、黒人に対して、またほかの有色人種に対して偏見ありますよ。無罪じゃないです。実はいろんな偏見を持っています。それは否定できないです。

でも、私の母から聞いた話では、戦時中、第二次世界大戦の戦時中、私の母の兄、わたしの伯父さんがハワイのカウアイ島の基地で働いていて、黒人の兵隊さんと友達になってみんな家に連れてくる。そのとき母はまだ高校生だから、おばあがあっちに行くなよって、黒人がいっぱいいるから入るなよって言ってたと。なのに、もう少ししてから、おばあがやっぱり考えてコーラ出してって言うので、母が何でって聞いたそうです。「私もね、こっちも何人かの兄弟が戦争に行ってるから、この人たちにもお母さんがいる、そのお母さんは彼た

ちの心配してるんだろう、だからコーラ出して」と。

その話聞いてやっぱりキーブルダッチャー。だから、そういうレベルから運動が始まるんじゃないかなと思う。運動とか、理論はとっても大事だと思うんですけど、理論の前にやっぱり気持ちが大切じゃないかなと思うんです。だから、そういう気持ち、仲間のために何でもやるという気持ち、暴動でも起こすっていう気持ち、とても大事だと思います。

友常) 上原さんのBlack lives matter との関係で言うと、警官のことで、今年の1月の高校生の暴行事件あって、沖縄署に高校生たちがたくさん集まって大きな反乱、直接行動をしたということがありました。例えばそれは、警察が変容してるというふうに理解すればいいのか、それも含めて多分復帰50年の沖縄的状况といえるのかどうか、そのあたりはどうでしょう。上原さんが前にそういう話を指摘してたのを思い出したんですけど、今さん、どう思いますか。

今) 僕も警察好きじゃないからね。警察が権力化したら、とってもやばい社会になるってはっきりしてるんで、それに対する反感もあるし。だから、こないだの高校生が殴られて、すぐちょうどコザ署前に集まり抗議をしたっていう、あれはネット社会だからああいうことがあるるのであって。

コザ暴動っていうのは、あの時代に同じような空気を吸ってた人たちがあの空間にいたということで、あれだけの自然発生性と同時に意識性を持っていて行動になったと思うんです。復帰50年に向かって、だんだん警察権力が強くなって権力が上からの押しつけみたいなことでやってきてるのが、ここしばらくの政治でしょう。それは安倍が政治を私物化してきたっていう最たる表現で。トップが私物化したら、そのトップのもとで仕事やってる連中は何やってもいいんだって環境がだんだん生まれてきて。

復帰50年目のことならば、沖縄は意識としての非日本人というようなものを鮮明にする必要があるだろうし、日本に対して優しくなる必要は全くない。全然優しくないってことは、実はコザ暴動のときに沖縄の人たちが表明してるわけだから。その25年後には少女暴行事件で、あれだけの人を集めてきてるわけだから、沖縄戦が終わって25年後にコザ暴動が起きて、コザ暴動から25年後に8万人の県民大会をやってるわけです。25年周期っていうのは、人間の意識が薄れるときに、薄れないためにやっぱり歴史をちゃんと振り返ることであって、この復帰50年で安倍の国葬をやろうなんてことを決めたということ、逆に言ったら、沖縄の戦後史をもう一度検証しなきゃということ、あえて仕掛けてくれたということを考えれば、まあいいことなのかって一瞬思ったりもすることもある。

友常) ウェスリーさんはどうですか。

上運天) 警察が変わったかということですね。一応、アメリカもポリスステーツだと私は

思ってますけど、変わらないんですよ。変わらないから、その問題が発生する。だから、変わるのは人の意識だったんですね、私たちの意識、それが変わるんです。そして、権力側が一番恐れてるのは、一般の人が立ち上がること。そして、またもう一つ恐れてるのは、立ち上がる人がほかの立ち上がる人と一緒にすることも怖がっていると思う。

なぜ、私がそう思うかというと、コザ暴動の研究したとき、アメリカのメジャーの新聞の表面っていうんですか、フロントページ見てたら、12月21日のフロントページにコザ暴動の写真があったんです。それが記事がすぐに消えてしまった。それはとても恐れてるから、その人が立ち上がると一番怖い。人の意識が変わると一番怖い。それから、もちろんブラックパンサーズもちょっとマッチョな人たちが多かった。銃も持ってて、ブラックパンサーズがやられたのは、それだと思うんですけど、やっぱり立ち上がって一般の人、市民が立ち上がって強くなった、意識変わったから、やられたとも思うんです。

友常) 歴史の逆なでが行われたので、私たちの意識の逆なでと、沖縄の人を逆なでる、意識を逆なでにするような。だから、歴史を振り返るということは、ラディカルになることだと、私は思うんですね。ありがとうございます。最後に何か一言ずつ簡単に今日の振り返っていただければと思います。まず今さんから一言いただければ。

今) 今日はつたない話聞いていただいてありがとうございます。今、実は今年で76になる後期高齢者の年齢に入っていていますんで、周りがいろいろ、僕が沖縄に来てかかわって一緒に運動をやった人たちが、1人去り、2人去りって、私の10年ぐらい先輩の人たちが亡くなっていてるんで、コザ暴動を含めれば、戦後の沖縄というか、戦後史が沖縄を研究していくときに、琉球史も含めてそうなんだけど、戦後史がとても大事だと思うんで、戦後史を研究する若い研究者が、今、上原こずえさんとかいろんな人たちが出てきて、僕はとてもうれしく思ってます。とっても研究が進んでいてくれることを、僕は期待しております。

友常) ありがとうございます。それでは、ウェスリー。

上運天) とても名誉でした。一緒に同じ教壇にいるということが、とても名誉で、また、皆さんと一緒にいるということも名誉です。実はこの2週間、私の友人であるスコットさんと沖縄を回って、いろんな人と会いました。コロナのときはあんまり出らなかった。私は2年前に沖縄に来たんです。あんまり出られない、人と話できなかった。でも、スコットさんが来て、レンタカーでいろんなウチナーンチュと話して回ったんですけど、また、今日こういうイベントがあって、言葉で表せないぐらいにすごく感動しています。何というか、あきらめてないってことが、たまにアメリカにいる三世で、アメリカもシャーヘーベーターから、もうあきらめたいときあるんですね。権力側が強くて、一般の人たちの生活がだんだんだめになってる。沖縄もそうだと思う。この2年間で沖縄に来て、すごい痛い、見る

のが。本部に住んでいて、その海岸沿いの道を走ると、その山を削って大浦湾に持っていかうというの見て、もうとても悲しいです。

でも、やっぱりこういう話を聞いて、英語でいうジェネオロジーとかリニエージ、系譜とかリニエージ、沖縄の人は先祖の系譜あるでしょ、長男の長男という。それは常套だけど。もう一つの系譜もある。それは抵抗とか、こういう沈黙から抵抗するリニエージであって、それに今日気づいたんですね。こういうつながりがあるということが、また分かったんです。だから、とても感動しています。それだけです。

戦争と米軍占領、そして今

若林 千代
(2022年7月24日)

皆さん、こんにちは。若林千代と申します。

今日お話するために東京外国語大学国際日本研究センターからいただいた、「戦争と米軍占領、そして今」というテーマはあまりにも大きくて、しかも呼びかけ文には「復帰50年という問い」「路上と境界」「生存思想」など、いろんな重量のある言葉が示しており、個人的には多少戸惑っています。

ただ、新型コロナウイルスの感染拡大という状況になった2020年から現在まで、沖縄のことを真剣に討論する機会が全体としてとても減っていると感じてきました。また、私個人としても、沖縄のなかでそういう場面をつくり切れていませんので、活動の半径がすごく狭くなってしまっています。オンラインで外の世界とつながっているかもしれないのですが、それでも、真剣に討論するのはなかなか難しいということがありました。

今日は、もしかしたら少々散らかった感じの話になってしまうかもしれませんが、討論できる機会があるのであれば、そこに出ていかなければ、これ以上は立ち行かないのではないかという危機感があって、珍しく人前に出ることにしました。

「七島灘」

私自身の自己紹介を簡単にすると、私は沖縄の生まれではなくて、広島県の生まれです。私が東京で通っていた大学が沖縄大学との派遣学生の制度を持っていて、1988年に沖縄大学にまいりました。その一年が沖縄で暮らした最初の経験です。その後、東京を主な拠点としながら行ったり来たりしていたのですが、2008年から沖縄大学で教員として働いています。

1988年というと、ちょうど「復帰」から15年目ぐらいです。当時、沖縄の大学には地元出身の学生が大半で、沖縄大学でも「本土」出身の学生と海外留学生は数えられるほどしかいませんでした。今も沖縄大学では県外の学生は1割もいないと思いますが、当時、大学の建物も1号館が新しくできたばかりで、あとはアメリカ時代に建てられた校舎が2つ、それからプレハブという感じでした。とても小さな大学でしたが、私にとってはとても大きな経験でした。卒業生ではないから同窓会には入れないけれど、母校よりも母校というぐらいにとっても愛着を持っています。

「復帰」から15年ぐらいというと、どのような感じだったかということ、皆さんがご存じのところであれば、海邦国体があったのが87年です。87年には、国体のソフトボール競技の会場で「日の丸」を焼く事件があったり、国が軍用地を強制収用する際の県の土地収用委員会が開かれたりしていました。本来、土地収用委員会は、軍に土地を取られていても軍用地契約をしてない、あるいは契約を拒否しているという方たちが自分たちの土地を返してほしいと訴える場ですね。本来、土地を持っている人が自分の権利を主張する場なのですが、87年には、そこに機動隊が導入されるということが起きました。

沖縄は「日本になった」後、そうしたさまざまな出来事に象徴されるように、いったいぜんたい「復帰」とは何なのか、日本とは何なのか、国家とは何なのかと、さまざまなところで問題が顕在化していて、いろんな議論がありました。88年に初めて沖縄に来たとき、あちこちでそうしたことに遭遇しました。当然、私は「ヤマト」から来たということで、日々の出来事から考えさせられることが多々ありました。また、そういう場でいろんな方から教わりながら自己形成し始めるというか、意識的に自己形成し始めるというのがそのときの私だったと思います。

沖縄への旅は、あの頃はまだ飛行機代が本当に高く、実は船で来ました。船で来ると、二泊三日丸々かかりました。当時、航空便は今のように安売りもありませんし、私は飛行機のチケットを買うお金がなくて、沖大生の特別割引チケットを送ってもらい、船底の二等船室に乗って二泊三日かけて来たんですね。そうすると、晴海埠頭を出た船は順調に太平洋岸を進んでくるのだけでも、九州から奄美にまたがるトカラ列島のところでものすごい荒波になるんです。台風とかではなくても、太平洋と東シナ海が混ざり合う地点なので、普段でも荒々しい海です。とにかく、そこを渡るのがとてもつらくて、ものすごい船酔いになりました。気持ち悪いから寝ていられなくて、船のなかをウロウロしていたら、船員さんたちに叱られました。「船室に帰りなさい、危ないから」と。部屋で寝ていられない、こんな気持ち悪いのにと考えていたら、船員さんたちは、この海はとても高い波になっていて、その上に船が乗っかってしまうと転覆するんだと言われたんですね。「一発波」とか「三角波」とかと呼ばれているそうです。シケで危ないし、僕たちが頑張るから早く船室に帰れと叱られたんですね。しかし、その荒波の後、船が太平洋から東シナ海に入ると、海がサーっと静かになって、船がスーッと真っすぐ進むように変わるんです。

後になって、伊波普猷の文章を読む機会があったときに、「七島灘」という言葉があるというくだりに出会いました。これは、日本と琉球・沖縄との間にある難しい何かを表している。伊波は言語学者ですから、「言葉の七島灘」と書いていたと思います。「七島灘を渡る」という感覚を伊波普猷が書いてるのを読んだときに、私はハッとして、船での体験の意味を知りました。険しい波を越えるということが、私にとっては、今でも体感として残っています。今は、飛行機で東京とかに行きますから、実際には「七島灘」を通ってはいないし、確かに沖縄とヤマトは近くなったと思います。東京まで三時間もかからない。それでも、やはり、「七島灘」をどう越えるのかということはずっと心のどこかにあると思っています。

最近、歴史の「七島灘」の波はさらに荒くなっている、なかなか渡るの難しいと感じることも増えています。ですから、今日は、私の話が云々というよりも、もっといろいろな方と活発に意見交換をしていけたらいいのではと希望しています。誰か一人が何もかもを背負っているような気になって、何かわかったような、カッコイイこと言うというような時代ではないですし、ああでもない、こうでもない、いろいろなところで言い合っていないと、やはり戦争の危機の広がる時代の波を回避することもできないだろうと思っています。コレクティブな知というか、一人一人は自立した上で、もっと世界をよくするために互いに真剣にかかわり合う、そういう関係を作りださなければいけないのではないかと思います。コロナ禍で本当に社会も言論もめり込んでいる感じだと思うんですね。だから、何かしら考えている人たちが互いに重ね合うようにして話し合っていくことが必要だと思って、今日ここに来ています。

土地規制法―「復帰50年」の沖縄―

「復帰50年」が半年過ぎましたが、本当に、日々、正直つらいです。つらい日々というか、年明けもそうでしたし、遡って去年、その前からもうずっとそうですが、今年に入ってつらさがさらに増しています。さすがに何か鬱っぽい。とくに今年は、年明けから「慰霊の日」に至るまで、何か鬱っぽく辛い日々です。年齢もあるのかもしれないけれども、それだけではありません。

一つには土地規制法の成立ということがあります。土地規制法は、2021年から2022年にかけて成立しました。沖縄は「復帰」から50年目ということで、ウクライナとロシアの戦争とのかかわりもあってなのか、いろいろと沖縄のことがらメディアに取り上げられたり、あるいは語られたりすることが多かったのですが、コロナ禍の2年間のなかでも、とくに2021年の夏から、つまりウクライナ危機よりも前に、既になんてしんどい状況がさまざまに蔓延してきてるわけですね。その一つが土地規制法の成立です。

今、皆さんに見ていただいているのが6月16日、つまり、「慰霊の日」の1週間ぐらい前の『沖縄タイムス』の記事です。土地規制法というのは、国が安全保障上重要だと思われる施設の周囲1キロの土地の所有状況について、国が必要に応じて調査したり、所有者個人の状況も含めて行政に提供させたりできる、そういう法律なんですね。これは、法律としては全国一律が対象となりますから、一見、法としては「平等」に見えてしまいます。しかし、国が安全保障上重要だと見なす代表的な施設というのは自衛隊と米軍の軍事基地、それから原発施設ですから、基地と原発の集中する場所が主に規制の対象になるのです。

近年、沖縄の場合、沖縄島と伊江島のような周辺離島にある米軍基地や自衛隊基地に加えて、政府が使っている言葉では「国境離島」とされている八重山諸島や宮古諸島、いわゆる先島諸島で自衛隊基地が拡張されたり、新たに作られたりしています。そういった場所では、その島全体が指定対象になる可能性が高い。沖縄島であれば、中部や北部の米軍基地が集中している場所、さらには中部や南部には自衛隊基地の周辺ですね。いずれにせよ、か

なりの場所が規制の対象になっていくのではないかとということで、懸念が深まっています。

これは同時期の『琉球新報』の記事ですが、土地規制法では、「注視地区」「特別注視地区」というかたちで指定された場合には、そこに住んでる人たちだけでなく、そこに土地を持ってる人たちについても、指定対象となるだろうと言われています。

これは同日の『沖縄タイムス』の社説ですが、ここでは、人権侵害、心理的自由の制限が懸念されています。この法律が成立したのは2021年で、施行されるのは2022年9月です。ですから、9月以降の土地規制法施行で、いったいどういうことが起こっていくのかに関して、今後注視していかなければなりません。土地を取られてきた人たちからすれば、土地を取られているだけではなくて、ある種の治安対象という扱いをされてしまう可能性があるということですね。

私は今日、皆さんにこれを一番紹介したいと思っているのですが、これは2021年6月16日の『琉球新報』に新垣若菜さんという記者の方が書いている記事です。間違いなく「復帰」後生まれの記者の方だと思いますが、新垣記者は、土地規制法をめぐって、沖縄の反戦地主会の会長である照屋秀伝さんにインタビューしています。

照屋秀伝さんは、現在は嘉手納基地になっているところにもととの家屋敷があったそうなんです。記事では、その土地は、実は照屋さんの祖父がハワイに出稼ぎに行き手に入れた土地だということが書いてあります。「父から譲り受けた土地」と書いてあるのですが、沖縄には移民や出稼ぎの経験がある方、そうした家族が多く、照屋さんもやはりそういうご家庭だった。ですから、単に「譲り受けた土地」というだけではなくて、沖縄の人たちが汗水垂らして働いて、労働してお金を貯めて手に入れた土地だったということです。

土地というのは単なる物質ではありません。そういったことがこの記事でもわかります。その土地が戦後に嘉手納基地に取りられて以来、照屋さんはずっと米軍との契約も拒否して、さらに日本政府との契約も拒否して、契約拒否地主として生きてきた。それは同時に、「戦争のために自分の土地を使わせない」という気概であり、これこそが沖縄戦後史の中心にあるものだと思います。歴史に対して真っすぐに生きていこうと考えてこられたと思うんですね。

この方たちは自分の土地に住むことができません。けれども、基地のなかにある土地を所有しているので土地規制法の対象になってしまう。地主に対しては、ただでさえ駐留軍用地特措法で何十年も土地の強制使用を強いているわけです。そして、その土地を返さないということだけでなく、その土地を持っている人たちに対しても土地規制法にまつわる問題をかぶせていくという状態になるわけなんです。これは本当に、「復帰50年」に日本政府がもたらしたものとして、とくに最悪のものの一つだと思っています。

照屋秀伝さんのインタビューは、いろんな方に読んでいただきたいと思います。「復帰50年」のもたらしたものととはこういうことなのだ、と言わざるを得ない。この仕打ちが「復帰50年」だと思います。自分たちの生活を犠牲にしながらも、契約しないで闘ってこられた方たちがこうした仕打ちを受けている。また、契約した方たちにしても、とても苦しい思い

をされながら契約したと思うんですね。心の底に沈んでいる澱のような思いがあると思います。そして今、契約したか、しなかったかに関係なく、この法律は降りかかってきますので、これをどう考えるのかというのは、「復帰50年」とその先にかかわる大きな課題です。

デモクラシーというものが、安全保障上必要だからといってここまで切り刻まれるところまで一旦来てしまうと、問題は他のさまざまなところに対しても別なカタチで及んでいくと思います。デモクラシーを内側から食い破るようなことがあちこちで起きているのではないかと。民主主義を掲げる国家が実際こんなことをやっている。私自身は、こうした状況に対して、いろいろな人たちと一緒に力を合わせて何か変えていけたらという気持ちでいます。

「セキュリティ」のフレーム

アフガニスタンからの米軍撤退があった2021年、編集委員として参加している『けーし風』という地域の雑誌で、「9・11事件から20年 われわれは今、どこにいるのか」(112号)という特集をしました。これはアフガニスタンの特集というわけではなくて、2001年の9・11事件後の「対テロ戦争」と、それ以降に何がどう変わったのかということを考えてみようという目的でした。そして、そのなかで、9・11事件の直後に岡本恵徳先生や新崎盛暉先生、屋嘉比収さんが書かれた文章を再録しました。加えて、琉球大学の新城郁夫さん、編集委員の鳥山淳さん、親川裕子さんといった雑誌の編集委員や執筆者と一緒に、三者の文章を再読して座談会をしました。そこでは、それぞれに、「対テロ戦争」以降の「セキュリティ」の強調と変容について指摘しています。つまり、あの事件を契機に、沖縄では米軍との関係性や治安への認識がどのように変わっていったのかという共通した関心です。

実際、岡本先生、新崎先生、そして屋嘉比さんが事件直後に発表した文章には、当時、既に、共通してこんなことが書かれています。「対テロ戦争」はアメリカが主導権をもってやっているように見えるけれども、ロシアや中国、日本、欧米諸国、あるいは、いろんな国家は、アメリカの行動に対して何も文句を言わなかった。それどころか、むしろ賛成したり協力したりした。9・11事件は、「対テロ」というフレームを生んだが、いずれ、それぞれの国家はそのフレームを利用していくのではないかと。

そして今、米軍とNATO軍のアフガニスタン撤退からロシアのウクライナ侵攻の過程を考えると、ある意味では、9・11事件以後の「対テロ戦争」の時代にできた、言わば「反テロ同盟」の分裂局面が表に出てきているプロセスにも見えてくる。それをもう少し、この20年ぐらいのスパンで沖縄で起きてきたことに関連させて考えてみたらどうかと思いました。この座談会がうまくできたかどうかは別として、「対テロ」「セキュリティ」のフレームの強調とその後、という特集を組んでみたわけですね。ここが、土地規制法を始めとする安保法制と沖縄の関係の大問題とその文脈だと思っています。

自衛隊の「南西シフト」

さて、2021年暮れ、12月24日付の『沖縄タイムス』の記事。これが今の沖縄における、「ああ、しんどい」という嘆息の直接的な問題です。これは元々は共同通信が抜いたニュースだそうですが、地元二紙がこれを載せています。その内容は、日米共同作戦計画が、「台湾有事」を前提として自衛隊と米軍によって策定されているというものです。

それまでの経過から考えてみると、2007年、あるいは、2009年、与那国島や石垣島にアメリカ海軍の艦船が寄港しました、当時、石垣島にアメリカ領事乗り込んでいき、地元住民の反対を押し切るかたちで入港、そして強行に上陸しました。アメリカ領事までもが乗り込んできて、反対する住民に暴言を吐いたりしました。その後から尖閣の問題がくっきりと表面に出てきました。そして、そこからさらに十数年を経て、米軍と自衛隊は自衛隊基地を建設、プレゼンスを強化しています。同時に、この記事には「沖縄南西諸島全体を攻撃拠点に」と書いてあります。つまり、地域そのものが戦場化する可能性があるということです。そして、「台湾有事」を掲げてそうした計画が策定がされたということが、2021年暮れに報じられたというわけです。

こちらは『琉球新報』の記事で、さきほどの『沖縄タイムス』と同じ内容です。もちろん、地元紙も独自の記事もつけています。結局、こうした計画は、住民を巻き添えにしていく可能性もあるだろうし、あるいは、住民がいてもいなくても関係ないということかもしれないのです。

昨日、ウェスリー上運天さんのお話のなかに「自己決定」という言葉が出てきました。これは、人びとのあり方、命にかかわるということを含んでいると思います。琉球諸島に住んでいる住民の主体ということに注目して考えると、これらの記事のように、今、日米両政府がやろうとしていることは、今日の主催の方々为主题にしている「生存権」、つまり、根本的な生存にかかわることがらを脅かしているということです。

九州から与那国に至るこれらの島々の危機の状況について、これだけ自衛隊の配備が進んだのは2000年代からですが、そして、今は、いよいよそれらを米軍と自衛隊の共同作戦というかたちで使用しようという段階です。ただし、実際に戦闘状況が生まれれば、米軍はここに残るというよりも、ここでは日本が戦う、つまり自衛隊がやるということを前提としていると言われています。この点については、『けーし風』114号で、沖縄選出の参議院議員・伊波洋一さんにインタビューしています。伊波議員は、先島の状況を地域の住民の方々への調査から、この問題を国会でも追及されています。

こうした危機について、どのように説明したら日本の「本土」「ヤマト」に暮らす人たちに伝わるのか、それは簡単ではないのですが、沖縄にいて、「戦場化するかもしれない」ということに対する恐怖心のようなことは、人びとのあいだで年明けからとても強くなっていると感じます。ですから、私自身にしても、「本土」のメディアの方たちから、単純に「復帰50年をどう思いますか？」云々と問われても、なかなかストレートに反応できなかった。それにはこういった文脈がありました。

「グレーゾーン」

そうしたところに、2月、ロシアのウクライナへの軍事侵攻が始まります。ですから、沖縄でウクライナについて強い反応があるとしたら、それは、戦場の人びとを見て、「かわいそう」「沖縄戦のよう」とかという表現ももちろんあるけれども、その中身はもう少し深刻ですね。さきほどお話した土地規制法の問題や日米共同作戦計画の問題という脈絡があるわけですから。

ロシアのウクライナ侵攻が始まると、すぐに日本のテレビの報道は、「台湾有事だ」「日本有事だ」ということを強調して、奇妙な特集も組んでいるテレビ番組もありました。そうした番組が「煽り」のようなものとわかっていても、物言いは恐ろしい。論調にしても、「だからこそもっと配備をちゃんと考えなければ」というふうに、防衛や軍事の部分だけが切り取られてクローズアップして伝えられるという偏りがあります。

もちろん、「果たして軍事だけで国際関係を考えていいのか、外交を考えるべきだ」という常識的なコメントもあります。けれども、あっという間に圧倒的な勢いで軍事面に焦点が傾いていき、「煽り」を「報道」と呼ぶような日本のマスメディアの状況であるならば、もしも何かきっかけさえあれば、マスメディアはあっという間に日本の国民全体を煽り立てて、沖縄を戦場化するぐらい何ともない、そうしたことが起きてもおかしくないんだな、というのが、ウクライナ侵攻後の日本の報道に対する、私自身の強い感想ですね。

ウクライナからの報道を見ると、昨日まで平穏だったけれど、今日からはもう違う状況に突き落とされ、人びとが戦争が始まった衝撃に動揺している様子が映されていました。そのなかで、何人もの人たちが、「どうしたらいいんだろう」と、半ば笑みで話している場面がテレビニュースに何度も出てくる。つまり、人間が突然こういう目に遭ったときの様子だと思うのですが、そういう半ば笑みで話すという様子が非常につらかったです。

キエフあるいはキーウの郊外の町がロシア軍に攻撃されて、住民が難民になってしまった2022年3月初め頃、私は雑誌『現代思想』からロシアのウクライナ侵攻を受けての特集への原稿依頼を受けました。とても書く自信がなくて、はじめは断ろうと思ったのですが、結局、「グレーゾーンの彼方」というタイトルで短いものを書きました。編集部の方から日本の現在とつないで考えてみてほしいということを主題としていただいたのですが、どんなふうに行けばいいのか、本当に難しかった。

「グレーゾーン」という言葉は、実はこの日米共同作戦計画の細かいところに出てくるんですね。「平時」と「有事」の中間の状態、つまり、武力攻撃は受けていないけれども、まったくの「平時」というわけでもないという意味です。医療とか、いろいろな場所で使われるけれども、軍事用語でもあるんですね。琉球諸島という、人びとが日々の暮らしを営んでいる場所が軍事用語で形容されてしまうということは、強烈な、表現しづらい怒りをおぼえます。

ウクライナ侵攻後、私は、ウクライナの作家アンドレイ・クルコフという人が書いた『灰色のミツバチ』という小説を読みました。日本語がまだなくて、英語版を取り寄せて読んでみました。きっかけは、朝日新聞に彼の文章が掲載されているのを読んだことです。彼は

レニングラード生まれで、幼いときに両親に連れられてキーウに来て成長したというロシア語話者のウクライナの人で、そうした彼から見える世界について関心をもちました。

『灰色のミツバチ』のなかで、主人公はロシアとの国境地帯に暮らす養蜂家なのですが、そういう場所に暮らす自分たちについてこんな風に言っているんですね。自分たちは二つの力に挟まれた場所にいるので「グレーゾーン」と呼ばれるが、「グレーゾーン」自身は攻撃しない、だから「グレーゾーン」なのだと。

『現代思想』に掲載された文章なかでは、ウクライナの作家が書いてる文章を引用したんですけど、そんなふうに軍事用語で名付けられるとはどういうことなのか。東京から流されるテレビの「復帰50年」のニュースとかでは、「本土」と「南西諸島」という、そもそもが軍事的な地理用語である言葉をたくさん使うようになっていきます。そういう表象と現実の軍事主義の問題について、もっと多くの人たちに一緒に考えてもらいたいという気持ちを強くもっています。

「世間の既成概念達」

そして、「復帰50年」の5月の頃、『現代思想』の原稿を書いたあと、とうとう本当に何もできなくなってしまった。そのときに心の支えになっていたのは、山之口獏の「会話」という詩です。

これは1938年の詩ですが、実はこの頃の獏は、なかなか自分では「沖縄」とか「琉球」とかという言葉は使わない。使えない。そのため、この詩に関してはいろんな批評や解釈があると思います。ただ、私個人としては、このとき、ひとりの読者として、「世間の既成概念達が寄留するあの僕の国か」という部分、あるいは、「世間の偏見達が眺めるあの僕の国か」という言葉が、私はウチナーンチュであるわけではないんだけど、それでも、「琉球」とか「沖縄」とかを語るとき、ヤマトとのあいだに横たわる、何とも言えない海溝のようなものを感じてきたので、「世間の既成概念達」という獏の言葉、獏の詩が、まさかここまで自分のなかに直に入ってくるのかということを経験しました。30年ちょっとの沖縄とのかかわり合いではありますが、こんなふうに獏の詩に頼っている自分自身ということが、個人的にはとても驚きでした。実は、そんなに獏の詩を真剣に読んでこなかったのかもしれないなとも思ったし、同時に、こんなにも状況はずっと変わっていないんだということが、本当にきつと思いました。こういうつらさを読むということがあり、獏のこの詩は、沖縄にとって、本当に大切な詩なんだということがよくわかりました。

しかし、それでも鬱っばい状態は続いていきました。そうしたときに、山城知佳子さんの『肉屋の女』という作品が東京都現代美術館にかかっているということを知りました。現代美術のなかの沖縄の表象、あるいは、そこでの歴史や戦争ということも、私自身にとって重大な関心でもあり、会期が終わりそうなところだったのですが、藁にもすがる思いで大急ぎで行ってみました。

『肉屋の女』は山城知佳子さんの2012年の作品で、もちろん、前にも観せていただいたこ

とがあったのですが、今回は、「復帰50年」のなかで、「世間の既成概念達」が、それぞれ、軍事的なものにさえなって押し寄せているというときに、しっかりと観ることができたことは、奇跡的なことでした。

『肉屋の女』に描かれた、行き場のない濃い深緑と、生命力溢れる朱赤のコントラストが横溢する画像は圧倒的でした。大きな三面のスクリーンから押し寄せてくるイメージが、今のしんどい沖縄の現実を自分なりに解釈していく一つの大きな助けになりました。知佳子さんが一所懸命に作ってくれた作品によって、惑い続けている自分が支えられるという経験をしました。

「紙の上」

それでも、沖縄に戻った途端、こんなことがありました。6月半ば頃、外来機、つまり、沖縄の基地の所属ではない米軍機が大挙して、67機やってきた。ものすごい爆音を響かせて。米軍機だけでなく、国連朝鮮軍の飛行機、カナダなどの飛行機も来ています。67機というのは、本当にものすごい状態で、しかも、「慰霊の日」の直前のことなのです。「またか」というだけでなく、「さらに」というか、つまり、沖縄に対しては「ここまでやっていいんだ」と言わんばかりに押し寄せていると感じるんですね。でも、それはもちろん、国連朝鮮軍、つまりは米軍もひどいんだけれども、こうしたやり方を許しているのは日本政府なんですね。

そのときもひどく神経が逆立ってしまって、なので、詩を読んで考える日々でした。

それは、やはり獺の詩なんですけれど、「紙の上」という、とても有名な詩があります。この詩のなかでは「日の丸」を付けた飛行機が飛んでいて、1938年頃、つまり、日中戦争が始まった直後の日本の姿が映し出されている詩です。

戦争が起きあがると
飛び立つ鳥のやうに
日の丸の翅をおしひろげそこからみんな飛び立つた
一匹の詩人が紙の上におて
群れ飛ぶ日の丸を見あげては
だだ
だだ と叫んでゐる

獺は、この詩を書いた頃は東京にいたわけですし、今、何か、こうした米軍機や国連朝鮮軍の軍用機を見ているわけではないのですが、しかし、私には、実際にこうして「慰霊の日」を目前にして見ている軍用機には何か「日の丸」の印が付いているように見えてしまった。

「だだ」というのはダダイズムの「だだ」なんだけれども、同時に、沖縄のおじさんたちが「だーだー」と言いますよね、その「だーだー」に「だだ」をかけているのかなとも感じます。

だだ
だだ と叫んでゐるが
いつになったら「戦争」が言へるのか
不便な肉體
どもる思想
まるで沙漠にゐるやうだ
インクに渴いたのどをかきむしり熱砂のうえにすねかへる
その一匹の大きな舌足らず
だだ
だだ と叫んでは
飛び立つ兵器の群をうちながめ
群れ飛ぶ日の丸をあげては
だだ
だだ と叫んでゐる

『「戦争」が言えるのか』という部分は、「不便な肉體」「どもる思想」というところにかかってくると思うんだけど、それはどういうことかという、「さしすせそ」という発音ができないから、「戦争」、「せんそう」と言えと言われても言えない、と獺は言うわけです。

だから、獺は「日の丸」を見て「だだ」と言っている。けれども、この詩は、それだけではなくて、「だだ」と言っている自分自身をも見ている。沖縄の批評精神というものがこういったところにあらわれていると思うんですね。それについて何も言えない。それで「だだ」としか言えない。あるいは、「舌足らず」のようにしかものが言えない。しかし、黙っていたり、口ごもっていたとしても、決して沖縄の人が何も考えてないということは絶対にあり得ない。昨日もウェスリー上運天さんが言っていたことですね。つまり、「のどをかきむしっている」。この詩人、山之口獺という人はそういう描き方をするわけです。決して黙ってるわけではない。

これは、やはり、沖縄の抵抗の詩だと思います。だから、授業もできなくなるぐらいに起き上がれないということがあったとしても、何とかしなければと、詩を読みながら思わされた、という感じです。

ウクライナ

6月23日がやって来る頃、『沖縄タイムス』紙の「タイムス歌壇」に、あさと愛子さんという方の短歌が載っていました。あさとさんは琉歌で多くの文学賞を受賞されてきた方ですが、こんな短歌です。

沖縄戦の 甦るなり ウクライナ
雪降る国で 身をさらす民よ

とてもストレートで力強い短歌ですね。この、「甦る」という言葉と「身をさらす」という言葉が円環を描いているようなイメージを与えます。

これを読んだとき、今の沖縄で、やはり本当にみんながある種の怖さを感じながら、どんなふうに自分を保てばいいのか、そういう気持ちで生きている人が多いんだなという感覚をもちました。ロシアのウクライナ軍事侵攻、土地規制法、あるいは、日米共同作戦計画だとか、そういうものが積み重なったところで「復帰」50年めの「慰霊の日」を迎えるわけですね。そのなかで、この「甦る」という言葉と「身をさらす」という言葉とがクルクルと円環を描くような短歌を読んだとき、何か口には出せないんだけど、意識的であれ無意識的であれ、沖縄の人たちの歴史的現在のなかに潜んでいる感覚を感じることがありました。

もう一つは、6月22日の『沖縄タイムス』の記事で、今年91歳になられた東江平之先生の戦争体験とウクライナに対するお考えを話されているインタビューです。近代の沖縄では、戦前、人とお金が行ったり来たりする環流型の移民が多く、送金によって成り立つ家族が多かったのですが、東江先生のお父さんもやはりアメリカ西海岸のイチゴ農園で働いていました。家族が二つの国、三つの国ぐらいに分かれて、いわば「トランスナショナル・ファミリー」を形成しているということが多かったと思うんですね。さきほどご紹介した照屋秀伝さんのご家族もそうだと思うんですが、そういう国境を越えて家族形成するなかで沖縄戦が始まってしまった。

そのとき、二人いる東江先生のお兄さんのうち、お一人は、ルーズベルト政権が強制した日系人に対する忠誠登録で「イエス」と言ってアメリカ軍に入りました。もう一人のお兄さんは「ノーノーボーイ」、つまり、忠誠登録に「ノー」と言って、管理の厳しい収容所に入れられてしまう。米軍に入ったお兄さんは沖縄戦に志願して参加して、戦場で家族を見つけるんですね。そこで弟と再会する。けれども、当時、東江先生ご自身は14歳で護郷隊に入っていたんですね。つまり、日本陸軍中野学校のメンバーが率いていたと言われる秘密部隊に少年兵として参加させられていた状態だったということです。そうして、「敵同士」になった兄と戦場で再会することになってしまった。

そういった東江先生のご経験からは、ウクライナやロシアの状況というのは、何かまた違う見方で見えているんですね。いわゆる日本の報道に出てくるような、単純な「敵」「味方」という見方ではなくて、あるいは、わかりやすい「ファシズム対デモクラシー」の構図とかではない。あるいは、先ほども指摘した「反テロ同盟」の分裂とかということでもない。そうではなくて、非常に複雑な、国境を挟んだ複雑な家族の物語の視点から、戦禍に巻き込まれた民衆への共感がある。そうしたことを踏まえた東江先生のウクライナ侵攻に対する見方というのは、とても印象に残りました。日本のほかの地域だと、なかなかないと思うんですね

「死語、祖国」

沖縄の「復帰50年」はどうだったかということについて、雑誌『現代短歌』の「沖縄復帰50年」という特集を紹介したいと思います。「復帰」前後からのすばらしい短歌がたくさん出ています。

短歌というのは日本の形式で五七五七七ですが、沖縄の伝統的な詩の形式である琉歌は八八八六です。五七五七七は元々、沖縄のリズムではありません。そうした違いを前提として、しかし、そうした沖縄で短歌で何か表現しようとするれば、言葉も形式も日本語であるにもかかわらず、表現は沖縄でしか出てこないだろうというものがたくさんあります。それは言語学的な意味というよりも、文学的な意味です。そういったものがたくさん、この『現代短歌』の特集に載っています。いい特集だなと思った短歌のなかには、「慰霊の日」前後を詠んだ新城貞夫さんのものなどもあります。

有名ですね、これは。

につぼんを逆さに吊るす忌の景色青年は樹のごとく裸なる

非常に絵画的ですね。あとは比嘉美智子さんのものもあります。

月桃のしろき花びら口にふくみ感傷ありて君に逆らふ

とてもすばらしい歌がたくさん出ていたんですけれど、すると、そのなかに「『祖国』をめぐって」という仲程昌徳先生の文章が載っていました。

短いエッセイなんですけど、衝撃的で、沈み込んでいた自分に何か喝を入れられるものでした。ここで資料として配ればよかったのかもしれないけれど、そうすると『現代短歌』が売れないからやめました(笑)。

この仲程昌徳先生の文章は、寺山修司の「マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」、つまり、ちょうど60年安保の直前ぐらいのとても有名な短歌で始まります。「身捨つるほどの祖国はありや」、つまり、自分を捨ててまで何か守る国というのあるかと。これは「ある」と寺山が言いたいのか、あるいは、「ない」と言いたいのか、そうしたことが論争になるような、60年安保闘争の直前の非常に切迫した「祖国」への思いがあって、話題になった作品ですね。仲程先生は、沖縄にもそういう意味合いの葛藤の短歌がいっぱいあって、紹介しています。

しかし、この仲程先生の文章は、最後につぎのような歌を紹介して終わっています。豊島英子さんの1995年の歌です。

死語「祖国」はた詩語「大和」いくたびとなく聞く日ぐれなかなか暮れぬ

衝撃的な短歌です。1995年に、既に「祖国」は「死語」である。「復帰50年」で何が変わったのか、という前に、つまりはこのとき、既に「祖国」は死語となりつつあったのだ、と。これは「復帰50年」の事実なんだと、先生は淡々と書かれているんですね。同時に、「祖国」は「死語」なんだけれども、かたや「詩語」としての「大和」。ここに葛藤があるわけなんですね。

この短歌が1995年のものだということは、とても重たいものなんですね。では、今は何なのか、ということを考えざるをえない。「沖縄よ、どこへ行く」という獺の言葉が、昨日の今さんとウェスリーさんのお話のなかにも出てきていたんですけれど、それは沖縄の人たちが自分たちの自己決定を考えればいい、自己決定とか、それは大切だということになっていると思うんですね。そして、そうだとすると、たとえ「祖国」は「死語」になっても、「日ぐれなかなか暮れぬ」というところが重たいですね。皆さんがどう読まれるかわからないんですけども。

時代のなかで試される反戦平和の思想

以上、前半は「復帰50年」のここ数カ月間をダイジェストでお話したという感じです。

しかし、そうすると、これだけでは、「戦争と米軍占領、そして今」というテーマにしっくり合わないとも思いました。

先ほどは、あさと愛子さんのウクライナにかかわる短歌を紹介したんですが、実は、ウクライナ侵攻については、沖縄のなかの議論は、知識層の人たちのなかや運動の現場だけでなく、そして一般社会でも錯綜しているところもあります。それは、もちろん、別に沖縄だけがそうではなく、日本全体でも世界的にもそうですね。ウクライナがアメリカの武器供与を受け続けていることをどう考えるかということ一つにしても、沖縄では、そんなに簡単には受け入れられなかったり、あるいは、現象を単純な「喧嘩両成敗」のような構図で判断してしまったりすることもあります。

沖縄では、民衆的な世界観では、あさと愛子さんの短歌に示されているように、肌身に感じるところで戦争を見ようとしていると思います。それは恐らく、これまでも、アフガニスタンやイラクで戦争が繰り広げられたときなどにも、「心が痛い」という自分の感覚とつながって痛みを感じるということはあったと思うんですね。それはウクライナに関してもそうだと思います。

けれども、他方で、その戦争自体の性質についてはなかなかうまく議論ができないという面がある。

逆に、「ウクライナが踏ん張り続けることによって第三次世界大戦の危機が高まっている」「ロシアの侵略戦争であると同時に代理戦争である」諸々の構図的な理解をはじめ、この戦争に関してはさまざまな解釈が成り立っていますから、議論を深めるのは簡単ではないと思います。

とはいえ、現在の世界のなかで、沖縄の反戦意識や平和意識にあらわれる課題は何か、これはとても重要な課題です。

当然、非暴力で平和を求めるということが多くの人の心のなかにずっとあるわけです。とても大切なことです。しかし同時に、ロシアによる軍事侵攻という現実と直面している世界で、沖縄の反戦平和の思想もこの時代のなかで試されてしまう。そういう状況が生じているのではないかと考えています。

簡単ではないのですが、それを一緒に考えていくには、いくつかの事例を見ながら、丁寧に考えることが必要ですが、今日は、その手がかりの一つではありますが、朝鮮戦争と沖縄の関係について話題提供として準備してきました。

ベトナム戦争については、昨日の今さんのお話のなかでもいろいろ出てきたと思います。沖縄戦の話はおそらく、佐喜眞美術館の館長さんや川満昭広さん、それぞれに本当に深く深く掘ってこられた方たちなので、お話しされたんじゃないかなと思っています。

朝鮮戦争は、振り返ってみると、ベトナム戦争と比べると、戦争から占領直後の混乱期ということもあると思いますが、実はあまり話題になってこなかった面があります。ところが、朝鮮戦争というのは沖縄の基地の原型を作ってしまう戦争ですから、本来であれば、もっともっと知見が広がっていなければならなかったと思います。けれども、この戦争は、少なくともいろんな戦後沖縄の書きもののなかではあまり重視されてこなかったように感じます。

三つのオペレーションと基地拡張

しかし、さきほども触れたように、朝鮮戦争のなかで沖縄の基地の原型が作られました。この時期は、とくに空軍を中心としています。朝鮮戦争期の沖縄のアメリカ空軍は第20空軍です。第20空軍は米陸軍航空軍に創設された戦略爆撃部隊で、1945年には広島と長崎への原爆投下をおこないました。1946年には、SAC(戦略航空軍団)の主力部隊となり、極東空軍の指揮下に入ります。この当時は B29が主力で、戦略爆撃機の部隊が沖縄にも配備されていました。

戦略爆撃は、基本的には都市やインフラ施設を対象とした爆撃とされますが、実際には「戦争を支えている」ということで、民間人が多く暮らしている社会全体を破壊をしていく、そういう集中攻撃ですね。たとえば、東京大空襲を考えると、ポール・ヴィリリオが指摘しているように、「空間の飽和」、つまり、人びとに逃げ場がない状態を作るという形で空爆するわけです。

朝鮮戦争期には、戦略爆撃は、基本的に極東空軍爆撃軍団(Far East Air Force)、FEAFがやっています。そして、B29の編成部隊は、1950年7月に横田と沖縄に分かれて配備されていきます。これが朝鮮半島へ爆撃をしていきます。沖縄からは、第19大隊と第307大隊が前線に爆撃に行きました。また、上空から写真を撮影する機能を搭載した爆撃機もある。

沖縄からおこなわれた代表的なオペレーションは三つあります。一つは、Operation Strangle。「絞殺作戦」と名づけられた空爆です。二つめは、Operation Hudson Harbor。「ハドソン・ハーバー作戦」と名づけられた空爆、これは原爆投下のための訓練爆撃です。三つめは水源に対する攻撃。これら三つのオペレーションがあったんですね。横田や板付の基

地なども使われているので、日本「本土」にあった基地もフルに使われていたこともあって、沖縄のなかでは、攻撃基地としては、「本土」の基地に比べたら「沖縄はそうでもなかった」という神話みたいな話を聞くことができます。しかし、実際、FEAFのB29戦略爆撃機を中心とした部隊が連日沖縄からこの作戦に参加しているんですね。

第一の「絞殺作戦」は1951年の都市爆撃などですが、北朝鮮のかなりの都市が集中爆撃されています。1951年2月、最も戦況が激しい時期に、空爆前と空爆後の空中写真を見ると、空爆によって数多くのクレーター状のものができている。沖縄から出撃していった部隊の関連資料のなかからも、そうした写真が出てきます。しかも、夜間飛行での爆撃もやっています。夜間の爆撃が可能だということがB29が、日本への激しい空爆から数年後の朝鮮戦争でも引き続き採用された大きな理由でもあります。

ベトナム戦争のときには、米太平洋軍のシャープ提督による「米軍は沖縄なしでベトナムを戦うことができない」という発言がよく知られていますが、朝鮮戦争の場合、そこまではないかもしれませんが、沖縄に駐留する米軍はやはり大きな比重の任務を担っていたことは確かです。

実際に、米軍側の認識自体においても、沖縄の軍事基地は朝鮮戦争によって整備拡張されたという認識を持っていると思います。

米軍の通信部隊が制作し、実際にアメリカでテレビ放送されていた“The Big Picture”という番組の一つがあり、これは沖縄を特集した“Okinawa: Bastion in the Pacific”からのフッテージです。1958年に作られた、米軍がお茶の間向けに作ったテレビ番組です。その内容は沖縄戦から始まっていきます。映像自体をみるとモノクロームで、沖縄戦なのか朝鮮戦争なのか、区別がつかないかもしれませんが、最初の部分で出てくるものは沖縄戦です。

少し話が逸れますが、沖縄戦の映像のなかに、迫撃砲の映像が使われています。このボーンという迫撃砲の音は、沖縄戦を体験された方が、ウクライナの戦場からの報道映像を見ているとき、一番身体的にガツンとくる音ではないかと思います。

朝鮮戦争の話に戻ると、“Okinawa: Bastion in the Pacific”の物語は、戦争で荒廃した沖縄が、朝鮮戦争によって米軍の基地が整備されていくと、労働者たちも潤って、基地労働に仕事を見つけて、米軍と共に歩んで基地を作ってきた、という内容のプロパガンダです。実際にナレーションや最初の説明は米軍の将校がしてるんですね。朝鮮戦争が旋回軸になって沖縄の社会を変えた、近代化したんだという、そういう考え方。米軍の過剰な自己イメージのアピールで、こうした占領のマスター・ナラティブは、基本的に、過大評価、誇張の連続です。

エアパワー

オペレーションの二つ目にあげた「ハドソン・ハーバー作戦」については、これまで何度か触れてきたのですが、この事実についての研究は、いまだ全貌は明らかではないこともあって、日本でよく知られているわけではありません。NHKが沖縄と核に関するさまざまな特集を組んで番組を作ったり、また、TBSも「報道特集」という調査報道の番組で、先日「復帰

50年」に関連した核の特集をやったりしていました。しかし、それらは、「ハドソン・ハーバー作戦」よりも後の、沖縄への核配備が本格化するアイゼンハワー政権からケネディ政権の時期、たとえば、キューバ危機のような事件に関連することに注目をしたものです。こうした傾向を大きく捉えると、日本全体の朝鮮戦争への関心の薄さということも関連しているのかもしれませんが。この作戦については、ロジャー・ディングマンとブルース・カミングスという二人のアメリカ・東アジア関係史の現代史家が検証をおこなっています。

「ハドソン・ハーバー作戦」の重大性の第一は、もちろん、その作戦の前提が、朝鮮戦争におけるアメリカの原爆使用にあったという点です。1951年4月、トルーマン大統領は、中国の基地から米軍への爆撃機が発進するか、あるいは新たな部隊の参戦があった場合には、核による報復をおこなうという統合参謀本部の要請を承認し、核物質の管理を原子力委員会の管轄から軍の管理へ移管しました。朝鮮戦争は正式に終戦に至っていない戦争ですので、この大統領承認自体が依然として解除されているわけではありませんから、カミングスは、今日の朝鮮半島の核問題の出発点はここにあると言っても過言ではないと指摘しています。

重大性の第二は、そのときの文書のなかに、投下する核兵器の「最終組み立て (final assembly) は嘉手納でおこなう」と書いてあるということ、つまり、「ハドソン・ハーバー作戦」とは、原爆投下を前提とした、いわば「訓練」のような爆撃だったということです。それは模擬原爆、つまり、投下される原爆と同じ大きさの重量の火薬を積んだ爆弾を運んで、攻撃目標に投下して嘉手納に戻ってくるという、実践をともなった「訓練」です。しかも、搭載された爆弾はTNT(トリニトロトルエン)爆弾で、非常に強い殺傷能力があるものです。実際の爆弾で人を殺しながらおこなわれる投下の「訓練」なわけですね。私は、このようなオペレーションを「訓練」と呼ぶことはできるだろうかと逡巡しつつ話していますが、このオペレーションは、実際に、将来の原爆投下可能性を前提として、沖縄と北朝鮮を往復する飛行と爆弾投下をおこなうものだったわけですね。

残念ながら、この「ハドソン・ハーバー作戦」については、今もまだ朝鮮戦争は正式に終戦に至っていない戦争ですので、米国国立公文書館でいろいろ調べようとしても、黄色の公開制限の紙が数多く入っていて、全貌を知ることにはできません。また、すべての米国公文書に言えることですが、核に関するものはとくに厳しく制限がかかっている場合が多いと思います。とにかく、ナパーム弾はもちろん、原爆以外の、原爆投下のための「訓練」を含めた、殺傷能力の高いさまざまな兵器が朝鮮戦争では使用されたことは明らかなことでしょう。

また、水源に対する爆撃攻撃もかなり沖縄から飛んでいってやっています。米軍は意図的に水源や灌漑用ダムなどを破壊しました。水源への攻撃は農業を破壊することから、飢餓を招く危険があるなど、人道問題の大きいもので、後に、1977年のジュネーブ諸条約第1追加議定書で原則禁止とされました(アメリカはこの追加議定書には未だに未参加)。こうした爆撃の目的は「敵の戦意を挫く」ため、あるいは、休戦協議とからんだ「政治的な攻撃」でした。

沖縄に配備されていたB29戦略爆撃機他は、こうしたことに使用されていたわけです。

ポール・ヴィリリオは、空軍力による戦争は、その地理的な広がりというもの、単に横に水平になっていくのではなくて、垂直的に沿岸域が広がるという言い方をしています。ここに、1948年に米中央情報局 (Central Intelligence Agency、CIA) が作成した地図があります。CIAは、沖縄島の中央部、嘉手納基地を中心にして、半径500マイルの同心円の地図を作成しました。この同心円の沖縄地図は、今では、軍事専門家や官僚、研究者によって、沖縄の「地政学的重要性」や「戦略的重要性」を強調するときに使われる地図です。同時に、「沖縄はアジアの中心」という、文化的な意味合いで沖縄の人たちも肯定的、積極的に使います。でも、その同心円地図の原型はこのCIAの地図なんです。ですから、沖縄の現代史に則して考える立場からすると、あまり安易に使うのは好ましいとは思えないところがありますね。

実際、この地図は、軍事的には平面で理解するだけでは不十分だろうと思います。垂直に理解することは重要だと思います。なぜ垂直に理解しなければならないかと言うと、この地図の認識の前提が「空軍力」、エアパワーだからです。

沖縄は海を隔てているので、大陸や他の島嶼と直に接しているわけではない。けれども、地図を垂直に理解すると、沖縄の「沿岸域」が無限大に広がっていき、軍事的な意味合いが強く認識されます。1948年、マッカーサーは沖縄の基地の重要性について「空軍力」を強調していましたが、実際に、空軍力はどんどんと強力になって米軍の主力を担うようになるだけでなく、ベトナム戦争を超えて、湾岸戦争、イラク、アフガニスタン、あるいは、ソマリアの戦争なども考えてみると、沖縄の基地がカバーする範囲はアジアはおろか、ユーラシア大陸、中東、インド洋、さらにアフリカ大陸へと広げられていくわけですが、今では宇宙もその射程にあります。こうした軍事的な空間認識のなかの沖縄の位置づけは、この時期の延長線上にあると理解すべきではないかと思います。

戦争の巻き添え

空軍力による攻撃、つまり、空爆・爆撃には、規模の大きな巻き添え、軍事用語では“collateral damage”、「二次的に付随した被害」、つまりは巻き添えで死傷するということがつぎまとう。沖縄にある基地がかかわる死とはどのようなものかと想像するとき、それは兵士の死という以上に、こうした巻き添えによる民間人被害があります。空軍力が中心になると、その数も広がっていく。それが現実化したのが朝鮮戦争であり、ベトナム戦争、その後の戦争ですね。

ここで、フランスの映像作家、クリス・マルケルが朝鮮戦争休戦から間もない1950年代の半ばに北朝鮮に行って撮影した“Coréennes”という有名な写真集を紹介したいと思います。この写真集のなかに、水田に戦車の残骸がぼつんとある写真と一緒に、空爆で作られた大きな穴を埋めるために人びとが力を合わせて工事している、そういう写真があります。つまり、アメリカの激しい攻勢を耐え抜いたんだという、そういう感性をもって復興作業をしている人たちの姿です。マルケルはフランス人ですから、プロパガンダとして撮影したわけではありません。こういう写真を見ると、朝鮮戦争のなかの人びとの現実と沖縄の人

びとのあいだを本当の意味でつなげていくにはどうすればいいのか、いろいろと考えさせられます。それは、常に課題です。

朝鮮戦争は、日本の植民地支配からの解放、独立、その過程が挫折させられるなかで深まる内戦、そして、戦争が全土におよび、さらにアメリカが38度線を超えて攻め上がってくるような状況に至る戦争です。しかも、朝鮮戦争の理解は、冷戦的なマインドセットや言説によって左右されながら、無限にたくさんの解釈があります。これを北朝鮮から見れば、米軍の攻撃に対する抵抗の戦争でもあり、また、中国から見たときには「抗美援朝」、つまり「アメリカに抵抗し、朝鮮を助ける」という理解ですね。当然、韓国やアメリカ、日本から見れば異なるものですし、もっと細かい、さまざまな集団や個人によっても異なるでしょう。

では、沖縄の人たちにとって、朝鮮戦争はどのように捉えられてきたのか、あるいは、世界史的な連関性のなかで、どのように考えていけばいいのか。簡単な問いではありませんが、この間、この問いを繰り返し考えています。

ここで、ピカソが1951年に描いた、有名な『朝鮮の虐殺』という絵を示したいと思います。ピカソは、片方に無防備な女性たちや子どもたちを描き、その人たちに銃口を向けている金属の鎧で全身を覆った、顔の見えない兵士を対峙させています。兵士たちが誰であるかについては特定せず、一つのイメージからさまざまな解釈を成り立たせています。巻き添えになる民衆に対する深い感情を呼び起こす、想像力を刺激するイメージです。沖縄の基本的な朝鮮戦争のイメージと重なるものがあると感じます。また、このイメージは、朝鮮戦争はもちろんのこと、ウクライナの人びとも含め、現代の戦争に通底させて考えることができると思います。

他方で、今日はあまり深く掘り下げることはしませんが、沖縄における朝鮮戦争のイメージを考えるとときに避けることができないのは、休暇や戦争から帰還してきた兵士による暴力、とくに性暴力です。朝鮮戦争の時期の沖縄では性暴力の事件が増えただけでなく、「ギャング・レイプ」のような残虐なやり方も多くなったと言われます。高里鈴代さんはこれを「もう一つの戦争」と呼んでいます。「特飲街」「Aサイン」なども各所に作られます。米軍による性暴力への対策として、沖縄の有力者たちがそうした場所や制度を一つの妥協として受け入れてしまうところがありましたので、これについては近年、女性史・ジェンダー史の観点からの研究もあります。実際の戦争と併行して、「もう一つの戦争」が社会のなかに広がっていく。そうした歴史は、韓国やフィリピンなど、この数十年のあいだに各地の女性たちの連帯運動のなかでも、相互参照しながら明らかにされてきたと思います。そうした積み重ねの上で、たとえば、今、ウクライナの女性たちが直面していること、あるいは、ドンバスの女性たちがどんな状況にあるのかということについて、たとえ報道からは何も聞こえてこなかったとしても、強姦や性暴力、虐殺が起きていても不思議ではないと、多くの人はそうした被害を想像していると思います。

また、朝鮮戦争の時期には、沖縄における反戦平和の意思表示、表現というものも徐々に出てきます。謝花直美さんが2021年に有志舎から出された『戦後沖縄と復興の「異音」』と

いう本があって、その第6章に『『アカ』と『第一次琉大事件』』という章があります。1953年春、琉球大学の学生たちが、原爆被害を記録した写真展を企画します。当時、学生たちは、灯火管制に抗うなど、平和に対するさまざまな思いを持っていて、直接的には移動原爆展をやりました。そのことで彼らは米軍から「アカ」だとして敵愾視され、さらに大学から追放されてしまうんですね。謝花さんは沖縄タイムスの記者だった時期に、処分の対象となってしまった元学生の方たちにインタビューして、新聞連載されました。それを元にして、学問的に深めた形で、この第6章を書いておられます。

この原爆展は、戦後、占領下の沖縄の初期にあらわれた、本当に重要な平和運動の一つだったと思います。そして、今、そういう位置づけと理解は、これまで以上に強調したほうがいいのではないかと考えています。

この本のなか一枚の写真があって、学生たちが原爆被害の写真を紹介している様子で、後の方に「戦争」という文字に大きなバツをつけた貼り紙があるのが見えます。写真展といっても、ちょうど日本で占領軍の検閲が解けた後、『アサヒグラフ』に出た原爆被害の写真をベニヤ板のようなものに貼りつけただけですが、それをみんなで見るという、非常にシンプルな方法の移動原爆展だったんですね。そして、この「戦争バツ」というのが、反戦の一つの意思表示なんですね。戦略爆撃の頂点である原爆、その巻き添えの被害を知ることによって、眼前の戦争を想像することが一つの意思表示である。ベトナム戦争の時代とは違って、直接「朝鮮戦争に反対」とか、そうした言葉は第一次琉大事件だけでなく、この時期にはいろんな叙述にはなかなか出てこない。ですから、この「戦争バツ」というものも写真展も、非常に貴重な沖縄での反戦運動で、意識化された表現の一つだと思います。

反戦平和の思想と実践の問い

このように、沖縄では、戦争で巻き添えになる民衆に向けられた感性は、本当に鋭く細やかです。ただ、そうしたことの一方、戦争とは何なのかについて、「心が痛い」「戦争は絶対にダメだ」と言わざるを得ないという地点を踏まえながらも、さらにそこから進んで、戦争原因はもちろん、どうして人びとが武装して徹底抗戦するのか、なぜ武装した人びとによる民衆抵抗が起きるのか、そうした戦争のあり方が今にどのように影響を及ぼしているのか、より深く丁寧に戦争について、あるいは歴史自体の性質を考え抜く、そういう姿勢をもった議論は、戦後沖縄の知識人のさまざまな議論のなかでも、残念ながら多くは見いだせないということがあります。

しかし、今、2022年の現実、沖縄の反戦平和の思想も、他のさまざまな価値観や思想と同じように、ロシアのウクライナへの軍事侵攻によって顕在化した世界的な構造変動のなかで問われています。沖縄における考察の射程と実践の有効性について、より深い思考を信じて、考え抜く他ない、そういう時代だと感じています。もちろん、それは、沖縄だけではなく、世界中、すべての人がそうした転換点に直面しているからです。

今日、7月24日の『沖縄タイムス』の社説は、ここまでの沖縄におけるウクライナ侵攻に

関する論調のなかでは、現実の矛盾を避けないで思考しようとしているという面で、紹介したいと思います。この社説は、「もっと武器を」と言わなければならないウクライナの人たちの直面する深刻な状況に対して、絶対平和主義的に「とにかく戦争はおかしい」「武器をとるのはおかしい」と断罪するのではなく、現実の困難さから考えようとしている点で説得力があると思いました。ウクライナの方たちが「これ以上の犠牲を出さないために、この戦争は絶対に勝たなければならない」と考えざるを得ない立場に追い込まれているということ、この深刻な状況を踏まえた上で、彼らをそうした立場にこれ以上追い込まないで、犠牲をくい止めるためには、どういう平和構築の国際世論が必要か、という問題提起をしています。短いので、この社説は問題提起で終わっているわけですが、少なくとも、広く議論の前提を作っていると思います。

最後に、一つの参考として、沖縄現代史家の新崎盛暉さんが書かれた文章を紹介したいと思います。これはちょうど2003年のイラク戦争の頃に書かれたもので、民衆の武装闘争まで「テロ」と呼んで断罪する傾向に危機感を持って『けーし風』に書かれた文章です。一部を引用したいと思います。

かつて世界中に広がったベトナム反戦運動は、サイゴンのアメリカ大使館に対する捨て身の攻撃をテロと呼ぶことはなかった。非暴力の反戦運動が強力な力を持ちえたのは、民衆の武装解放闘争に限りない連帯感を持ちえたからではなかったのか。非暴力主義は、武装闘争の単なる否定ではなく、武装解放闘争に共鳴、連帯しつつ、同時にこれと競い合って、抑圧された民衆の解放と平和的共生実現の手段としての有効性を立証することによって武装解放闘争を乗り越えるところにその意義があることを再確認する必要があるのではないか。

「非暴力主義は、武装闘争の単なる否定ではない」。そして、ここが今、とても鋭く問われている難しい課題だと思いますが、「武装闘争に共鳴、連帯しながら、同時に非暴力の闘争がこれと競い合って」、自分たちの非暴力主義が「抑圧された民衆の解放と平和的共生実現の手段として有効だということを証明」するということ。とても短い、シンプルな文体の文章なんですけれども、しかし重大な、決定的な問いを示している文章だと思います。

武装闘争をしている人たちがいて、それは決してきれいごとではない。しかも、ウクライナの場合にはアメリカから武器供与を受けているので、沖縄の反戦平和の立場に立って見ると、なかなか認められないような面もあるのかもしれないだろうと思います。また、絶対平和主義の人たちは納得しないかもしれないですし、この新崎さんの文章を肯定する人も否定する人も当然両方いると思います。けれども、近現代の沖縄の歴史を世界史に連結し、その現段階を踏まえて考えるには、とても重要な言葉ではないかと思っています。

東アジアと沖縄

中野 敏男
(2022年8月6日)

東アジア連続講演会「境界と路上を考える」の一環として、「東アジアと沖縄」と題したお話しをします。「境界と路上」と言われると、この講演ではあまり触れられていないように思われるでしょうが、「沖縄の「復帰」50年」という問いを立てて「東アジアと沖縄」という大きめの枠組みで話をせよと委託を受けまして、「植民地主義」という問題を軸に考えていこうと準備いたしました。以下のお話しは、次のような順で進みます。

はじめに

- I 東アジアの植民地主義経験とは何か？
——継続する植民地主義の観点から考える
- II 沖縄の植民地主義経験とは何か？
——ここでも継続する植民地主義の問題
- III 民衆の移動と出逢い、他者の声
——権力に依存しない道を「反復帰論」に学ぶ

はじめに

『越境広場』(越境広場刊行委員会、2015年創刊)という雑誌は、皆さんご覧になっているでしょうか。その『越境広場』の第9号(2021年7月)と第10号(2022年3月)が出まして、たまたま私は連続して執筆のお誘いをいただき、ありがたくその場をお借りしてそれぞれに小文を書くことができました。『越境広場』の第9号と第10号は2つの特集をしています。

まず、「沖縄から世界を問う」というのが第9号の特集。つまり、沖縄の経験が世界につながるというのはどういうことなのか、沖縄の問題が世界にどのようにつながっているのかという問題です。これはすごく大きな問題で厄介だけれど、やっぱり考える価値のあることだなと思いながら特集に参加しました。

そして、第10号は今年のことですが、こちらは「「復帰」50年 未完の問いを開く」という特集です。この講演会に参加されている方々のなかで、50年前の「復帰」の頃に生まれていらした方は少ないのではないかと思いますけど、私はもちろんおりました。ちょっと個人的なことですけど、「復帰」に伴った沖縄への自衛隊の最初の「派兵」があって、それが九州の西部方面総監部から出るということで反対闘争があり、それにわたしも参加しています。

沖縄へ自衛隊の部隊が配備されるということで、熊本の西部方面総監部まで行って、反対のデモンストレーションをしたのですが、路上であえなく逮捕されました。そんなわたしの経験からも50年が過ぎたのだなと改めて思います。その復帰から50年経ってなお「未完」とはどういうことか、復帰によって何が「未完」なのかという問題を、第10号の特集において考えました。

それに対して、わたしは二つの論考を出しています。第9号には「植民地主義をめぐる沖縄の思考の経験」というタイトルで書きました。沖縄から世界を問うというのは、また沖縄の経験が世界的だというのは、どういうことなのかを意識しながら、植民地主義をめぐる沖縄の特別な経験について考えてみました。また第10号では、「民衆の移動と出逢いを問うーもうひとつの『反復帰論』の射程」というタイトルで書いたのですが、前号で触れたその特別な植民地主義の経験が沖縄においてどんな思想を生み、どんな課題を残したか、ということです。それが「未完」の思想課題だということなのですが、ここでもキーワードは「植民地主義」で、その歴史の中で沖縄が経験した特別な「民衆の移動と出逢い」に焦点が当てられています。

今日のお話は、この二つの論考を単純に紹介しようということではなくて、それについては皆さんにはぜひ『越境広場』の第9号と第10号を読んでいただきたいのですが、その前提となるようなアジアと沖縄と植民地主義の歴史を広く考えてみようというのが狙いがあります。

それを考えるに当たってまず押さえておきたいこととして、そもそも沖縄において植民地主義という問題意識との出逢いはいつかという問題があると思っています。第9号に書いた論考で触れているのですが、『季刊前夜』という雑誌のために私が沖縄の大切な思想家である新川明さんに行なった2006年のインタビューで、「植民地主義」という言葉自体を知ったのは大分あとになってのことだと言われています。この「植民地主義」という言葉でいろいろ考え始めたのは、「ここ数年のことだ」と言われるのです。新川さんが長い間ずっと考え続けてきたのは「植民地主義」のことかと問われれば、確かに「植民地主義」のことなのだけれど、それを「植民地主義」という言葉を使って考えるようになったのは「ここ数年のことなんだよ」と言われている。沖縄において「植民地主義」という言葉で、この問題意識で、いろいろ考えるようになってるのは、実は21世紀に入った頃からのことだというわけです。

新川さんからそれをうかがって、わたしはそれが、沖縄とわたしたちとの出逢いとも重なっているとあらためて気づかされました。わたしが東京外国語大学にまだ在籍していたときに科学研究費を受給した研究プロジェクトで、1999年12月に「コロニアリズム/レイシズムを問う場所、語る位置」というタイトルのシンポジウムを沖縄県男女共同参画センター「ているる」で開催しています。そのシンポジウムでは、新川明さんをお願いして講演をしていただきました。そのときの「自分史の中での『反復帰論』」というタイトルの講演は、新川さんご自身にとっても久しぶりの講演であったのだそうです。新川明さんが久しぶりに

人前で講演するということで、沖縄各地から多くの方がきっちり正装して集まれて、それはとても重要な場になりました。それは、しばらく沈黙されていた新川明さんがまた思想を語りだされる大切なステップとなったし、事後のインタビューによれば、この講演のころから新川さんは「植民地主義」を意識されるようになっていて、ということです。この講演のことは、『沖縄・統合と反逆』（筑摩書房、2000年）という新川さんの著作の第2章に収録されております。

もちろん、「植民地主義」という問題意識をわれわれが沖縄に持ち込んだなどと、傲慢なことを言うつもりは毛頭ありません。そうではなく、わたしたちが沖縄に出向いて「コロニアリズム」を主題にするシンポジウムをした前後に、ちょうどその頃に新川明さんご自身が植民地主義という言葉に出会って、ご自身の問題を植民地主義という言葉にかかわらせながら考えられ始めているということです。わたしとしては、この事実をなかなか感慨深いと感じております。

そこで、那覇でそのような趣旨のシンポジウムをするようになった経緯について、少し触れておきましょう。われわれのその科研プロジェクトは主に東京を中心に組織されたもので、アメリカ・オーストラリア・ドイツなどからの研究者も参加していて、そのような国際的視野からコロニアリズムに関心が広がって、日本と沖縄との関係が「コロニアリズム」の問題として意識されるようになっていました。

1990年代当時の「総力戦体制論」という議論には、日本社会の戦時と戦後の見直しという論点がありました。それは、時あたかもということなのですが、冷戦終結の90年代という時代でありました。その90年代に、今日ここに参加されている方々がどのようにしていらしたのかも興味深いですが、われわれは90年代にすでに研究者になっていました。その時にちょうど主題として大きな研究テーマになっていたのが、戦時・戦後の社会体制と戦時・戦後の歴史認識をどのように捉え直すかという問題でした。冷戦が終結したことを機に、そうした時代への反省が起こったときだったなと思います。

そんな時代の中で、ちょうど東京外国語大学を中心に集まった何人かのメンバーが、「総力戦体制論」という、戦中・戦後を貫く日本社会の体制についての議論を始めていたのですね。「戦後」と言われてきた時代について、それまではそれを、ファシズムから民主主義へ転換した時代、そして、軍国主義から平和主義に転換した時代、そのように捉えるのが一般的でしたが、それでいいのだろうかという疑問です。

三つぐらい問題関心の流れがありまして、そのひとつは戦時の経済体制についてのことです。それまでは第二次世界大戦について、それを「自由主義vsファシズム」という対照的な体制間の戦争として見るのが普通でした。しかし経済的に立ち入って見ると、その両者には共通性があるのではないかという疑問が生まれます。戦時に向かう社会体制は、各国についてそれぞれ「ニューディール」とか「ナチズム」とか「ソ連型社会主義」とか表現されますが、しかしいずれも資本主義の30年代危機への対応策として見れば共通の性格をもっているのではないかと思います。だからその全体を、共通する戦時の社会体制への転

換として世界史的に考えてみる必要があるというのが第一の問題意識です。

それからもう一つは戦争の性格に関してのことです。それまで、誤りは戦争をやった軍部の軍国主義にあり、軍国主義から民主主義へと社会が転換することで無罪の民衆がようやく解放されるという認識でした。しかし、事実としてそれは間違っていて、戦争に参加した日本民衆にも戦争への責任があり、この責任も問題にしなくてはいけないだろうというのが二つ目の問題関心です。

さらにもう一つは戦後社会のことで、戦後によりやく民主化されたと考えられてきた日本社会は、実は戦時から戦後へと連続して作られていて、戦後への転換と言っても社会的にはそこに大きな変化はなく、統制の進んだ戦時体制こそ事実として戦後日本の高度経済成長を支える基盤ともなってきたという認識です。

これら三つぐらいの問題関心が重なって、戦時から戦後へと連続するこの社会の全体を「総力戦体制」と呼ぼうという共通認識が生まれたというわけです。このように90年代に戦後日本についての新しい認識が生まれ、それをもって戦後歴史学が長い間共有してきた歴史観と論争しようというのが、「総力戦体制論」という議論の流れでした。この新しい流れにそって共同研究が生まれ育ち、アメリカやオーストラリアなどの日本研究者とも響き合っで広がり、やがて90年代の末、すなわち世紀転換期の頃になると、その問題意識の視野がさらに広がっていくということです。その広がりを中心にあつたのが〈植民地主義〉への問題関心です。

これまで述べたとおり90年代に「総力戦体制論」が生まれ、戦時・戦後の社会体制の連続ということを語っていたのですが、そのころに生まれ育ってきた意識は、その連続する社会構成の基礎にさらにもうひとつ「植民地主義」という問題を考えなければならないのではないかとということです。それまでの「総力戦体制論」は、そのことを問題意識から落としていたのではないかとという自覚が、そこに生まれたわけです。そのような自覚の基点には、特に在日朝鮮人の存在への意識がありました。「総力戦体制」と言ってもそれは一国の問題なのではなく、むしろ広く版図を広げた植民地帝国の体制だったのであり、その事実が戦後の日本社会には「在日朝鮮人」として現に痕跡をとどめているのではないか、という認識です。植民地主義という問題も、総力戦体制と連関しつつ、その形で戦時と戦後を貫いて日本社会に現に存在し続けているということです。

それからもう一つは、植民地主義は単に対外政策や文化意識だけの問題ではないという問題意識があります。その当時、「ポストコロニアル」ということが盛んに言われて、それに関連する議論が世界的に広がったという状況がありました。ところが、この「ポストコロニアル」という議論は、とかく文化論に偏りがちで、社会を構造的に捉えるには不十分だと感じられたのです。そのような文化論はもちろん必要なのだけれど、植民地主義というのは「文化」だけの問題ではなく、社会構造を捉えなければならないということです。今日の社会には、現にレイシズムや社会的な差別とかの問題があつて、その中になお植民地主義が生きているじゃないかという問題認識が生まれ、そこから文化論を超えた現在の社会構

造にかかわる議論が課題になります。

このようにして、90年代の「総力戦体制論」は世紀転換期に「継続する植民地主義」という問題意識の枠組みに転換していくことになります。

そしてこのときに、この「継続する植民地主義」という問題意識から、まずなによりも沖縄のことを考えたい、沖縄の方々と議論したいという希望が生まれ、そのような提案に進んでいきました。その最初のシンポジウムを開催したのが「ているる」という場所だったとさきほど言いました。実は当時、沖縄の琉球大学とかその他の大学のどなたに共同で議論をしようと呼びかけたらいいのか、必ずしもはっきりとしていませんでした。それでどこかの大学に場を設定するということが出来なかったので、「ているる」という「まちなか」の場所でやらざるを得なかったということがありました。

そんな形で、「植民地主義」を考えるという点でも、それを「沖縄」と繋げて考えるという点でも、世紀転換の時期にようやく手探りで出発したばかりの共同研究プロジェクトでした。それでも「継続する植民地主義」という問題意識を軸に取り組み続けた成果として、2005年には『継続する植民地主義』という論集を、2006年には『沖縄の占領と日本の復興』という論集を青弓社から出版するまでにいたりしました。今日は、そんな歩みの中で考えてきたことをお話ししようと思っています。

今日この場で考えていきたいことは3つぐらいありまして、第一は東アジアにおいて植民地主義の経験とはいったい何だったのかという問題です。それから第二に、沖縄において植民地主義の経験とはいったい何だったのかということを考えてみます。そのうえで第三に、沖縄の経験はどのような思想問題になっているのかということと、「反復帰論」という議論を取り上げて考えてみようと思います。

Ⅰ 東アジアの植民地主義経験とは何か？——継続する植民地主義の観点から考える

今まではちょっと前提のお話で、これからが本題になっていきます。東アジアの植民地主義の経験とは、いったい何だったのかということをもまず考えたいと思います。東アジアの植民地主義ということを考えるときに、いつも少し掘り下げが不足しているなど感じるのが、とりわけ20世紀の植民地主義をめぐる思想状況についてですね。第一次世界大戦後に植民地、あるいは植民地支配をめぐる問題は性質を変えていて、そのことについて踏まえないければ、アジアにおける植民地主義の特性を十分につかむことなど出来ないだろうというのが、わたしの基本的な見解です。それはあまりにも基本的なことなので、大したことではないと思われるかもしれませんが、わたしはとても重要だと思うので、まずそこからお話ししたいと思います。

「民族自決」という思想

20世紀の初めというか第一次世界大戦を機に植民地の問題状況、その語り方が大きく転換します。18世紀～19世紀にヨーロッパ諸国は大きく植民地を広げ、日本もそれを追って

19世紀の末尾から20世紀の初めに植民地の獲得に乗り出し、そのぶつかり合いが遂に第一次世界大戦という世界戦争に到るわけですね。そして、この世界戦争の結果、植民地支配の問題をめぐる議論の様相が大きく変化するというところに、まず気をつけたいと思います。

それはどういうことかという、「民族自決」という思想や議論が第一次世界大戦を機に前面に出てきたということです。ソビエトが1917年11月、ロシア革命に成功して第一次世界大戦の講和に向かうというときに、講和の原則として「平和に対する布告」というのをを出していて、そのなかで「民族自決」という問題が提出されている。主導したのはウラジーミル・イリイチ・レーニンですね。

現在、ウラジミールというとプーチンとなって、20世紀の初めのウラジミールと21世紀の初めのウラジミールというのはそれぞれ問題的人物で、彼らがどう問題なのかということはやはり考えなくてはいけないところですね。とりわけ今日この講演を聴かれている多くの方より半世紀先に生まれたわれわれの世代にとっては、ウラジーミル・イリイチ・ウリヤノフという本名のレーニンは、とびきり重要な革命家であり思想家でもありました。植民地主義を考えると、というか帝国主義について考えるときにレーニンの『帝国主義論』を読まないことはあり得なかったという記憶があります。最近、植民地主義とか帝国主義とかを議論しているのに、レーニンの『帝国主義論』を読んだことがないと言われる方が結構いたりするのでびっくりするのですが、やはり読む必要はあると思います。ともあれそのレーニンが20世紀の初めに「民族自決」という問題を、彼が指導したロシア革命を背景に言い出しているということです。

それからもう一つはアメリカですね。ウィルソンというアメリカ大統領が、これもヴェルサイユ条約に向かう講和の原則として、「十四か条の平和原則」というのを出しています。こちらでも第一次世界大戦がきっかけになっていて、その後の時代に覇権を争う米ソが問題の状況を変え始めているわけです。だからこそ20世紀は米ソの時代になったという面もあるので、このことは気をつけておかなければいけません。そのときに主題の一つになっているのが「民族自決」という問題だったということです。「民族自決」の原則が持ち出されたときに、それを尊重すべき対象として意識される範囲が当初の事実としては西欧諸国に限定されていて、それ以外のところは念頭にありませんでした。ともあれ、それでも「民族自決」が言われはじめたということが大事です。

そして、ヴェルサイユ条約が結ばれますね。それにより敗戦国ドイツは植民地を放棄せざるを得なくなりますが、戦勝国の列に加わった日本にとっても状況が変化していて、敗戦国ドイツの植民地をそのまま直ちに日本領にするということとはできない。それで「委任統治」という形式が採られます。これは「民族自決」が議論されたことの結果です。このとき、「委任統治」と言っても事実上は植民地支配なのですが、ヴェルサイユ条約を経て「形式」を変えなければならなかったのです。そして、その後に日本は傀儡国家＝「満洲国」を作ります。これも、事実上は植民地と言っていい支配関係ですけど、しかし体裁は「独立国」という形を採らなければならなかった。このことも、第一次世界大戦後の時代、「民族自決」を語

り始めた時代の事実だということに注意しておきたいと思います。

多様な形の植民地主義

もっとも、「民族自決」の原則が語られ始めたということは、直ちに植民地主義が終焉に進み始めたということの意味したわけではありませんでした。それは植民地主義を後退させたのではなく、「傀儡国家」という形をとった植民地であった「満洲」をはじめ、多様な形の植民地主義を新たに生んだと考えなければなりません。そのようにして「満洲」を押さえた帝国日本は、そこから反転して「南進」の形をとった勢力圏の拡大を図っていくわけですが、こちらでは、英領マレーとかオランダ領のインドネシアという直接統治の可能な条件のあるところではそこを領土化し、そうはできない英領ビルマとかアメリカ領フィリピンについては、日本が後ろ盾になって「独立」するという形をとった傀儡政権を作るというように、条件に合った様々な形での植民地主義統治を試みるようになっていきます。このような動きも、「民族自決」が語られ始めた時代に、むしろそれを利用しつつ、単純に直接統治の「植民地」にするというのではない仕方で植民地主義を作動させていると見なければなりません。つまり「民族自決」が語られる時代に、欧米の植民地支配に対抗する力を利用しつつ、実際には領土化や傀儡化などを混在化させながら進められたのが日本の植民地主義であったと理解できるのです。

このことは日本とアジアにおける植民地主義を考えるうえではとても重要なポイントだと思います。1943年11月にアジア各国の指導者が東京に集まり、日本の国会議事堂の前



〔図1〕大東亜会議 1943年11月5-6日

で東條英機を中心にこうやって並びました〔図1〕。これが「大東亜会議」と呼ばれている国際会議です。しかしこれは、どういう人たちでしょう。アジアの独立国とか独立に向かう国々がその代表を派遣し、その代表者たちの会議が「大東亜会議」と呼ばれているわけですが、それら各国は、実際にはどういう国々でしょうか。

と、あらためて考えると、もちろんその全部にそれぞれ日本の息がかかっていて、それぞれの政権は日本の植民地支配をカモフラージュするかたちにもなっているわけですね。もちろんその中には、そういう日本の力を利用して独立を達成するのだという戦略的な意識を持った独立の志士とか独立運動家もいて、そこに両方の力が微妙に対抗したり交錯したりしながら、その状況の中で植民地主義は作動していたと考えなければなりません。

ともあれ、このような大東亜会議が開かれ、それは「大東亜共栄圏」をめざすものだとされました。それが西欧諸国の植民地支配からの「解放」なのだというのが、日本のプロパガンダでした。しかしそれは、「植民地解放」という名の新たな形の植民地主義支配だったわ

けですね。つまり、日本にかかわる、そしてそれがアジアとかかわる植民地主義というのは、それまでのように「帝国vs植民地」という二項で成り立っているのではなくて、「占領統治」から「傀儡による支配」までを含むさまざまな支配形態の複合だったということをきちんと認識しないと、アジアにおける植民地主義は理解できないと思いますし、危険だと思います。

それを確認するために、大東亜会議で出された宣言を見ておきましょう。共同宣言です。細かくは読めませんが、後半部だけ見ておきましょうか。

大東亞各國ハ協同シテ大東亞ノ安定ヲ確保シ道義ニ基ク共存共榮ノ秩序ヲ建設ス
大東亞各國ハ相互ニ自主獨立ヲ尊重シ互助敦睦ノ實ヲ擧ゲ大東亞ノ親和ヲ確立ス
大東亞各國ハ相互ニ其ノ傳統ヲ尊重シ各民族ノ創造性ヲ伸暢シ大東亞ノ文化ヲ昂揚ス

大東亞各國ハ互惠ノ下緊密ニ提携シ其ノ經濟發展ヲ圖リ大東亞ノ繁榮ヲ増進ス
大東亞各國ハ萬邦トノ交誼ヲ篤ウシ人種的差別ヲ撤廢シ普ク文化ヲ交流シ進ンデ資源ヲ開放シ以テ世界ノ進運ニ貢獻ス

これを見ると、相互にその伝統を尊重するのだとか、人種的差別を撤廃するのだとか、そういう見かけは悪くないことを言っているのですね。しかし、この大東亜宣言によって日本は植民地主義を発動したということです。このことがアジアにおける植民地主義の問題を考えるうえでとても重要だと思います。確かに各国の「自主独立」、民族伝統の「尊重」は言葉として表明されてはいるわけです。しかし、実際の行動を見れば、これが植民地主義だということは疑いなかろうと。大東亜共栄圏は西洋植民地支配からの解放を目指すものだったというふれ込みだったわけですが、実際の歴史過程を見るならばそれは言えなくなると思います。

現にさきほど見たように、条件さえよければ自分の領土にしてしまいますし、そもそも朝鮮を実際に植民地にしていて、それはもう日本の領土だと言い張っているのですから、それでも「大東亜共栄圏は植民地解放のため」というのはとても筋が通らないことなのです。ともあれ重要なのは、こういうかたちを取って植民地主義が発動されたということ、それをアジアの植民地主義経験として考えておかなければならないということです。この経験を教訓としておくこと、これがとても大事だと思っています。

「冷戦」と「第三世界」の並行——基地国家となる日本

そのことを踏まえたうえで、その後の歴史の展開を考えてみたいと思います。アジア太平洋戦争の終結後、日本の敗戦後のことです。これまで見てきたような日本の植民地主義は、その敗戦によって一つの挫折に至るわけですね。それで終わったのかという問題ですが、わたしはそこにも「継続する植民地主義」を見て取るべきだと思います。そこにも「継続」

があると言いたいのですが、もちろん敗戦は事実ですから、その植民地主義が単純にそのまま同じように続くことはできないですね。そうすると、どのように「変わって、かつ、継続したのか」という問題を意識しなければならない、あるいは考えなければならない。また、植民地主義に抵抗するという立場に立つとしても、当の植民地主義のかたちが「変化した」というのであれば、その「変化」をしっかりと見極めなければ植民地主義とはまったく戦えないことになるでしょう。であれば、それまで植民地だったアジアの地域で日本は「戦後」といわれる時期にどのようなことをしていたのかということを、しっかり考えていく必要があるだろうと思います。

そこで、アジアにあった植民地主義は、「戦後」といわれる時代にどのような形で作動をつづけたのか、それは「戦後のアジア」にどのような問題をもたらしただのか、ここでどのような植民地主義の問題を考えることができるのかを、これまでの話を前提にしながら考えてみたいと思います。

もちろん第二次世界大戦が終わったあとというのは、第一次世界大戦のあとに既に「民族自決」の思想が出てきて、それがはじめの事実としてはヨーロッパ中心の思想だったとしても、それにとどめるわけにはいかないと思う人たちが出てくるのは当然でした。そこで、その流れが拡大していく形で脱植民地から独立国家の建設、「民族自決」ということを標榜するナショナリズムの時代が第二次世界大戦のあとにアジアに到来して、その動きが活発化していく。すなわち、日本が「大東亜共栄圏」と称して自分の勢力範囲にしていた地域においても、植民地状態から脱出して独立をめざす、そのような独立国家の建設への動きがさまざまに起こったということですね。

アジアにおけるナショナリズムの時代ですが、それをあらためて帝国主義間の植民地争奪戦という観点から見るとどうなるのでしょうか。その争奪戦において日本はいったん敗北



〔図2（上）〕〔図3（下）〕 バンドン会議 1955年4月18

したのですが、しかしその地域での独立国家の成立、その連動した成立は、それまでこの地域を植民地にしていた国々、イギリスとかフランスとかオランダという勢力ですが、それらの勢力が後退していく事態としても理解することができる。そのように見てみると、この地域でのそうした事態がそのあとどうなったのかという問題が出てきます。

そこでまず、どういうことが起こるかということ、新しく独立を成し遂げた諸国の連携の動きです。それについては「バンドン会議」というのが

とても重要で、植民地から新しく独立した国々が連携して「第三世界」という一つの勢力を作ろうという動きに発展していきます。つまり、米ソの冷戦構造に対する第三の力、それが「第三世界」となって現れて、一つの希望になる。そういうかたちで、一つ一つの国は新しくまだ力はないけれど、それが集まればすごい力を持つのではないかと感じさせる「第三世界」の希望が、ここから始まりました。この思いをのせて、インドネシアのスカルノ大統領、インドのネルー首相、中国の周恩来首相、エジプトのナセル大統領らが中心になり、インドネシアのバンドンというところで1955年に第一回の「アジア・アフリカ会議」が開かれています〔図2・図3〕。

その会議の冒頭でスカルノは、こんなふうに言っています。

私たちは植民地支配に対する憤怒で結ばれています。私たちは人種主義に対する憤怒で結ばれています。そして、私たちは、世界平和を維持していくという共通の決意で結ばれているのです。

なかなか格調の高い演説で、これは反植民地主義の高らかな宣言なのだと思いますが、このような志で「第三世界」が出発しようとした事実、それが1955年のバンドン会議に始まったということは、きちっと心に残しておかなければならないとわたしは思います。この会議にはアジア、アフリカから29ヶ国が参加しましたが、戦争中ということで南北朝鮮は招請されませんでした。今日では「世界の指導者」などと言うとき、ヨーロッパとアメリカ、それにロシアや中国とかの指導者の名前が挙がりますが、50年代にはむしろこの会議に集った第三世界の指導者たちがニュースなどでも表面に出て活躍していたという印象がわれわれにもあります。スカルノ、インドのネルー、エジプトのナセル、それから中国の周恩来などですね。バンドン会議には、このような新しく独立した国々の指導者、植民地解放運動の主役たちが揃っていたということです。

ところが、他方でそれはもちろん「冷戦」が出発した時期と重なっていて、植民地解放戦争と冷戦の始まりとの重なりを象徴するのが朝鮮戦争なのだろうと思います。朝鮮戦争というのは、1950年6月に北朝鮮軍が38度線を超えて南進したことに始まり、朝鮮半島の南の釜山の近くまで行って、それがまた米軍により押し戻されて北の中国との国境線近くまで行って、このときに中国義勇軍が参加してそれを押し戻すという展開があった戦争で、戦線が朝鮮半島を二往復しているのです。朝鮮半島を戦線が二度縦断したということで、朝鮮半島の全土が巻き込まれて傷ついた戦争です。日本では第二次世界大戦をアジア太平洋戦争というふうに言っていて、この戦争で310万人の日本人が亡くなっているわけですが、侵略戦争ですからその内の多くの人は日本の外で死んでいるのです。この戦争の最後にはもちろん日本本土の空襲があったのですが、その空襲は戦争のまさに最終局面である1944年の11月から始まるので、日本の国内では沖縄を除いて実際には地上戦を経験していない。それ対して朝鮮戦争では、半島内部での戦闘で多くの戦死者を出し、非

常に大きな傷を負っているということを意識しなくてはいけないと思います。

それと日本の戦後史として問題なのは、そのときに日本経済を活性化させる「朝鮮特需」がもたらされていて、朝鮮戦争のために爆弾や砲弾を作ることによって日本の工場、日本の軍需工場が稼働し、それにより敗戦で痛手を受けていた日本の産業が動き出したということですね。このように軍需によって始まる戦後日本の経済復興は果たして「平和的」なのかと反省しなくてはいけないと思いますけれど、日本ではこの時期の状況を「戦後平和主義」とか「戦後復興」とか言ってきました。それに対して韓国の一部の歴史家は、この形の日本を「基地国家」と呼んでいます。朝鮮特需が戦後復興に寄与し、例えば倒産寸前だったトヨタがトラックの受注により息を吹き返す。つまり、戦争の軍需によって日本経済が復興したのは明らかです。

気をつけておきたいのは、軍需を受けて復興に向かう日本経済の形です。直前まで続いていた戦争により、日本は軍需生産を得意とする経済体制をもっていました。日本は軍国主義の国家だったから軍需生産というのは得意な経済分野であって、ちょうどそんな性格を持った経済がアメリカから軍事関連の受注をしていたということになります。とすれば、戦中から戦後へと、日本の産業のかたちはあまり変わっていないということになってきますね。そういう日本の経済社会体制における戦中から戦後への連続ということをしっかり考えなくてはならないというのが、朝鮮戦争の提起している問題なのです。

ともあれここでしっかり認識しておきたいことは、植民地から独立した「第三世界」の国々が連携して自分たちのグループを作ろうという動きと、それから米ソの対立構造がはっきりして「冷戦体制」が立ち上がるということが、このとき同時に成立しているということです。第二次世界大戦の後の時代を一般的に「冷戦期」と言うことがありますけれど、それが同時に、植民地主義との対決が大きな連携として広がる「第三世界の時代」でもあったことを、しっかり確認しておきたいと思います。

賠償特需——継続する植民地主義の経済的基礎

この時代状況の中で、日本の役割が改めて重要なものになっていきます。朝鮮戦争時における「朝鮮特需」が孕む問題については触れてきました。ここで注意したいのはもうひとつのこと、すなわち第二次世界大戦での日本の敗北の形を定めて世界に対する日本の役割を大きく方向づけた「サンフランシスコ講和条約」、これに基礎をおいた「戦後」の体制についてです。

先ず認識しておきたいのは、この講和条約が朝鮮戦争の最中に締結されたという点です。それは米英主導で進められていて、朝鮮戦争を背景にしつつ米英に好都合な形で日本をその戦争体制に組み込むべく配慮がなされ、そのためにまずは南北朝鮮、両中国が講和会議に招請されない形になりました。戦争を主導した日本の侵略や植民地化の動きを直視すればそれはあり得ないことで、日本にとってそれ自体が大変好都合と言うべきですが、ここで注目しておきたいのは、この講和条約が確定した「賠償」の日本にとって好都合な形です。

戦後処理を定める講和条約で、敗戦国の日本がなにがしかの賠償を課されるというのは、普通に考えれば不可避だと言うべきでしょう。第一次世界大戦では敗戦国ドイツがその賠償の負担を負って、それにより深刻な経済的困難に陥ったという事実は有名な話です。そして第二次世界大戦の敗戦国日本も、そのような危機がありえたことは明らかです。ところが実際には、賠償に関して日本にとっても有利な取り決めが、サンフ

〔表1〕賠償特需

賠償特需: 特需の継続としての戦後賠償				
	相手国	金額	調印日	政権担当者
賠償	ビルマ	720億円	1955年11月	ネ・ウィン
	フィリピン	1980億円	1956年05月	マルコス
	インドネシア	803億880万円	1958年01月	スカルノ・スハルト
	ヴェトナム	140億4千万円	1959年05月	ゴ・ディン・ジエム
準賠償	ラオス	10億円	1958年10月	シヌーケ、 ドン・ノム・ホム
	カンボジア	15億円	1959年03月	シヌーケ、 ドン・ノム・ホム
賠償	ビルマ	504億円	1963年03月	ネ・ウィン
	シンガポール	29億4千万円	1967年09月	人民行動党
	マレーシア	29億4千万円	1967年09月	マハティール
	ミクロネシア	18億円	1969年04月	
協定 請求 権	大韓民国	無償1080億円 有償720億円	1965年06月	李承晩 朴正熙
国家予算一般会計歳出 1955年度 9914億5800万円 2021年度 106兆6096億円 約107倍				

ランシスコ講和条約においてなされたのでした。それはつぎのような内容です〔表1〕。

第一次世界大戦後のドイツが賠償負担の過重ゆえに次第に追い詰められて、やがてナチス独裁に進んだというのを歴史的教訓にしようというのが建前だったのですが、この賠償では日本の経済的破綻を招かないようにするというのが原則とされます。そこで、まず日本の占領被害を受けなかった連合国は、賠償要求を放棄します。そして、連合国ではないが日本の戦争により被害を受けた国々については、それぞれ二国間協定によって取り決めようということになります。その際に重要なことは、賠償の決済を日本人の役務、生産物によって行うということです。お金で支払うのではないのですね。日本人が作ったもので払うということです。

そうなるとういう効果が生まれるかというと、日本の産業界にとってみれば、そこに需要が生まれるということですね。つまり、日本の産業界にとってみれば、賠償はあらたな需要創出だったという話です。先ほど触れましたが、朝鮮戦争が需要を生んだということ、つまり朝鮮特需についてはよく語られていて、日本の中学校ぐらいでも社会科の時間にそれが教えられると思います。ところが、需要になった賠償、つまり「賠償特需」というのは教えられないし聞かないですね。けれど「賠償特需」というのは大きな意味を持っていて、日本の産業界にとっては新たな特需が「賠償」によって成立したということです。そして50年代には賠償のための二国間条約が次々と締結され、「朝鮮特需」に代わって「賠償特需」が日本の経済界にとって重要なマーケットを開いたと認めることができます。

しかも、この「賠償特需」というのは、産業界にとってみると二国間条約で取り決められた金額の需要がそこに生まれるというだけではありません。その金額の商品がそれにより出荷できるということだけではなく、それに随伴する経済効果がさらに重要です。そのひとつは、工業製品の「規格」の問題です。JIS規格とかそのようなものですが、生産物には規格があってその規格にもとづいて機械など生産されますね。すると、ある規格の生産物は、それに関連する部品や機材についても同一の規格を要求します。すなわち、例えばある機

械が売れるということは、その規格にもとづいた関連製品の販路がまた開けるということです。一つの機械とか一セットのプラントとかの購買があれば、それに関連した規格製品が芋づる式に売れていくというわけです。そうすると、賠償として取り決められた金額相当の物品を日本製品をもって提供するという点についても、それに付随した商品の輸出が当然のように期待できることになります。これはもう一つ、日本の製品や資本にとってみると新しい安定したマーケットを開く商業活動としても理解できるでしょう。そのことは、敗戦国日本にとってとても重要な意味をもったとかがえねばなりません。

日本は侵略行為などによって各国に被害を与え、かつその戦争に負けているのですから、アジア太平洋戦争の直後は商業活動のパートナーとして警戒されているわけです。それゆえ、そもそもアジアの諸国には、日本の商品を買うということに強い抵抗感があったと認めなければなりません。それから、復興途上の戦争直後には日本製品の品質にも少なからず問題があって、日本の商品は欧米に比べて品質が落ちると見られているところもありました。皆さんは「舶来品」という言葉はご存じでしょうか、もう死語かな。わたくしの子供のころは欧米の製品が上等なものだという観念があって、それが船で渡来するイメージから「舶来品」などと言われていたのです。それに対して日本のものは「安かろう悪かろう」という言い方で信用度が下がりました。そのころの日本製品は信頼されずにアジアにおけるマーケットでの競争力も弱かったのです。

ところが「賠償」は義務として支払うわけですから必ず受け入れられます。しかも、それに付随して同じ規格に関連するさまざまな製品が確実に販売可能になり、輸出できるわけです。このようにして、手堅い輸出市場がまさに「賠償」によって生まれたということです。このことが日本の戦後復興と高度成長にとっても大きな役割を果たしたということはあまり知られていないので、特に強調したいと思います。そのことについては、実は、当時の役人つまり官僚は実によく理解しておりました。例えば、当時の通産省には賠償室という部署がありましたが、その通産省の賠償室長はこんなことを言っております。

東南アジアの新興諸国は経済協力の観点から見て最も魅力に富む処女地である。しかしこの処女地には排外的ナショナリズムや日本の侵略に対する疑惑の念などという強風が吹きすさんでいる。その中へ安全に乗込むには賠償という大義名分と結びつけるより良策はないのではないか。

『通商産業研究』1957年6月

確かに、とても通産官僚らしい言い方で、事態の意味の理解を示していると思います。また、外務省は外務省で、この賠償というのはわが国の義務の履行なのだが、これを単なる義務の履行と見るのではなく、併せて求償国の経済の回復ないし発展に寄与し、ひいては日本との経済関係と外交関係の緊密化に寄与するものと見れば、日本の対外対応としてとてもよいものである、と言っています。つまり、日本の官僚たちは総じて、「賠償」の支払いが

日本の経済・政治にとっても有利だという認識で一致しておりました。それは1957年のことです。

内戦と独裁のアジア——「賠償」と「経済協力」の植民地主義

それでは、そのときに賠償の相手方、すなわち戦争の被害を受けたアジア諸国の事情はどうだったのでしょうか。各国とも基本的には独立前後ということになりますね。そこで、細かく一つ一つ検討することはできませんけれど、独立直後はどうなっていくかを見るとそれらの国々はいずれも直ちに安定することはなく、多くの国で諸勢力の抗争から内戦に発展し、そこにやがて独裁政権が生まれるという状況が起こっています。つまり、独立したら民主的で平和な国がすぐできるかということそんなことは全然なくて、国内が分裂して諸勢力の抗争や内戦が起こり、それが独裁政権、とりわけ親米の反共軍事独裁政権が成立するというのが、一般的なパターンとすることができます。

そのはじめの形として、例えば朝鮮の済州島における「四・三事件」を想起すべきですが、この事件では48年に武装蜂起が起こり、57年まで武力抗争が続いて、現地での犠牲だけでなく島外に避難する人も多く出しました。今日では犠牲者救済のための法律ができて、公式認定された方だけでも14,231名の犠牲者を数えています。公式認定のための届け出申告をしていない人も多くいますから、その倍ぐらい3万人以上の犠牲者が出たと考えられています。こういう抗争が日本の敗戦、日本が植民地を放棄したあとに起こっているということです。植民地解放後に「アカ＝共産主義者」は民族の敵とする虐殺事件が多発したということです。

その一例としてインドネシアでは1965年に9・30事件というクーデター未遂事件が起こり、これをきっかけとして大虐殺というべき事態が発生しました。スハルト独裁政権が持続してこれも長らく語られないまま来たのですが、ここでも共産主義は悪とされ、民間の虐殺行為も含めて最大で200万人の犠牲者が出る大事件に発展しています。そんなインドネシアに、日本はそのスハルト政権のもとで大規模資本進出をしています。2012年に『アクト・オブ・キリング』という映画作品が出て、虐殺した人自身が登場する形で虐殺の真相を語りました。その時まで虐殺者自身が全然反省していなかったものですから、「こんなふうに俺は殺したよ」と自分で語る生々しい本人証言がどんどん出てくる映画になりました。そういう映画が2012年に出て、そのことをきっかけにしてようやく虐殺があった事実そのものが認識され始め、2015年にはNHKから虐殺についての一部報道があって、それから2020年に倉沢愛子さんが『インドネシア大虐殺』という本を書かれて、次第に真相が明らかになってきています。

済州島四・三事件もそれが語られ始めるのにかなりの時間がかかっているのですが、インドネシアでも、その虐殺事件について、そもそも何が起こったのか、誰が被害に遭ったのかを語り出すことそのものに、約半世紀を要しています。長期に軍事独裁政権が続いてそれを隠蔽したからですが、あらためて確認しておかなければならないのは、植民地からの

独立後に「アカ」は国家の敵とされる大虐殺事件が次々に起こっている。このことは決して

〔表 2〕 1945 年以降の武力紛争による死者概数

World Military and Social Expenditures

1945年以降の武力紛争による死者概数		
	時期	死者概数
中国国共内戦	1946-50	1,000,000
インドシナ戦争	1946-54	800,000
朝鮮戦争	1950-53	4,000,000
ベトナム戦争	1955-75	2,358,000
フィリピンゲリラ掃蕩	1945- 65-マルコス期	死者無数
インドネシア大虐殺	1965-66	2,000,000
カンボジア内戦	1970-89	2,000,000
バングラディシュ独立	1971	1,000,000

無視できないだろうと思います。

東アジア全体で見ると、第二次世界大戦後の内戦と虐殺で、被害者の総数は世界大戦そのものを超えると言われます〔表 2〕。400万人を超える死者を出した朝鮮戦争については少し触れましたが、その時期に前後しつつ、中国内戦、第一次インドシナ戦争、そしてベトナム戦争が続いて、この間にフィリピンでも内戦状態がずっと続いている。いま述べたインドネシア大虐殺でも犠牲者は200万

人に及ぶと見られています。それにカンボジアでも、ポル・ポトによる大虐殺事件が起こりますね。こういうことが45年以降に起こっているということです。「冷戦期」と欧米では言われているこの時代に、アジアでは、旧植民地で内戦と虐殺、そして独裁が生まれて、その中で大戦を超えるほど多くの人々が亡くなっているということです。

アジアでこのような多くの死者を出すのは、40年代、50年代から70年代に至るまで、つまり、植民地からの「独立」後のことです。独立したとされている時期のあとに、このように死者が増えている。ところが、日本はそれにどのような対応をしているかという、さきほどのべたように「賠償」による介入ですよね。その時に「賠償」とか「経済協力」が盛んに言われていて、それが軍事独裁となっている政権に注ぎ込まれている。『わが外交の近況』という日本外務省の自讃の報告書がありますが、その1966年版には「わが国の重機械や建設技術などの真価が認められて、これら諸国、つまり独立後の諸国と日本との間の経済交流の基盤が固められた」と書かれています。気をつけたいのは、その66年はベトナム戦争がいよいよ苛烈になっていく時期だという点です。つまり、その「重機械や建設技術」は戦争中の独裁政権に注がれているのです。そういうのが事実ですね。

つまり、戦後に「朝鮮特需」、「賠償特需」、「開発援助」があって、敗戦後の日本経済はそれにより復興し成長に向かった。ところが東アジアを見ると、同時期に内戦と独裁と虐殺があって、日本の経済支援はこちらの財政的社会的基盤になっていたと見なければならない。そしてもちろん、それは世界的には「冷戦期」と言われる時期です。すなわちその時に、植民地から独立した国々が、「第三世界」として繋がろうとした一時期を経て、やがて「反共冷戦」の枠組みに巻き込まれ軍事独裁に進んでしまう。そして、この「反共冷戦」というのはアメリカによる軍事体制のことです。つまり、アメリカの「反共冷戦」があってこれを大きな枠組みとし、その下で日本は「賠償特需」「開発援助」に依りながら経済成長していく。それに対して、植民地から独立した国々は次第に「反共独裁」の政権が支配するようになり、アメ

り力からの軍事支援と日本からの経済支援を受けながら、内戦と虐殺事件を引き起こしている。これらのことが、時期を同じくするというだけでなく、垂直的に構造として成立していたということです。

このような構造、すなわち軍事的・経済的覇権と内戦・独裁が垂直的に結びつくその構図は、ひとつの植民地主義であると言えないだろうか。つまり、第二次世界大戦後の東アジアについては、こういうかたちで植民地主義が継続していると考え必要がある、とわたしは考えます。先ほど、第一次世界大戦後に「民族自決」という考え方が成立して、そこから植民地支配の仕方が大きく変わったといいました。そのころから、「傀儡政権」とか「委任統治」とか変形した形の植民地支配が現れてくるのです。つまり、「植民地」と公然とは主張しにくくなった故にそのような変化が起こっているわけですが、第二次世界大戦後には、それがもっと血にまみれた構図をもって引き継がれているということです。

東アジアの植民地主義経験から学ぶ

そうすると、東アジアの植民地主義経験から学ぶというのは、どういうことになるでしょうか。ここにおいて植民地支配の仕方が変わって、それが多様な形をとるようになったのであれば、「植民地主義」についてはこれまでのように「帝国vs植民地」という二項で考えてはダメで、直轄の「植民地」があり、「自治州」があり、傀儡の「従属国」がありと、さまざまな性格をもつ複雑な支配形態の複合として組織されている。その事態をきちっと見ておくべきだろうということが一つです。

そこから派生することですが、植民地だった地域が「独立」して「独立国家」が成立したからといって、植民地主義はそれでおしまいにならなかったということが二つ目です。「民族自決」という建前から独立にむかい独立国ができる。それなのにその地域では、実際には政治が独裁や内戦に展開して、事実としてはひどい虐殺を誘発してきた歴史がある。東アジアは、そのような血まみれの歴史を経験してきているということです。そうであれば、植民地主義の問題を考えると、その視野を「植民地としての支配の時期」に限定してはならないことになります。つまり、例えば日本の朝鮮植民地支配にしても、その視野を「韓国併合」の1910年から45年までに止めてはならず、その範囲で「植民地支配責任」を語るだけではダメだということです。東アジアでは、「植民地支配」ではないという仕方でも植民地主義が発動されてきた歴史があり、だから植民地主義は植民地の「独立」ということで最終解決にはならないということが、東アジアの経験なのです。そういう経験が事実としてあることをしっかり直視しようということが、まず東アジアの植民地主義経験から学ぶことの非常に重要なポイントだと、わたしは思います。

Ⅱ 沖縄の植民地主義経験とは何か？——ここでも継続する植民地主義の問題

さて、そこで次は沖縄の植民地主義経験の問題です。ここでも「継続する植民地主義」の問題があると、わたしは思っています。まず考えねばならないのは、そもそも沖縄は植民地

なのかという問題ですね。つまり、新川証言から分かるように、沖縄の状況はひどい問題だとは言われていても、それが「植民地」だとか「植民地支配」だとは認識されてこなかったわけで、その沖縄問題が「植民地主義」の問題と考えられるようになったということが一つです。それから、そうであれば、そのときに「植民地主義」というのをどのようなものとして考えねばならないのかという問題ですね。それをやはり考えなくてははいけない。

植民地から独立国になる、独立すればいい、そのような目標を掲げる人たちもいるわけですが、独立することだけでは解決しない。というより、むしろ独立後にひどい血まみれの歴史を持ったというのが東アジアの歴史ですから、沖縄の歴史についても、もう一度「植民地主義」の概念について考えてみる必要があるだろうと思います。

琉球王国の交易関係と近代植民地主義

そこで、近代日本の植民地主義を考える場として「朝鮮」と「琉球」という二つの歴史を想起したいと思います。この朝鮮と琉球とを対比すると、非常に重要な意味があると思えてきます。

ここではまず年表を少し対比してみたいのですが、いずれも14世紀の末尾から15世紀の初め、ほとんど変わらない時期に朝鮮王朝と琉球王朝が成立します。また、日本で朝鮮出兵といい、朝鮮で壬申倭乱と名づけられた豊臣秀吉の軍事行動は、16世紀の最後の時期ですね。これに対して、島津が琉球に侵入して支配を始めるというのは17世紀の初めです。これらもほとんど変わらない時期の事態ですね。朝鮮は秀吉の侵攻を撃退して、琉球は島津のそれに負けてしまったということで、それからあとの関係は変わりますが、琉球藩の琉球処分と朝鮮の併合とを考えると、これもほとんど並行した事態であるとわかります。

また、江戸期の朝鮮通信使というのが有名ですが、これは実は室町期にも、さらに秀吉の朝鮮出兵、つまりいわゆる壬申倭乱の時期にも、すでに行われているのです。江戸期にはそれは12回あって、日本の国情を視察するとか、捕虜返還交渉などが、実際的な目的としてあったようです。それを徳川将軍の代替わりの祝賀みたいな行事に重ねてやっていた。それを考えると琉球も同じで、「謝恩使」や「慶賀使」という名の「江戸上り」の行列が、琉球王や徳川将軍の代替わりの際に行われていた。しかもその時には、わざわざ日本風ではない装束をして来いと島津に指示されている。どうして日本風でない装束が望まれたかというと、それにより徳川にとっては日本の外にも支配が及んでいると顕示できるし、島津はそれを任されているということで幕藩体制内の地位を高められるし、琉球はとりあえず独立国だという体面が保てるということで、それぞれに利益があった。これも、植民地主義支配ではあるが領土として全面征服してはいない形であって、琉球に対する特別な植民地主義の象徴になっていると思います。

琉球王国というのは、14世紀に明の朝貢貿易体制に接続して承認され、15世紀には尚真王により中央集権体制ができて最盛期を迎えるわけですね。この琉球王国が栄えた基礎のひとつに東南アジアとの交易があるわけですが、中国に進貢するために作られたという

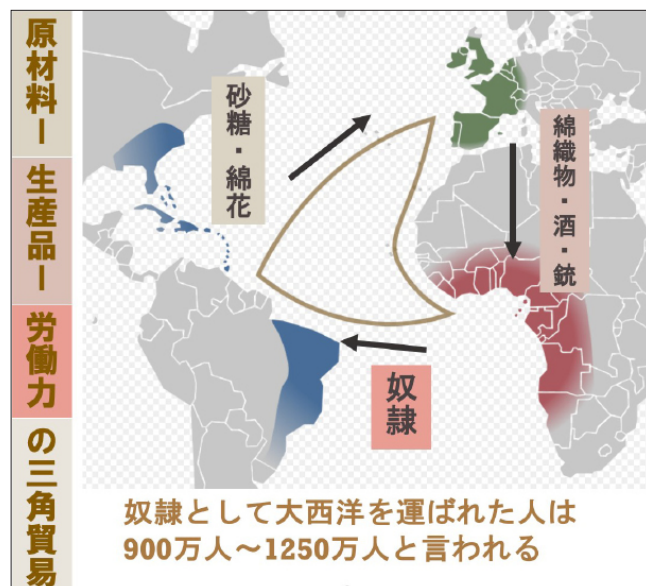
建前で明から供与された進貢船を使って、海路で琉球王国を中心にした交易関係が広がり栄えたということです〔図4〕。中国の陶磁器を明から入手して、それを運んで各地でそれぞれの地域の特産品と交換するのが基本的な交易のかたちであり、馬とか硫黄は琉球産、象牙、その他は東南アジアから、日本からは銅とか錫を持っていったようです。このような仲介交易は、それぞれが自立的な経済圏を持つ各地の特産物の相互交易であり、このとき経済圏はそれぞれ自立していて、その経済圏に特別な特産物を媒介するのが琉球だったわけです。

琉球王国のこのような繁栄の形については、中世における東アジアの交易の特質を示すものとして、その特別な性格を確認しておく必要があるかと思いますが、というのもそれは、近代植民地主義の交易関係と際だった対照が明らかだからです。それを考えるときには、近代植民地主義の交易の原型を確認しておくのがよいでしょう。その原型とは、イギリスが行った大西洋をまたいだ「三角貿易」というものです〔図5〕。つまり、イギリスはヨーロッパから綿織物、酒や銃をアフリカに持ち込み、アフリカではそれを奴隷と交換してそれを新大陸に持ち込み、新大陸では

プランテーションで奴隷に砂糖、綿花を作らせて、それをヨーロッパに持ち込む。これがいわゆる「三角貿易」、つまり原材料と生産品と労働力を連携させた交易なのですね。これにより奴隷として大西洋を運ばれた人は900万から1200万以上と言われておりますが、植民地の生産はモノカルチャーでもっぱら原材料を作る。つまり、自立した経済圏の相互交易



〔図4〕 琉球王国の交易関係



〔図5〕 大西洋をまたぐ三角貿易

なのではなく、生産連関として相互に依存した経済関係がここに作られています。

実はイギリスは、17世紀にはインドから綿織物を輸入しておりました。それが、18世紀にこの新しい三角貿易が確立すると、インドからの綿製品の輸入を制限して、労働力をアフリカで購入し、アメリカの奴隷農園で綿花生産をさせる。そこでできた綿花を輸入して、それをリヴァプールの港からマンチェスターの工場地帯に運んで綿製品を作る。つまり、産業の構造が三角貿易とセットになって循環しているということです。そして、それによって「産業革命」というのが起こりました。ここには、まさに近代的な産業連関が生まれていて、近代的生産力というのはこのような三角貿易という交易の仕方と共に成立したわけです。このように見てくると、それぞれ自立した経済圏が特産品を生み、それを交易船が媒介して、全体として関係づけられる中世期東アジアの交易関係とは随分違うことが、よくわかりいただけるのではないかと思います。

三角貿易と呼ばれる植民地奴隷貿易が、イギリス資本主義の前提を準備している。つまり、近代資本主義の交易は、本源的に植民地主義を前提にしている、まさに植民地主義的な依存関係が原型なのです。これに対して、中華帝国のような近代以前の帝国は、朝鮮や琉球などその他の藩国が帝国と冊封関係をつくって進貢貿易をする。このときに、朝鮮も琉球も藩国として経済圏が自立していて、それぞれ固有の特産品を生み相互にその特産品を交易するという、そういう構図ですね。そうであれば、そこでは藩国はそれぞれ経済的に自立し、文化的にも独立は保たれますね。

これに対して、近代植民地帝国はどうかというと、帝国が出かけていって暴力的威力をもって植民地を作り、それを政治的軍事的に支配することにより従属させて、そこで綿花とか砂糖とかを作らせる。すなわち、もっぱら帝国の産業のための原材料となるものを作らせるかたちで経済的にも従属させる。その関係構造に労働力としての奴隷を組み込めば、まさに支配 - 従属関係が固定した全面的な支配の円環が完成します。

この植民地帝国の支配構造の中で、帝国は製品の供給地として産業構成が高度化する。産業構成が高度化するというのは、要するにいわゆる「産業化」が進展するということです。これに対して、植民地は資源と労働力と市場の供給地となる。ここでは経済的な分業が行われて、その植民地では「低開発の開発」、つまり、産業化がますます遠のく仕方で歴史が進む。これこそが近代植民地主義の構造だということが、それ以前の自立した経済圏を仲介する海洋交易をおこなった琉球王国を内に抱えた中華帝国の版図の型と対比してみると、とてもよくわかると思います。

近代植民地帝国と沖縄の動員

すると、このような帝国の型の違いにおいて、その変化の中であって、沖縄はどうなっていたのでしょうか。かつて中華帝国の下で、それは琉球王国として中継貿易国だったわけですね。それがその地位を失うと、近代植民地帝国の中で、農業が主産業となり、モノカルチャー化していきます。農業人口75%で、人口のほとんどが農業ですね。生産品も農産

物が45%で、しかも多くは畑作で、サトウキビとサツマイモというのが主要な単作になって、そのモノカルチャーになる。そうすると、これにより経済的自立を失いますから、不作など条件が悪い場合には生活必需品を手に入れることさえ困難なほど極度に困窮し、「ソテツ地獄」と呼ばれるような悪性の飢饉が起こったりする。このような経済の構図が成立して、貧困と飢饉が繰り返されるようになっていく。これが、「琉球併合」の後、日本の支配下に完全に入ったあとの沖縄の状況です。

これをうけて沖縄の人々がどう対応したかという、経済的困窮から抜け出すため外地に活路を求めて移民送出県になっていくということです。昭和13年(1938年)までの沖縄からの海外移民数の集計がありますが、その総数は7万2千ほどです〔表3〕。1940年段階での沖縄県の人口は57万ほどですから、その12%を超える人々が移民として海外に向かっている。この移民の初期には日本に併合されて生じた徴兵義務の忌避という動機が主要であったようですが、やがて「ソテツ地獄」などを経験して、次第に経済的苦境からの脱出のための移民が増加していくことになります。モノカルチャー化と労働力の供給地化、沖縄のこのような顕著な事態は、沖縄の植民地状況への構造的な性格変化をはっきり示していると思います。

それに加えて沖縄からの海外移民には、植民地帝国の労働動員という性格、移民ではあっても帝国の政策的な意向から実施された「労働動員」としての性格がまたあったということを確認したいと思います。さきほど触れた「委任統治」に伴うものですね。第一次世界大戦の結果として南洋群島が日本の委任統治下に置かれるわけですが、このとき南洋開発に志向する日本帝国は、それを植民地として統治しようと日本から移民を送り込む政策を実施し、それに経済的な苦境を脱したいと願う多くの沖縄人が応じたということです。まさに、文字通りの「植民地労働動員」と言わなければなりません。サイパン、テニヤンではとくにそれが多くなって、総人口12万9千というそれら群島のなかで、日本人が7万7千人、そのうち過半数の4万5千人が沖縄人によって占められるほどになります。日本の植民地支配の凝縮した姿が、ここに実現したことになります〔表4〕。

しかも、ここでは大和人、沖縄人、朝鮮人、島民という序列をもって実施される差別的労働管理があって、そうであるがゆえに沖縄人はそこで一步でも上昇しようと望み、日本人化への志向を強めていきます。そしてこのことが戦時にはより強烈的な日本人化への意欲に

〔表3〕 沖縄県の国別移住者数「沖縄と移民の歴史」(「第6回世界ウチナーンチュ大会」によせて) より

国名	移住者数
ハワイ	19,507
米国本土	803
カナダ	403
メキシコ	764
キューバ	113
ペルー	11,311
ブラジル	14,829
アルゼンチン	2,754
ボリビア	37
フィリピン	16,426
その他	5,187
総数	72,134

表1:沖縄県の国別移住者数
(明治32年～昭和13年)

資料:琉球政府統計庁「琉球統計年鑑」

〔表4〕 南洋群島の人口構成

総人口	129,972
日本人	77,254
(内)沖縄人	45,701
現地住民	51,725
1939年南洋群島人口構成	

結びついて、アメリカとの最終戦、サイパン戦闘で追い詰められたときには「全員玉砕」という主張まで生み、しかも実際に Banzai Cliff と呼ばれることになる崖から飛び降りる自決を行なう人々が数多く出ました。

そこでいよいよ、沖縄での地上戦における戦場動員に触れなければなりません。沖縄戦での沖縄の人々の犠牲については、もっとも過酷な経験として、追い詰められて行き着いた「集団自決」ということが繰り返し大きな問題になってきました。実際になされた「集団自決」には軍の命令があったのかなかったのかと繰り返し問われて、この論点は裁判の法廷での争点にもなっています。もちろん、そのことが重要でないというのではないのですけれど、それを争うその前提としてもうひとつ、沖縄を本土の楯にするという戦略意図から、捨て石としての植民地の戦場動員があったということから問題を理解しておかなければならないと、わたしは思います。

例えば、その象徴的な表現として長参謀長の言葉が残されています。沖縄配備第32軍で牛島司令官の次の地位にいる軍人ですが、彼は「ただ軍の指導を理屈なしに素直に受け入れ全県民が兵隊になることだ」と呼びかけをしているのです。これを知ると、これはやはり沖縄人に「国民」としての観念を喚起しその自覚の上に奉仕を呼びかけるという教育の回路すら必要と感じていないもので、有無を言わせぬ植民地主義的な戦場動員のかたちだと言わねばならないでしょう。また、学校の生徒たちに対しても西岡という師範学校女子部長は、「戦争に負ければ山河はない。どこへ行っても同じだ」と叱咤します。これは、一般国民の生命を保全する「疎開」という選択肢すら頭から否定し、沖縄の地とその人々を一体的に見て丸ごと生死を共にするよう呼びかけているものと見なければなりません。すなわち、実際に沖縄戦に入る前からのこのような植民地主義的戦場動員こそが、戦闘の最終局面には集団自決を強いる軍命に結びついたということ、つまり「集団自決」は植民地帝国のこのような戦場動員が行き着いた帰結なのだと、やはりわたしは思います。

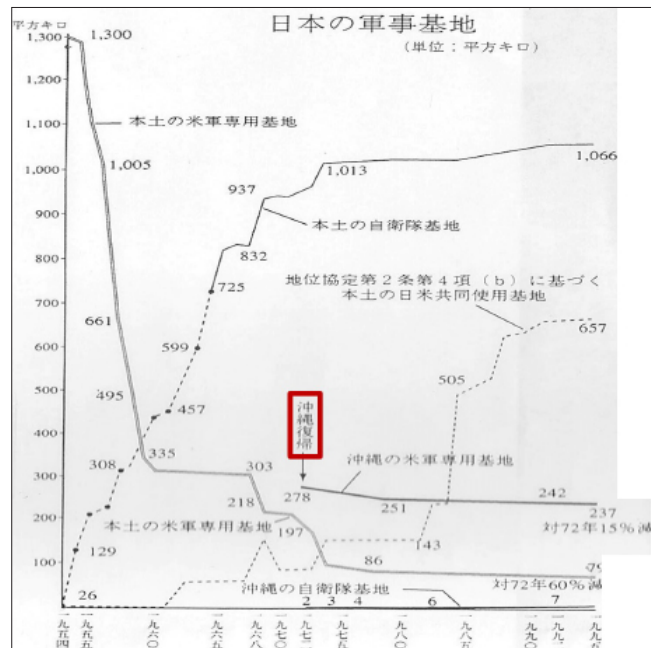
継続する沖縄の資源動員としての軍事基地

それから、植民地主義的動員といえば、もちろん基地の問題を考えなければなりません。かつて日本軍は、植民地沖縄での資源調達として日本軍基地を建設し、それを拠点に沖縄の土地全体を利用して沖縄戦に向かいました。その植民地的資源調達そのままの形が米占領期の米軍基地建設に受けつがれ、「銃剣とブルドーザー」をもってより徹底した形の土地収奪が進み、それが「第三の琉球処分」である「本土復帰」後も継続する米軍占領として現在に続いているわけです。現在の米軍の占用地、特に沖縄本島の中部とそれから北部の訓練場が主な軍の占用地になっていますが、その占用地を見れば、それがそのまま日本軍の基地と戦陣配置と重なっています。そして、首里を中心にした防衛陣形と南部戦跡がまたありますけれど、その日本軍配置が米軍の土地収用に利用されているのも明らかです。

要するに、軍による基地占用の状況というのは、日本軍から米軍へ、沖縄については全然変わっていないと言わざるを得ないわけですね。こうした軍事基地に関わる戦中から戦後

への植民地主義的利用の継続について、沖縄にとって重要なきっかけになったのが、いわゆる「天皇メッセージ」であったことは、よく知られています。「米国が沖縄を保有することにつき日本人に反対があると思えない」と述べたマッカーサー発言と、それに対して「日本人の同意が可能」と応じる天皇メッセージ、これらは1947年の6月と9月のことでした。その1947年という、日本国憲法が発効したのがその5月3日ですから、これら三つはセットなのです。つまり、日本国憲法体制というのは、沖縄の植民地主義的な米占領体制とセットに成立していたというわけです。

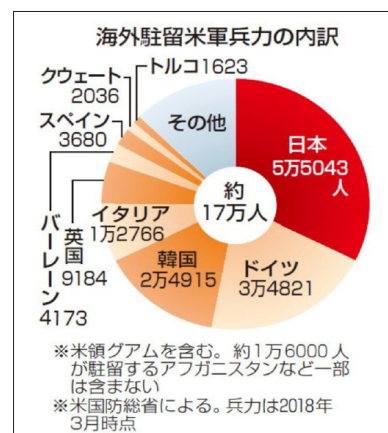
この後のことはよく知られてきていますが、沖縄には現在も巨大なアメリカ軍基地が存在し続けていて、それにより沖縄が米日の軍事同盟体制をずっと支えてきています〔図6〕。もちろん、敗戦後の連合軍による日本の占領期には日本本土にもたくさんの米軍基地があって、それがまさに朝鮮戦争以来の基地国家としての



〔図6〕日本の軍事基地の面積推移

日本の中核を担っていました。それがベトナム戦争の頃には本土の米軍基地が急速に減っていった、沖縄の基地がそれを肩代わりしてもいきます。しかも問題は、沖縄の「復帰」を経て、それにもかかわらず沖縄の米軍専用基地面積は全然変わってないということでしょう。特に復帰後は、本土の米軍基地は明らかに減っていながら、沖縄の米軍基地はほとんど変化がなくて、基地負担が沖縄に集中し沖縄県民だけに不平等を強いるというこの事実はレイシズムではないかと言われています。それは確かに、現在における沖縄について植民地主義を語る重要な根拠になっていると認められます。

しかも、沖縄における米軍基地の存在については、それを出撃基地であり補給基地として中心的に活用したばかりでなく、訓練基地としても重要な役割を担わせたベトナム戦争の時期を経て、とりわけ冷戦解体後の21世紀にはアメリカの世界戦略がヨーロッパ中心からずっと東側に移り、その世界戦略にとっての中心拠点的な役割を求められるようになったという事実が重要です〔図7〕。今日では、「自由で開かれたインド太平洋」とかがよく話題に上り、日本政府もそれを盛んに繰り返していますね。日本、アメリカ、オーストラリア、インドのQuadの連携ということ



〔図7〕各国駐留米軍の実数（『沖縄タイムス』2018年11月26日）

です。その協力が盛んに言われて、それが沖縄の頭越しに進んでいき、しかもそれが沖縄にとっての負担であるばかりでなく新しい脅威の増大にもなっている。21世紀に入った今日のこの事態は、沖縄に対する植民地主義の新たな局面を意味しているようにも思われます。

事実として、アメリカが自国の外に派遣した在外アメリカ軍の基地の所在を見ると、それは日本に一番多く、そして日本に一番多いというのは、実際にはそれが沖縄にあるということです。しかも、その米国外の米軍基地数の増減を見ると、2008年度から18年度にかけて全世界的には減っている(762から514へ)にもかかわらず、日本についてはほとんど減っていない(127から124へ)。そのうちで、特に海兵隊の基地はほとんどが日本にあり、ほとんど日本というのは実際には沖縄にあるということで、海兵隊は上陸作戦とかを展開する外征専門部隊ですから、アメリカの「外征」は間違いなく沖縄から出撃する体制になっているのです〔表5〕。この事実は、沖縄に対する植民地主義支配が、ますます危険なものになっていることを示していると言って過言ではないと思います。

〔表5〕米国外の米海兵隊基地数

米国外の海兵隊基地数		
	2008 年度	2018 年度
総数	26	23
日本	24 (内沖縄 15)	22 (内沖縄 13)
韓国	1	1
ケニア	1	

継続する近代植民地主義と沖縄

要するに、第一次世界大戦以後の時期に植民地主義というのは支配形態においてさまざまなかたちを取るようになっていて、そのことはさきほどアジアについて見てきましたが、沖縄においてもそれは、琉球併合からアメリカ占領、そして「復帰後」とその形態を変化させてきたと分かります。しかしそれでもこの支配は、近代植民地主義としての構図をずっと持続させていて、農業生産のモノカルチャー化、労働力の戦場・植民地動員、戦場・基地としての土地収奪など、明らかにその構図に描かれた通りのことが継続して生起しているわけです。このような近代植民地主義の支配と収奪の構図は、中世の中華帝国と琉球王朝の冊封関係などにおける服属の姿とは確かに違う性質のものです。

だから、そのような近代植民地主義に対抗するには、成立している植民地主義権力に対してどのような関係を作り、具体的にいかにしてその構図そのものを解体し変容させていくのが重要で、沖縄の南洋移民の経験や沖縄戦の果てにあった集団自決の経験というのは、沖縄の人々がその時に「同化主義」と言うべき同化志向をもってあつたために、その結果として苦い帰結を味わったものと見なければならぬのです。それを考えると、「反復帰」というのはそれへの反省を思想化したものと見るべきで、それに対して「復帰論」とか「独立論」とかは、この東アジアと沖縄の植民地主義の経験を踏まえていないと言わざるを得ないように、わたしには思われます。

Ⅲ 民衆の移動と出逢い、他者の声—— 権力に依存しない道を「反復帰論」に学ぶ

そこで最後に、もう時間がだいぶ過ぎてしまったのでごく簡略な形になってしまいますけど、その「反復帰論」に学ぶということについて少しふれたいと思います。そこでまず、

この「反復帰論」と名指される思想が、登場の当初から、沖縄の人々に一時期広く受け入れられた「本土復帰」という帰属志向に反対するだけでなく、そこに潜む意識の権力性そのものに踏み込んで、国民国家という権力の形の解体まで視野に入れていたことを確認しておきましょう。

反復帰論というのは、1970年に出された論集『沖縄の思想』（木耳社）に、新川明さん、川満信一さん、岡本恵徳さん、森崎和江さんらが揃って論考を寄せられ、そこでその全貌が見えてきたものですが、その中核となった新川明さんは、その次の年（1971年）に『反国家の兇区』という本を書かれ、さらに立ち入ってその議論を進めています。そこで新川さんはつぎのように言います。「日本同一化を願う「復帰」思想を打ち砕くことによって、反国家の拠点としての沖縄の存在を確保し、その沖縄の存在をして〈国家としての日本〉を撃つ、つまり国家解体の爆薬として日本の喉元を扼することができるだろうと考える」（81頁）と。とても過激な言葉ですが、「国民国家」という権力の形そのものに抵抗する、そういう思想としてそれが生まれているのは明らかでしょう。ここに反復帰論の起点があります。

もっとも、ここで確認したいのは実はそのことだけではなく、この反復帰論という議論がさらに、そのように権力に抗する立場から、あるいはそもそも権力を行使しない形で、人と人との関係はいかにして構築されるのかを繊細に問う、そういう視角の思想であったという点です。そのことは、同じ論集に寄せられた森崎和江さんの論考「民衆における異集団との接触の思想」を見ると、とてもよく分かります。「反復帰」と言うと、ただ単純に復帰に反対し帰属に反対するだけの議論であると見なされがちですが、実はその中では、権力に依らないでいかにしてどのような新しい関係を作っていくかという社会構成の議論を始めていたということが大切です。

そのことについては『越境広場』10号で書きましたのでぜひ読んでいただきたいのですが、森崎さんはその論考で、既存の支配権力に依存しないで民衆自らが出会いの環境を実際に広げていった、そういう歴史が実際にあると指摘しています。その例として挙げられているのが、「倭寇」のことなのですね。倭寇は民衆が自ら乗り出した海賊行為ですから、そこには間違いなく暴力があって、その暴力により朝鮮の民衆は時に手ひどい被害を受けておりました。森崎さんが指摘されているのは、確かにそれはそうなのだけれど、他面で倭寇は、その時々支配権力に依存しないで別の出逢いを求めて外に出ていこうとする、そういう動きでもあったということです。そしてそれを子細に見るなら実際に、他者であったもの同士が共生を求め育んで新しい関係をつくっていく、そのような歴史的事実も細かく見るとありえたと理解させてくれるのが森崎さんの論考です。

民衆の出逢いにはそんな可能性があったのに、大きな歴史的事実としては、沖縄と朝鮮と本土の民衆のほとんどが近代植民地主義に巻き込まれ、植民地帝国日本の支配体制が拡大し、その植民地支配、植民地主義も膨張していく中で、その出逢いもまた「支配の論理」で組織されてきてしまいました。ですから森崎論考が求めているのは可能性であって、実際の出逢いでは暴力が前面に出ていたのだし、その歴史に深刻な問題を残してしまったの

は明らかだけど、可能性としてはかつて血縁の原理を超えて共同の原理に生活を託す試みがあり得たのだし、これからも、なお反復帰をもって民衆の新しい出逢いを求め続ける可能性は開かれている、と考えることができます。

それからもう一つ、こうした反復帰論の流れを受け継ぐものとして一番重要な論考のひとつが、屋嘉比収さんの『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす』という本であると思います。ここで屋嘉比さんは戦後世代が沖縄戦の当事者となる試みをしていて、その観点から「集団自決か強制集団死か」という論争について考察しています。この論争でそれを「集団自決」と呼ぼうという立場は、事実を住民の自発的な精神、犠牲的精神の発露と見る見方で、これはそれを住民の自発性に基づくもので自己責任だとする国側の主張を支えています。それに対して、いやいや日本軍の強制と誘導があったのだとする対抗議論があって、そこで裁判になっているわけですが、屋嘉比さんはこれに立ち入り、議論のレベルを格段に深めています。

この問題では、事実として縦構造の強制ということ、すなわち日本軍に発する強制の構造があった、それへの動員があったということは、先ず認められねばならない。屋嘉比さんはここから出発します。そして、そこに恒常的な強制があったには違いないのだけど、そこにとどまっていはいけないというのです。強制があったとしても、結果として親が子を、家族同士が殺し合う、転倒した行為に至った事実、つまり沖縄人たちがそこに至ってしまった事実を、その当事者の立場に立って重く受け止めたい。そこまで引き受けようというのが、屋嘉比さんの思考の基底となります。

このような立場は、反復帰論の論者の一人でもある岡本恵徳さんが沖縄の思想の深化として書かれた『水平軸の発想』と志向が同じですね。何かの問題を考えようとするときに、その問題を自分自身が起こすかもしれないということを出発点として、そこからそのことを対象化しようという志向です。「集団自決」ということですが、沖縄にはそこに結びつく息の詰まる人間関係が支配するところがなにかしかあって、それを自分としても感じていたというのが岡本さんの偽らざる感覚でした。だからこそ、そこからどう脱出するべきかが問題なのです。しかも、思想が主体的な営為であるならば、その現場から離れた外在的な批判をするのではなく、沖縄に内在して乗り越えることが問われる、とそこでも考えられています。

すると、沖縄に内在するのはどういうことか。かつて島尾敏雄さんの「ヤポネシア論」というのがあって、そこでは、そもそも本質的な優しさが沖縄にはあると、ある種のファンタジーが語られました。屋嘉比さんの立場はそれとはまったく異なっていて、あくまで集団自決の証言から、つまり愛するがために肉親から手をかけたという事実から出発する。日本軍による上意下達の強制構造があったのは間違いないとしても、それに沖縄自身が同化した、沖縄の人々自身が愛するがゆえに肉親から手をかける志向に同化してしまった。その事実を踏まえた上で、それから離脱する道に進まなければならないということです。このときに屋嘉比さんは、「他者の声を聴く」ということを言われています。集団自決のギリギリの

ところに追い詰められたときに、例えば子どもや老夫婦から「絶対死なない」、「逃げなさい」との声が上がって、それが「他者の声」として与えられる。それに耳を傾けるということが必要で、このときに「共生」から「共死」にまで進もうとしていた沖縄の共同性は、あらためて「共生」へと反転していく、と屋嘉比さんは考えます。

「内なる植民地主義」というのは、最初は新川明さんが言われた言葉で、そこでは植民地主義に同化してしまう沖縄の内なる精神との闘いが意識されていました。集団自決のことを以上のように考えてくると、反復帰論が提起したその問題を屋嘉比さんも受け止めていると分かります。しかもそれを屋嘉比さんは、共同的な関係性のダイナミズムの問題として、つまり「共生」が「共死」に向かうそのギリギリのところで「他者の声」を聴く、そしてその「他者の声」によってあらためて「共生」の道を開いていく、そのようなダイナミックな関係形成の問題として、建て直しています。そしてこれは、かつて反復帰論の立場から「異集団との接触の思想」を紡ぎ始めていた森崎和江さんの思想の営みと明らかに響き合い、それを少し別様に展開させているものだと思います。

反復帰論に沖縄の植民地主義経験が刻印されていることは明らかで、それは継承され深められてきています。今日のお話で重要なポイントですが、東アジアでも沖縄でも、植民地主義は「独立」という形によっては終結しなかったのです。そうであれば、沖縄で深められてきた反復帰論は、東アジアの経験にとっても重要な意味を持つだろうと思われます。反復帰論の思想の歩みは、一見ささやかに見えるけれど、明らかにポスト植民地主義に向かう思想ですね。東アジアは、植民地支配から解放されて独立したとされた後に、ひどい血みどろの暴力が支配する時代を経験してきました。沖縄の経験には、この東アジアがそうした暴力の時代を超えて植民地主義の徹底した克服に向かう鍵があるに違いない、とわたしは思います。

反復帰論の思想経験は、沖縄の植民地主義の経験を基礎にしたものですから、この経験からわれわれはもっと学ばなければならない。それが、今日のお話のとりあえずのまとめになります。終わります。ありがとうございました。

「東アジア連続講演会」講演録 Vol. 2

発行：2024 年 5 月

編集者・発行者 東京外国語大学国際日本研究センター

代表者 友常勉

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラ・グローバル 2F

Tel/Fax : 042-330-5794

東アジア連続講演会

境界と路上を考える

- 2022年6月11日～8月6日（全6回）14時から
- ZOOMにて（ZOOM ID: 847 0652 9757、PASS: 185358）
- 一般公開、お申し込み不要

1972年5月15日、沖縄は日本に「復帰」した。だが、日米間の施政権「返還」は、沖縄が「復帰」に託した抗議や問いかけを解消するどころか、問題をより複雑にした。以来半世紀。沖縄では軍事力の機能強化が格段に進み、日本による＜包摂＞と＜排除＞もとどまるところを知らない。「復帰」の現実には抗議した人々の声は、今日もいたるところに甦り続けている。50年という時をふまえ、戦争と占領に対峙する沖縄の「いま」を考えたい。

◆ プログラム ◆

6月11日（土）：戸邊 秀明 氏 「復帰後史、その半世紀の意味」

6月26日（日）：佐喜眞 道夫 氏

「沖縄という場所からアートを考える」

7月 9日（土）：川満 昭広 氏 × 上原 こずえ 氏

「民衆の視点からの体験の継承と出版」

7月23日（土）：今 郁義 氏 × ウェスリー 上運天 氏

「コザ暴動が問いかけた「復帰」

7月24日（日）：若林 千代 氏 「戦争と米軍占領、そして今」

8月 6日（土）：中野 敏男 氏 「東アジアと沖縄」

【オンライン開催にあたってのお願い】

- ・ ミーティングルームは開始10分前に開室いたします。
- ・ 入室の際は「本名」および「所属」を明記ください。

共催：呉世宗研究室（琉球大学、tejiji527@gmail.com）

基盤研究（B）社会運動における生存権・生存思想の影響とその社会に関する基礎的研究（研究代表：友常勉）

お問い合わせ先（国際日本研究センター）Tel: 042-330-5794 E-mail: in-icjs@tufs.ac.jp

特別企画

沖縄

「復帰」

五〇年という問い